京都大学構内遺跡調査研究年報

1986年度

京都大学埋蔵文化財研究センター

巻首図版

京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区
土取り穴ＳＸ１・ＳＸ２（南から）

序

埋蔵文化財研究センターは，1977年に構内遺跡調査のための学内措置として設立された。以来遺跡の調査と研究をつづけてきた結果，とくに吉田キャンパスでは，縄文から近世にいたる各時代の遺跡が積層している様相を，しだいに明らかにすることができた。調査の成果は，本センターを核として理学部地質鉱物学教室・動物学教室，農学部林学教室，工学部建築学教室，文学部考古学教室など，学内各研究室の積極的協力のもとに学際的研究がすすめられ，また，その成果の保存と活用をめざしてきたのである。じっさい，次々と計画される学内の新営建物の事前調査が主な調査となっているが，不安定な研究組織ときびしい条件のもとで，構成メンバーは懸命な努力を続け，それぞれ注目すべき研究成果をあげてきた。

この報告は，1986年度の遺跡調査研究年報である。第Ⅰ部は1986年度に病院構内，教養部構内，本部構内で実施した調査の報告，第Ⅱ部は構内遺跡を中心に各地の関連する遺跡について検討した研究成果をまとめ，紀要としたものである。御高覧いただき，御批判下さるようおねがいしたい。大学は，その位置する地域に深い根をおろし，その地域の発展に先導的役割をはたしてきたし，今後もはたしつづけなければならない。埋蔵文化財研究センターも，遺跡の調査と研究をいっそう発展させ，保存と活用の実をあげ，他に先がけてその範となるような先駆的実験をくり返していきたい。

終わりに，今回も学内，学外の関係者の方々に御指導，御協力，御助言をいただいた。とりわけ，本学の施設部，医学部，工学部，教養部，木材研究所などの関係者各位にたいし，あらためて謝意を表したい。今後とも変わりない御指導，御協力のほどをおねがいしたい。

1989年3月

京都大学埋蔵文化財研究センター長

西　川　幸　治

例　　言

1　本年報は，京都大学構内で1986年４月１日から1987年３月31日までに発掘，整理作業を終了した埋蔵文化財調査と保存の報告，および京都大学埋蔵文化財研究センターにおける研究成果をまとめたものである。

2　国土座標にしたがって一辺50ｍの方形の地区割りをして，遺跡の位置を表示した。

3　層位と遺構の位置については，国土座標Ⅵ座標系（ｘ＝－108,000　ｙ＝－20,000）が（Ｘ＝2,000　Ｙ＝2,000）となる京都大学構内座標によって表示した。

4　遺構の略号は，奈良国立文化財研究所の方式にしたがって，井戸：ＳＥ，土坑：ＳＫのように表示し，各調査ごとに通し番号を１から付した。

5　遺物には，遺跡の調査名を示すローマ数字と，調査ごとの通し番号を１から付した。この遺物番号は，本文，実測図，写真を通して表示を統一した。

Ⅰ：京都大学教養部構内ＡＬ23区の発掘調査

Ⅱ：京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区の発掘調査

Ⅲ：京都大学教養部構内ＡＰ25区の発掘調査

Ⅳ：京都大学本部構内ＡＸ30区の発掘調査

（例Ⅰ１：京都大学教養部構内ＡＬ23区出土遺物１番）

6　原則として，遺物の実測図は縮尺1/4，遺物の写真は約1/2に統一した。他の縮尺のものは，それぞれに縮尺を明記した。

7　第Ⅰ部の参考文献は，本文中に，〔著者名　発表年〕の形式で表わし，第Ⅰ部の末に一括した。第Ⅱ部については，注に一括して記載した。

8　遺構・遺物の実測と製図は，清水芳裕，五十川伸矢，浜崎一志，宮本一夫，菱田哲郎，難波洋三，三宅由美，盛恵子，上野京子，谷口由利子，西川恵美子がおこなった。遺物の撮影は，清水芳裕，五十川伸矢が担当した。

9　本文の執筆者名は各章の初めに記した。

10　編集は西川幸治の指導のもとに千葉豊が担当し，清水芳裕，五十川伸矢，浜崎一志，森下章司，辰巳ゆかり，西川恵美子が協力した。

京都大学構内遺跡調査研究年報　1986年度

目　　次

第Ⅰ部　1986年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第１章　1986年度京都大学構内遺跡調査の概要 …… 1

1　調査の大要 …… 1
2　調査の成果 …… 1
3　教養部構内ＡＬ23区の試掘調査 …… 3

第２章　京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区の発掘調査 …… 5

1　調査の経過 …… 5
2　層位と遺構 …… 5
3　古代の遺跡 …… 10
4　中世の遺跡 …… 12
5　近世の遺跡 …… 24
6　井戸用材の樹種 …… 33
7　小　　結 …… 34

第３章　京都大学教養部構内ＡＰ25区の発掘調査 …… 37

1　調査の経過 …… 37
2　層　　位 …… 37
3　遺　　構 …… 38
4　遺　　物 …… 39
5　小　　結 …… 42

第４章　京都大学本部構内ＡＸ30区の発掘調査 …… 43
1　調査の経過 …… 43
2　層　　位 …… 43
3　遺　　構 …… 44
4　遺　　物 …… 46
5　小　　結 …… 50
参　考　文　献 …… 52
京都大学構内遺跡調査要項 …… 54

第Ⅱ部　京都大学埋蔵文化財研究センター紀要 Ⅶ

市坂の土器作り …… 63
1　はじめに …… 63
2　聞き取り …… 64
3　浅田家に残る関係資料 …… 70
4　窯跡付近採集品 …… 82
5　市坂の土器作りを巡る２・３の問題 …… 89
6　おわりに …… 108
図　　版 …… 巻末

図 版 目 次

巻首図版　京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区
土取り穴ＳＸ１・ＳＸ２（南から）

1　京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点

2　京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区
1　ＡＪ19区全景（西から）　2　ＡＪ18区西半全景（北から）

3　京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区
1　土坑ＳＫ１（南から）　2　井戸ＳＥ17（南から）
3　土坑ＳＫ６（東から）　4　土坑ＳＫ６（西から）
5　井戸ＳＥ15（東から）　6　井戸ＳＥ18（南東から）

4　京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区
1　井戸ＳＥ５（北から）　2　井戸ＳＥ13（北から）
3　井戸ＳＥ22（南から）　4　井戸ＳＥ16（南から）
5　井戸ＳＥ10（東から）　6　井戸ＳＥ７（南東から）

5　京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区
1　土取り穴ＳＸ11（北から）　2　土取り穴ＳＸ１・ＳＸ２（南から）
3　土取り穴ＳＸ９・ＳＸ10（北から）

6　京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区
ＳＫ１・ＳＥ13・ＳＥ24・ＳＫ６出土遺物

7　京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区
ＳＸ２・ＳＸ９・ＳＸ７・ＳＸ10出土遺物

8　京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区
ＳＫ２出土遺物

9　京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区
井戸用材(1)

10　京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区
井戸用材(2)

11　京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区
井戸用材(3)

12　京都大学教養部構内ＡＰ25区

1　溝ＳＤ３・ＳＤ４（西から）　2　調査区南北畔の層位（西から）

13　京都大学教養部構内ＡＰ25区

1　ＳＤ１・ＳＤ２出土遺物　2　ＳＤ２出土遺物

14　京都大学本部構内ＡＸ30区

1　道路ＳＦ１路面２上面（東から）　2　道路ＳＦ１路面１の轍（西から）

15　京都大学本部構内ＡＸ30区

1　ＳＫ２・黒褐色土・ＳＦ１路面２・茶褐色土出土遺物

2　茶褐色土・ＳＤ８出土遺物

挿　図　目　次

1986年度構内遺跡調査の概要

図１　ＴＲ２・ＴＲ３南壁の層位…… 3

図２　ＳＫ１・ＳＤ３・茶褐色土・茶褐色砂質土出土遺物…… 4

病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区の発掘調査

図３　調査区の層位…… 7

図４　調査区検出の遺構……8・9

図５　ＳＫ１・ＳＥ17出土遺物……11

図６　井戸ＳＥ13……14

図７　井戸ＳＥ23・ＳＥ19・ＳＥ５・ＳＥ４……15

図８　井戸ＳＥ16・ＳＥ22・ＳＥ15・ＳＥ18……16

図９　井戸ＳＥ１・ＳＥ14……17

図10　ＳＥ24・ＳＥ11・ＳＥ13出土遺物……20

図11　ＳＥ28・ＳＥ29・ＳＫ３・ＳＫ６出土遺物……21

図12　ＳＫ５・ＳＥ31・ＳＥ27出土遺物……22

図13　ＳＫ４・ＳＥ26出土遺物……23

図14　土取り穴ＳＸ１・ＳＸ２……24

図15　井戸ＳＥ７・ＳＥ10……25

図16　ＳＸ２出土遺物……28

図17　ＳＸ９・ＳＸ７・ＳＸ５出土遺物……29

図18　ＳＸ10・ＳＸ11出土遺物……30

図19　ＳＫ２出土遺物……31

図20　畚の出土状況……32

図21　畚と枴……32

図22　近世の土取り作業……36

教養部構内ＡＰ25区の発掘調査

図23　調査区南北畔の層位……37

図24　調査区検出の遺構……38

図25　ＳＤ１出土遺物……39

図26　ＳＤ２出土遺物……41

本部構内ＡＸ30区の発掘調査

図27　調査区西壁の層位……43

図28　道路ＳＦ１……44

図29　近世吉田村北部の復原図と白川道の検出地点……45

図30　ＳＫ２・砂取り穴埋土・黒褐色土出土遺物……47

図31　ＳＦ１砂礫層・ＳＦ１路面１・ＳＤ９・茶褐色土・暗褐色土・ＳＤ１・灰褐色土出土遺物……48

図32　ＳＤ８出土遺物……49

市坂の土器作り

図33　市坂の土器窯……64

図34　市坂周辺地図……65

図35　京焼の手轆轤……74

図36　回転台円盤，火掻き棒……75

図37　花餅土型の原型(1)……78

図38　花餅土型の原型(2)……79

図39　花餅土型の原型(3)……80

図40　小塔土型・土印ほか……81

図41　土釜・炮烙，炮烙土型……83

図42　炮烙土型……85

図43　皿……86

図44　製墨用油煙の採取……87

図45　壺類，製墨用油煙受皿ほか……88

図46　奈良女子大学構内出土の近世・近代の土釜・炮烙(1)……92

図47　奈良女子大学構内出土の近世・近代の土釜・炮烙(2)……93

図48　奈良女子大学構内出土の近世・近代の土釜・炮烙(3)……94

図49　木津遺跡第４次調査出土の近世の土釜・炮烙……98

図50　外型と回転台を使った土器作りへ… 101

図51　土器作りの回転台…… 104

図52　深草と今戸の土器作り…… 106

図53　大和の炮烙売り…… 107

表　目　次

表１　中世の井戸一覧……13

表２　井戸用材の樹種……34

表３　京都大学構内遺跡のおもな調査……58

第Ⅰ部　1986年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第1章　1986年度京都大学構内遺跡調査の概要

第2章　京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区の発掘調査

第3章　京都大学教養部構内ＡＰ25区の発掘調査

第4章　京都大学本部構内ＡＸ30区の発掘調査

第１章　1986年度京都大学構内遺跡調査の概要

西川幸治　久馬一剛　清水芳裕　千葉豊

1　調査の大要

京都大学埋蔵文化財研究センターは，吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物新営やその他掘削工事の際には，当該部局の報告にもとづき，予定地の埋蔵文化財の調査を，既知の遺跡との関係や過去の調査結果より，発掘，試掘，立合にわけて実施している。1986年度には，以下の発掘調査３件，試掘調査３件，立合調査８件，資料整理２件を実施した。

発掘調査	教養部校舎新営予定地(教養部構内ＡＰ25区)	(第３章，図版1-167)
	工学部媒体統合実験研究棟新営予定地(本部構内ＡＸ30区)	(第４章，図版1-168)
	放射性同位元素総合センター 有機廃液処理設備室新営予定地(医学部構内ＡＬ20区)	(発掘中，図版1-169)
試掘調査	学生宿舎建設予定地(教養部構内ＡＬ23区)	(第１章，図版1-170)
	附属病院サービスサプライ棟増築予定地(病院構内ＡＨ15区)	(図版1-171)
	農学部附属農場(北部構内ＢＩ32区)	(図版1-172)
立合調査	附属病院内地下水位観測井(病院構内ＡＪ10区)	(図版1-173)
	宇治地区外国人研究者等宿泊施設(京都府宇治市)	(表３)
	教養部校舎新営に伴う配管工事(教養部構内ＡＰ25区)	(図版1-174)
	大型計算機センター電気通信施設設置(教養部構内ＡＳ25区)	(図版1-175)
	吉田地区基幹整備特高変電所新営工事(本部構内ＡW30区)	(図版1-176)
	附属病院精神科棟基幹整備(病院構内ＡＨ10区)	(図版1-177)
	附属病院外科系総合病棟冷却塔改修その他工事(病院構内ＡＫ16区)	(図版1-178)
	附属病院看護婦宿舎電話配管・配線工事(病院構内ＡＪ13区)	(図版1-179)
資料整理	附属病院内科系病棟新営予定地(病院構内ＡＪ18区)	(第２章，図版1-154)
	医学部内科系臨床研究棟新営予定地(病院構内ＡＪ19区)	(第２章，図版1-155)

2　調査の成果

前節で記載した調査のうち，1986年度に整理を終えた15件について，時代別にその成果を略述する。なお，教養部構内ＡＬ23区の試掘調査については本章第３節で，また，個々の発掘調査については第２章以下で詳述する。

縄文時代　　病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区で縄文土器を包含する白川系，高野川系の旧流路を検出した。本調査区の南に位置するＡＦ19区の調査でも高野川系旧流路の上面より縄文後期の土器〔浜崎・宮本87〕が，ＡH19区の調査でも白川系の砂礫層より縄文土器が出土

しており〔京大遺跡調査会88ｂ〕，当時の調査区周辺の地形環境を復原する資料となろう。

古墳時代と奈良時代　本部構内ＡＸ30区で６～７世紀ごろの土師器甕が出土した。また，病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区では，７世紀後半から８世紀初めに属する土坑を検出した。土坑からは須恵器や土師器のほかに鉄滓が出土しており，鉄素材あるいは鉄器の生産に関連した遺構と考えられる。これらは平安京遷都以前の鴨東の歴史の一端を知る資料である。

平安時代　病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区で，井戸を検出した。

鎌倉時代と室町時代　病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区で中世の井戸多数のほかに土坑や溝を検出した。井戸は縦板組がほぼ12～13世紀，石組が13～15世紀の年代を与えることができ，中世前半から後半にいたる井戸側の変遷を明らかにした。これらの井戸は，調査区周辺の地に存在が推定されている福勝院に関わった人々に関連する遺構として貴重な資料となろう。

本部構内ＡＸ30区では中世後半の道路状遺構を検出した。これは古代から近世にわたって，文献で志賀の山越，今道越，白川道などと呼ばれた道に比定できる。本部構内では，ＡＷ28区〔岡田・吉野80〕，ＡＸ28区〔五十川83〕，ＡＷ27区〔京大遺跡調査会88ａ〕の調査で近世白川道の変遷と構造が明らかになっており，今回検出された中世後半の道は近世白川道よりも南へ約20ｍほどずれていることが判明した。古代以来，京と近江を結ぶ重要な幹線としての役割を果たした，この道の歴史的変遷や道路造成にかかわる土木技術などを検討する上で重要な資料となろう。

また，教養部構内ＡＬ23区では中世後半の遺構のみ検出されたが，これは周辺の遺跡の状況をも考慮すると中世後半に新たな土地開発が行なわれたことを示唆する資料となった。

江戸時代　病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区で土取り穴，井戸，野壺，柵列などを検出した。土取り穴は幅2.5～13ｍ，検出長は短いもので10ｍ，長いもので56ｍをはかる大規模なもので，中はいくつかの単位がみとめられ，黄灰色シルト，青灰色シルト，黒灰色粘土を採取するために一定方向より掘削されている。江戸時代の文献によると，粟田焼の陶土として洛東岡崎村の土が岡崎土の名で売買されており，岡崎にほど近い本調査区から採取された土もそれにあたる可能性が高い。埋土からは土を運搬するための竹製品も出土しており，陶土採掘にかかわる実態を検討する上で貴重な資料を得た。

教養部構内ＡＰ25区では18世紀の溝を検出した。これはその位置から判断して，近世吉田村の中口門から西へと伸びていた道路の南北いずれかの側溝にあたると考えられ，近世吉田村周辺の土地利用を解明する資料となろう。

3　教養部構内ＡＬ23区の試掘調査

京都大学学生寄宿舎が楽友会館の東に隣接した地に計画されたため，発掘調査に先立って試掘調査をおこなうこととなり，学生部と埋蔵文化財研究センターが実施した。教養部構内では教養部図書館と吉田食堂建設の事前調査で中世および近世の遺構に加えて縄文・弥生時代の遺構や遺物包含層が明らかにされている。

調査地点を含む教養部南半部は，鳥羽法皇の皇后高陽院泰子が仁平元年(1151)に発願した福勝院の比定地にあたる。『兵範記』の記事などから杉山信三〔杉山62pp.78-82〕や川上貢〔川上77〕らによって当地付近に存在していたことが考察されている。また当地点から近衛通を介して南東へ約50ｍ付近にあたる吉田近衛町遺跡では鎌倉時代の瓦が多量に出土しており，福勝院の修造あるいは廃絶を推定させる資料となっている〔平良ほか78〕。

(1)　層位と遺構（図１）

３ヶ所の試掘地点の地表面は標高約52.5ｍ，表土下の第２層から第５層が遺物包含層で，第７層が北部構内から教養部構内にかけて広く分布する弥生前期末～中期初頭の時期に堆積した黄色砂である。第２～５層の間で出土する遺物は中世後半の15世紀ごろを中心とする土師器，陶器類が主体を占める。また遺構は溝ＳＤ１～ＳＤ３と土坑ＳＫ１を検出したが，いずれも遺物を含まない第６層以下の層を掘り込んでいる。大部分の遺物はこれらの遺構出土のものである。

溝はいずれもほぼ南北方向に平行して掘られている。そのうちＳＤ１では溝の最下面に径20～30cmの礫が数個発見されたが，加工痕もなく，また溝側面に護岸のための工事を施した形跡もなく，それらの性格は不明である。

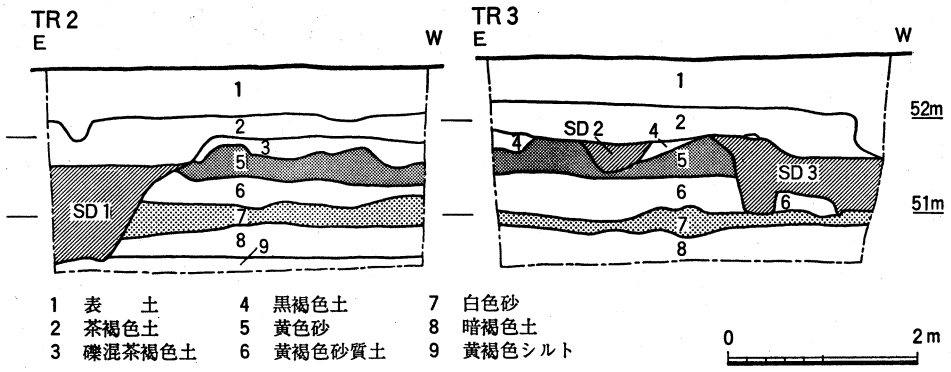


図１　ＴＲ２・ＴＲ３南壁の層位　縮尺1/80

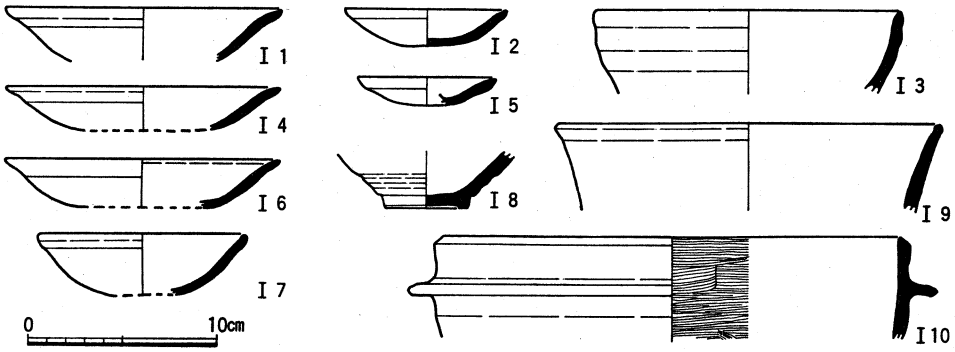


図2　ＳＫ１出土遺物（Ⅰ１・Ⅰ２土師器，Ⅰ３陶器），ＳＤ３出土遺物（Ⅰ４土師器），茶褐色土出土遺物（Ⅰ５・Ⅰ７土師器，Ⅰ８天目椀），茶褐色砂質土出土遺物（Ⅰ６・Ⅰ９土師器，Ⅰ10瓦器）

(2)　出土遺物（図２）

出土遺物の大半は中世後半のものである。口縁が外方へ直線的に開き，内面見込みにわずかな圏線をもつ土師器皿（Ⅰ１・Ⅰ４・Ⅰ６），口縁が外方へ開き，見込み中央に凸部をもつ小型の椀（Ⅰ２・Ⅰ５）および内面見込みにわずかな圏線をもつ椀（Ⅰ７）はいずれも15世紀ごろの特徴を示すものである。これらと共伴して淡緑色の釉をもつ灰釉系陶器椀（Ⅰ3），瀬戸産と考えられる天目椀（Ⅰ８），口縁内外面に撫で調整を施した土師器塩壺（Ⅰ９），口縁端部を面取りし，内面に刷毛目調整を施した瓦器羽釜（Ⅰ10）などが出土した。

この試掘調査で検出した遺構は，いずれも中世後半のものに限られている。近接する教養部構内ＡＰ22区（111地点）では９～10世紀の梵鐘鋳造遺構，古墳時代の方墳，中世前半の時期の多数の遺構や遺物が発見されており，また前述した吉田近衛町遺跡でも鎌倉時代の土器や多数の瓦が出土している。これら周辺の遺跡の状況と比較して今回の試掘地点では中世前半以前の遺物包含層が存在せず，弥生前期末～中期初頭の堆積層の直上に中世後半の遺構や遺物包含層がみられる点で大きく異なっている。

このことはつまり，中世後半の新しい土地利用のために大きな整地がなされ，それ以前の時期の遺構や遺物包含層の大半が除去され，新たな土地利用が始まった中世後半の遺構だけが現在残されたと考えるのが妥当であろう。福勝院に関してみると，もし御堂が存在していた場所であれば，当時の旧地表面の推定からこの整地のためにすべての構築物の痕跡が失われることはないと考えられるが，狭小な範囲の調査であり，今後，周辺の広い範囲での調査が進めば，より明確になるであろう。

第２章　京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区の発掘調査

五十川伸矢　　浜崎一志　　伊東隆夫

1　調査の経過

本調査区は吉田山の西麓，京都大学医学部附属病院構内の東北部に位置する(図版1-154・155)。ここに附属病院内科系病棟と医学部内科系臨床研究棟の新営が計画されたため，1980年に実施したＡＫ18・ＡＪ19区(72・88地点)の試掘調査〔泉・浜崎81pp.41-2〕，1984年に実施したＡＪ19区(142地点)の発掘調査〔京大埋文研87pp.3-6〕の結果にもとづいて，新営予定地全域の発掘調査を実施することになった。調査面積は総計7294.5㎡。調査区は西半のＡＪ18区(154地点)と東半のＡＪ19区(155地点)の２区にわたるが，ここにまとめて報告する。

調査区一帯は12世紀中葉から13世紀後葉に存在したことが伝えられる鳥羽法皇の皇后高陽院泰子発願の福勝院の近隣にあたる。吉田近衛町遺跡では鎌倉時代の瓦が多量に出土した〔平良ほか78〕。本調査区でも古代・中世の井戸を検出しており，福勝院が存在した時期にあたる点は注目にあたいする。調査区の北辺の医学部構内ＡＯ18区(41地点)では，藤原北家勧修寺流吉田氏の邸宅や菩提寺に関連するともおもわれる中世の遺構群を検出し〔泉・吉野79〕，また，ＡＮ18区(142地点)で発見した13世紀前葉の梵鐘鋳造遺構〔五十川・宮本88pp.15-17〕は，教養部構内ＡＰ22区(111地点)の梵鐘鋳造遺構〔五十川・飛野84pp.16-22〕とともに，古代・中世の鋳造工人集団の活動を知る資料となっている。今回の調査では，古代・中世の井戸や土坑のほか，近世の井戸や大規模な土の採取跡を検出した。ＡＮ20区(134地点)を中心とする医学部東半一帯では，14世紀以降の土の採取跡が検出されており〔五十川86〕，土の採取が近接した地で時代を異にしておこなわれている点は，土地利用の変遷とともに土の利用の背景を解明する貴重な資料といえる。なお報告にあたって第６節を木材研究所助教授伊東隆夫が担当し，そのほかを五十川と浜崎が分担して執筆した。

2　層位と遺構

本調査区の現地表は，東北隅で約51.3ｍ，西南隅で約49.1ｍで，北東から南西にむかって緩やかに傾斜する。この一帯は，旧白川の形成した扇状地の扇端部にあたり，鴨川にもほど近い。調査区の層位の一部を図３に示す。層位断面の位置は図４を参照。

調査区東半の東部では近代以降に堆積した表土(第１層)の下には，茶褐色土(第３層)，黒褐色土(第５層)，白色粗砂(第７層)，黄灰色シルト(第８層)が順に堆積しており，これを東半一帯の基本的な層序と考える。このうち，茶褐色土は中世前半の遺物包含層，黒褐色土は無遺物であるが，弥生時代～古代に形成された土壌と考えられる。東半の東部ではこの黒褐色土の上面で井戸や土坑を多数検出した。白色粗砂は白川系河川が運んだもので，特に東半の西部に厚く堆積し，蛇行する白川系流路の基部を確認できる。この白色粗砂中には少量の磨滅した縄文土器が含まれている。黄灰色シルトは調査区全域に広く堆積し，中世・近世には採取の対象となった。東半の西部では茶褐色土上面から掘り込んで，近世に大規模な土取りをおこない，この黄灰色シルトを採取している。また，部分的に白色細砂(第９層)や黒褐色粘土が堆積し，東部では砂礫が厚く堆積している。黒褐色粘土は西半の一部で掘削されている。

調査区西半の基本的な層位は上から，表土(第１層)，暗褐色土(第２層)，茶褐色砂質土(第４層)，黄色シルト混灰色土(第６層)，黄灰色シルト(第８層)，黒褐色粘土(第10層)が続き，その下に，高野川系流路による赤褐色砂礫の厚い層がみられる。暗褐色土は，近世の耕土であり，この直下で黄灰色シルト・黒褐色粘土を採取の対象とする土取り穴を検出した。茶褐色砂質土，黄色シルト混灰色土は，ほとんど遺物を含まず時期は不明である。調査区東半と同様に，赤褐色砂礫の上で白川系河川による白色粗砂の堆積を検出したが，流路は確認できなかった。なお，調査区西半の西部で黄灰色シルトを切り込む高野川系流路を検出した。流路の埋土からは縄文後期の土器が出土している。

調査区の西半と東半をあわせて，古代の井戸・土坑，中世の井戸・溝・土坑，近世の土取り穴・井戸・野壺・柵列などの遺構を多数検出した（図４）.

古代・中世の遺構については，近世の土取りによって古代以降の歴史時代の遺構の基盤となっている黄灰色シルト層が深く掘削されているため，その遺存状況がわるく，地中深くまで構築されている井戸やいくつかの土坑を検出したにとどまった。

近世の大規模な土取り穴は，西半の北辺と南辺，東半の西部で検出した。土取り穴は２～３ｍ四方の小さな区画が並んで列をなすものも多く，東半ではそれが調査区の南端から北端に達するものもあった。列と列の間に0.5ｍ前後の畔が残り，方位はいずれも真北からわずかに東に振る。土取り穴の埋土には，陶磁器を中心とする近世の遺物のほかに膨大な中世の遺物が含まれていた。この土取り穴は，比較的短期間に掘削されたものであり，野壺，井戸，柵列の存在から，一帯は耕地であったと判断できる。

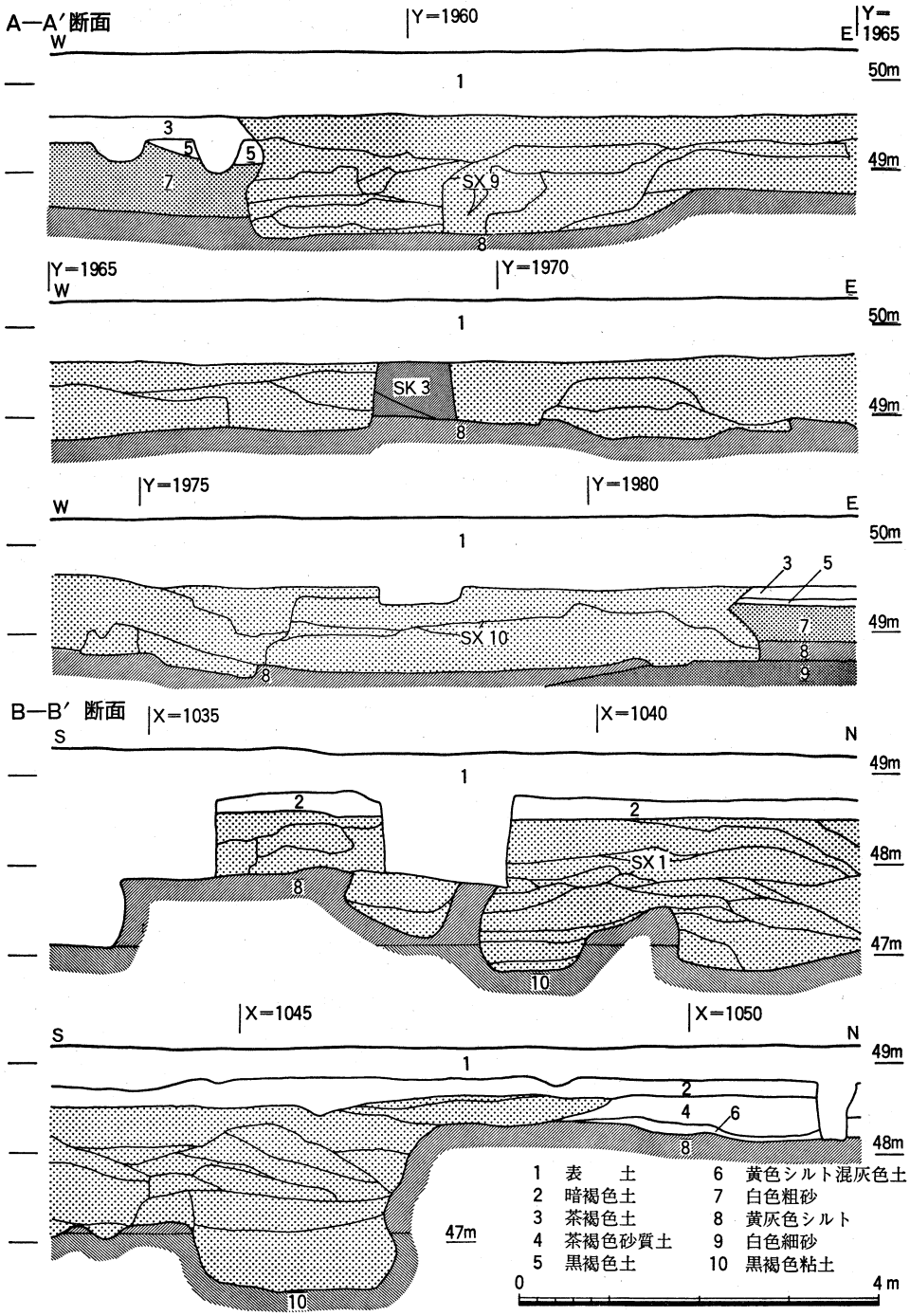
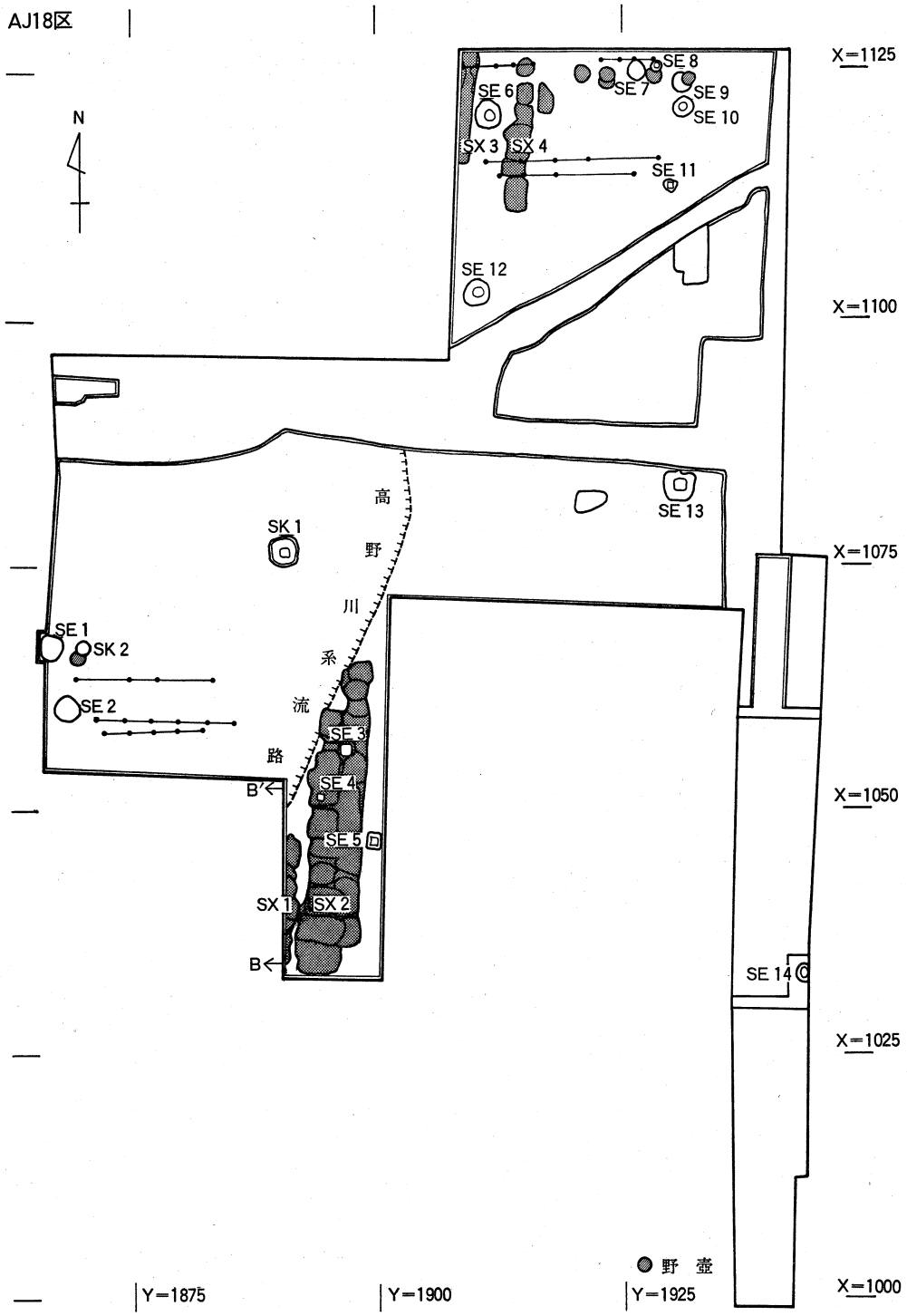


図3 調査区の層位 縮尺1/80


AJ18区
N
X=1125
X=1100
X=1075
X=1050
X=1025
X=1000
Y=1875
Y=1900
Y=1925
SE 6
SE 7
SE 8
SE 9
SE 10
SX 3
SX 4
SE 11
SE 12
SE 13
SK 1
SE 1
SK 2
SE 2
高
野
川
系
流
路
SE 3
SE 4
SE 5
SX 1
SX 2
B'
B
SE 14
野 壺

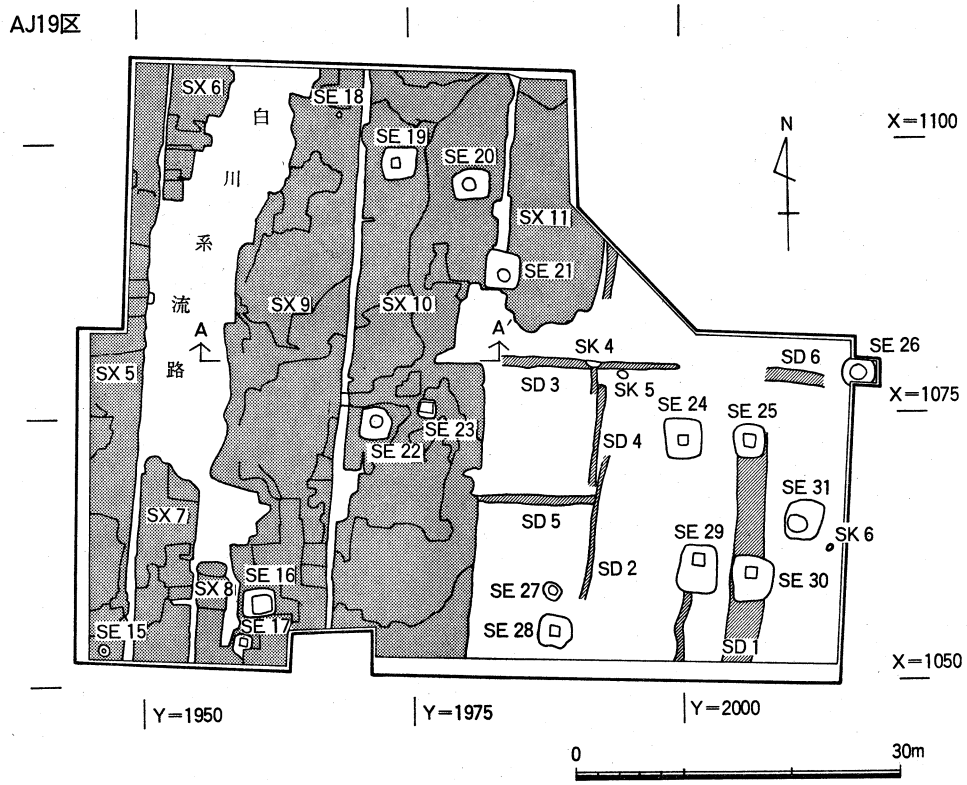


図4　調査区検出の遺構　縮尺1/700

3　古代の遺跡

古代の遺構には，西半検出の土坑ＳＫ１と東半検出の井戸ＳＥ17がある(図版３)。

土坑ＳＫ１は，高野川系旧流路の上面で検出した。直径約３ｍの円形の土坑の下底に一辺約１ｍの方形の掘り込みをもつ。検出面からの深さは約0.8ｍ。ＳＫ１からは須恵器や土師器のほかに，にぎりこぶし大の鉄滓と粘土塊や炭化物がまとまって出土し，鉄の素材あるいは鉄器の生産にかかわる遺構であると推測できる。このＳＫ１の年代から，高野川系の流路が埋積したのは７世紀後半以前と考えられる。

井戸ＳＥ17は，井戸(いどがわ)側に平面方形の縦板組木枠をめぐらせ，水溜(みずだめ)には曲物を設置している。横桟や隅柱は認められない。近世の土取り穴ＳＸ９に一部を切り取られているため縦板組の遺存状態も悪く，詳細な構造は不明である。水溜の曲物は２段に重ねられているが，重なり位置にずれがあるため，修復によって２段重ねになった可能性もある。

ＳＫ１とＳＥ17の出土遺物を図５に示す。Ⅱ１～Ⅱ５はＳＫ１出土遺物。そのうちⅡ１～Ⅱ３・Ⅱ５はＳＫ１内の方形の掘り込みから出土した。Ⅱ１～Ⅱ３は土師器小型甕，いずれも煤が付着している。Ⅱ２・Ⅱ３は，ともに球形の胴部をもち，内外面に刷毛目を施し，口縁部に撫でを施す。内面は刷毛目ののち押圧を加える。Ⅱ３では胴部上半部に粘土紐の継目が見え，外面の下半部を削って仕上げる。外面の上半には沈線が部分的に施されまた胴部最大径のやや下に擦れて磨滅している部分がある。Ⅱ１は他の２例とは異なり，胴部上半，口縁部内面に回転を利用した刷毛目を施す。底部の形態も平気底味で，内面に凹凸が少なく，須恵器壺類のそれを思わせる。Ⅱ４・Ⅱ５は須恵器杯蓋。ともに天井部に篦削りを施し，Ⅱ４の内面にはかえりが付く。このほかに，須恵器杯・甕・長頸壺などの破片が出土している。これらは，７世紀後半から８世紀初めの年代を示す。

Ⅱ６～Ⅱ16はＳＥ17出土遺物。Ⅱ６～Ⅱ９は土師器皿。口縁部の形態は，「て」字状口縁手法B_1類を示す。器壁は厚いもの(Ⅱ６)と，やや薄いもの(Ⅱ７～Ⅱ９)がある。Ⅱ10は灰釉系陶器椀の底部。底部外面に墨書銘があるが，判読できない。Ⅱ11は須恵器壺の底部。高台は外に踏んばる形態を示す。Ⅱ12は緑釉陶器椀。須恵質に焼成され低い高台をもつ。Ⅱ13・Ⅱ14は土師器甕。ともに口縁端部はわずかに屈曲し，内外面ともに撫でによる調整を施す。Ⅱ15は土師器鉢。内面には緻密な篦磨きを施し，外面は篦削りの後，篦磨きを施す。口縁端部は小さく屈曲する。Ⅱ16は須恵器甕である。これらは，10世紀ごろのものと考えられる。

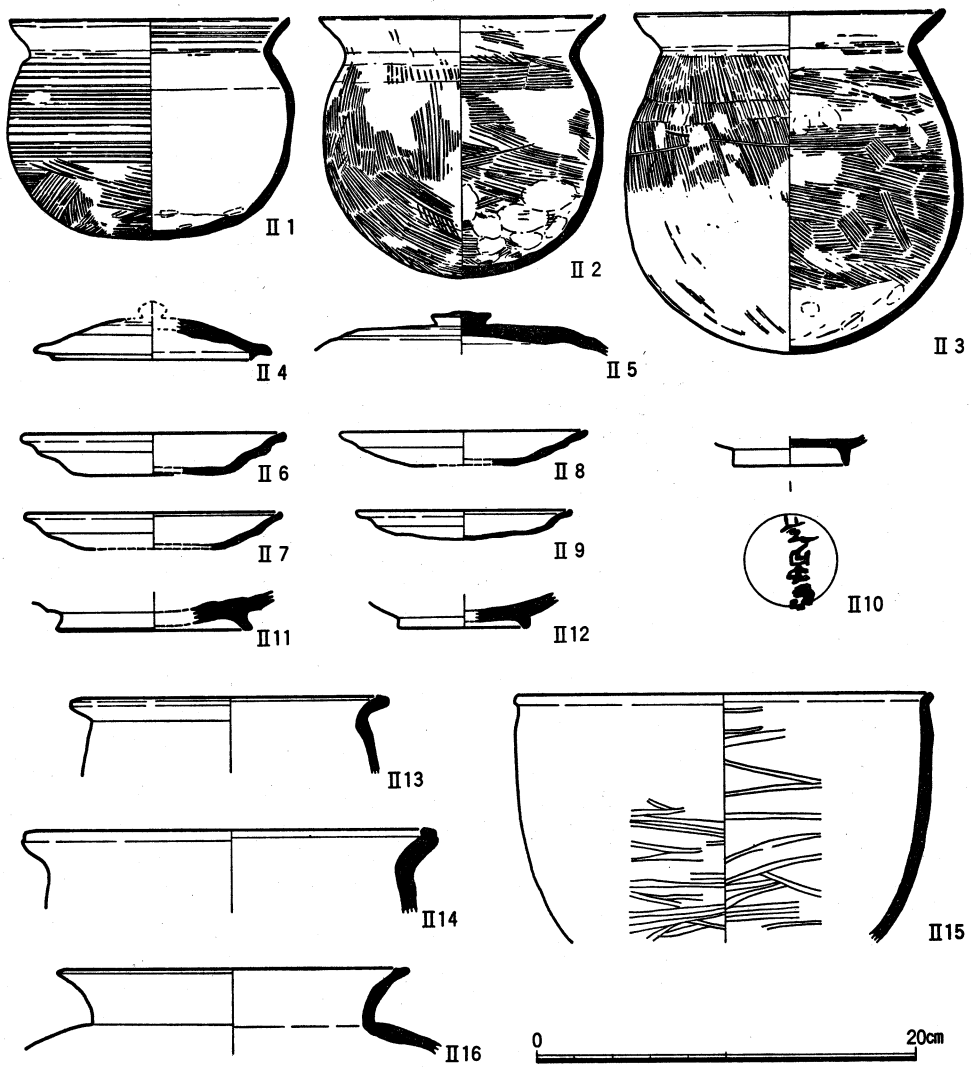


図5　ＳＫ１出土遺物（Ⅱ１～Ⅱ３土師器，Ⅱ４・Ⅱ５須恵器），ＳＥ17出土遺物（Ⅱ６～Ⅱ９・Ⅱ13～Ⅱ15土師器，Ⅱ10灰釉系陶器，Ⅱ11・Ⅱ16須恵器，Ⅱ12緑釉陶器）

本部構内から病院構内の一帯に立地する古代の遺構には，ＡＴ27区（75地点）の竪穴住居跡〔五十川81 pp.29-31〕，ＡＰ22区（111地点）の梵鐘鋳造遺構〔五十川・飛野84 pp.16-22〕，ＡＮ18区（143地点）の河川〔五十川・宮本88p5〕，ＡＦ14区（39地点）の護岸〔岡田81 pp.21-2〕，本調査区の南に隣接するＡＨ19区の竪穴住居跡の可能性をもつ土坑〔京大遺跡調査会88b〕などがあるが，分布は稠密ではない。これは，平安中期ごろまで高野川が現在より東側を流れ，一帯は白川系の河川が時折氾濫する不安定な土地であったためであろう。

4　中世の遺跡

中世の遺構には，井戸，土坑，溝がある。井戸は，西半よりも東半に密に分布している。また，近世の土取り穴の埋土には近世の土師器や陶磁器とともに，中世の遺物が多量に含まれており，これによって破壊された中世の土坑などの遺構が存在したと想定できる。

(1)　中世の遺構（図版３・４，図６～９，表１）

井　戸　　ここでは，おもなものについて説明する。それぞれの井戸の井戸側，水溜などの構造や年代，井戸底の標高については，表１を参照されたい。なお，石組を木枠や桶枠に作り替えたものは，それぞれ別種のものとしてあつかった。

井戸の構造は，縦板を方形に組んだものと，円筒形の石組のものに大きくわけられる。まず，平面方形の縦板組の井戸には，ＳＥ４，ＳＥ５，ＳＥ13，ＳＥ16b，ＳＥ19，ＳＥ23，ＳＥ28などがあるが，そのうち，最も遺存状況の良好であったＳＥ13について詳しくみることにしよう。

ＳＥ13の井戸側は，2，3重の縦板からなり，内法は75cm×75cmをはかる。最も内側の縦板に幅27～28cm，厚さ約２cmの比較的良好な板材が用いられている。外側の縦板は幅10～20cmのやや薄手のものが多い。この縦板からなる井戸側は，枘（ほぞ）を切って組んだ横桟と，横桟の滑り落ちを防ぐための隅柱によって支えられる。隅柱はいずれも横桟の間に置かれただけのもので，井戸側の上端まで達したものはなく，長さも約22cmと短い。ＳＥ13は縦板の井戸側の下段に，方形横板組の井戸側をもつ。下段の井戸側も上段同様，横桟によって支えられている。上段と下段の井戸側の間にはわずかな隙間があり，所々に石が挟みこまれている。最下段には，長径55cm，短径45cm，深さ27cmの曲物の水溜をもつ。なお，埋土の中から直立した竹が１本出土した。節が多く，やや細いことから，古井戸を埋め戻す時の儀式等に使用したものではなく，井戸の水を汲む容器を釣るした柄のようなものと考えられる。

次に，円筒形の石組もつものにＳＥ１，ＳＥ２，ＳＥ12，ＳＥ14，ＳＥ16a，ＳＥ20，ＳＥ21，ＳＥ22a，ＳＥ26，ＳＥ27，ＳＥ31がある。これらの石組の下には，横板を1，2段に組んで木枠を構成しているものが多く，ＳＥ14のように，さらにその下に水溜として曲物を設置するものもある。木枠は通常四隅を鉄釘で固定している。

石組の井戸ＳＥ22aの井戸側の一部を改造したＳＥ22bでは，井戸側に桶を設置している。また，おなじく石組の井戸ＳＥ16aの井戸側を改造したＳＥ16bでは，石組の内部に縦板横

桟止めの井戸側を設置している。

また，ＳＥ15やＳＥ18は，井戸側の最下部と考えられる石組と水溜部が残り，掘形や井戸側の上部の構造が不明なものである。これらの井戸は，小型で井戸底の標高が高い。ＳＥ18の水溜は曲物を設置している。

このほか，井戸の底部に木枠の痕跡がかろうじて遺存するが，その組方の細部や木枠よりも上部の構造がまったく不明なものがいくつかある。これらは，まったくの素掘りであったと考えるよりも，木枠の遺存状態が良好ではなかった場合をはじめ，石組のほとんどを失っていたＳＥ31のように，木材や石を抜き取って再利用したためと考えたほうがよいだろう。

これらの井戸の構造は，縦板組がほぼ12～13世紀に，石組が13世紀前葉～15世紀に採用されており，中世前半から後半にいたる井戸側の変遷をたどることができる。また，井戸の分布はやや東に密ではあるが，一定の時期に井戸が特定の地域に偏るといった傾向はなく，調査区一帯が生活空間としては，比較的まんべんなく利用されていたことを物語っている。

表１　中世の井戸一覧

井戸	掘形	構造	年代	底の標高
ＳＥ１	円形	石組＋横板	15世紀	45.6ｍ
ＳＥ２	円形	石組＋曲物？	13世紀前葉	46.8ｍ
ＳＥ３	方形	不明＋曲物	13～15世紀後葉	46.6ｍ
ＳＥ４	方形	縦板組隅柱横桟止め	13世紀前葉	45.5ｍ
ＳＥ５	方形	縦板組隅柱横桟止め	12世紀後葉～13世紀前葉	47.7ｍ
ＳＥ８	円形	不明	13世紀後葉	48.2ｍ
ＳＥ11	方形	不明＋方形木枠	12世紀中葉	48.3ｍ
ＳＥ12	円形	石組＋曲物？	14世紀前葉	46.5ｍ
ＳＥ13	方形	縦板組隅柱横桟止め＋横板＋曲物	12世紀中葉	46.3ｍ
ＳＥ14	円形	石組＋横板＋曲物	14世紀後葉～15世紀	46.5ｍ
ＳＥ15	不明	石組	12世紀中～後葉	48.2ｍ
ＳＥ16ａ	方形	石組＋木枠	13世紀前～中葉	46.6ｍ
ＳＥ16ｂ	方形	縦板横桟止め	13世紀前～中葉	46.6ｍ
ＳＥ18	不明	石組＋曲物	12～13世紀	48.4ｍ
ＳＥ19	方形	縦板組隅柱横桟止め	12世紀中～後葉	46.9ｍ
ＳＥ20	円形	石組＋木枠	12世紀中～後葉	46.9ｍ
ＳＥ21	方形	石組＋木枠＋木枠	14世紀中葉	46.3ｍ
ＳＥ22ａ	円形	石組＋木枠	14世紀中葉	46.5ｍ
ＳＥ22ｂ	円形	桶＋木枠	14世紀中葉	46.5ｍ
ＳＥ23	方形	縦板組横桟止め＋木枠	13世紀前～中葉	46.9ｍ
ＳＥ24	方形	不明＋木枠	12世紀前葉	46.9ｍ
ＳＥ25	方形	不明＋木枠	12世紀中～後葉	47.2ｍ
ＳＥ26	円形	石組＋木枠	14世紀後葉～15世紀	46.7ｍ
ＳＥ27	円形	石組＋木枠＋木枠	14世紀前葉	45.7ｍ
ＳＥ28	方形	縦板組横桟止め	12世紀中～後葉	46.8ｍ
ＳＥ29	方形	不明＋木枠	12世紀中～後葉	47.2ｍ
ＳＥ30	方形	不明＋木枠	12世紀中～後葉	46.9ｍ
ＳＥ31	方形	石組＋木枠＋木枠	14世紀前葉	46.5ｍ

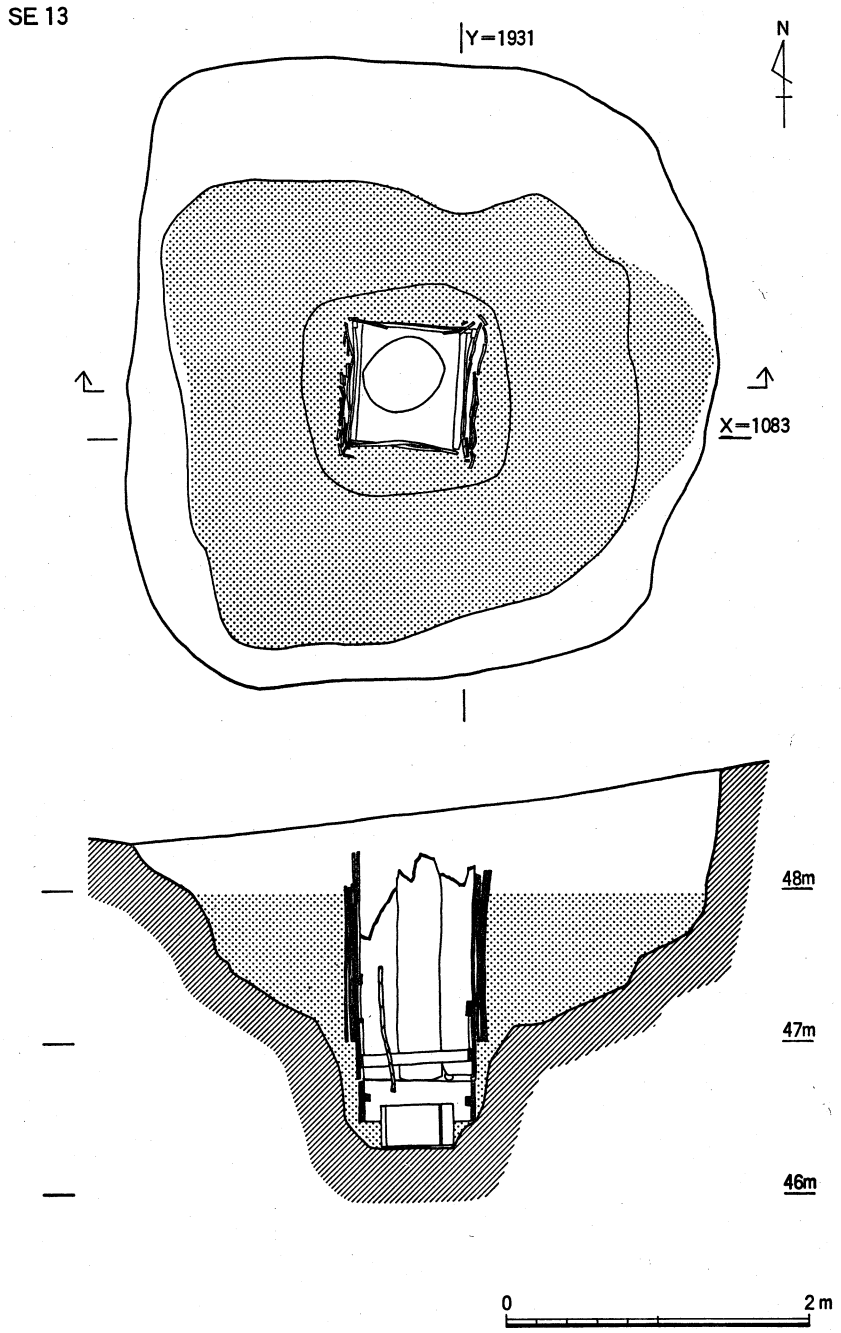


図６　井戸ＳＥ13　縮尺1/50

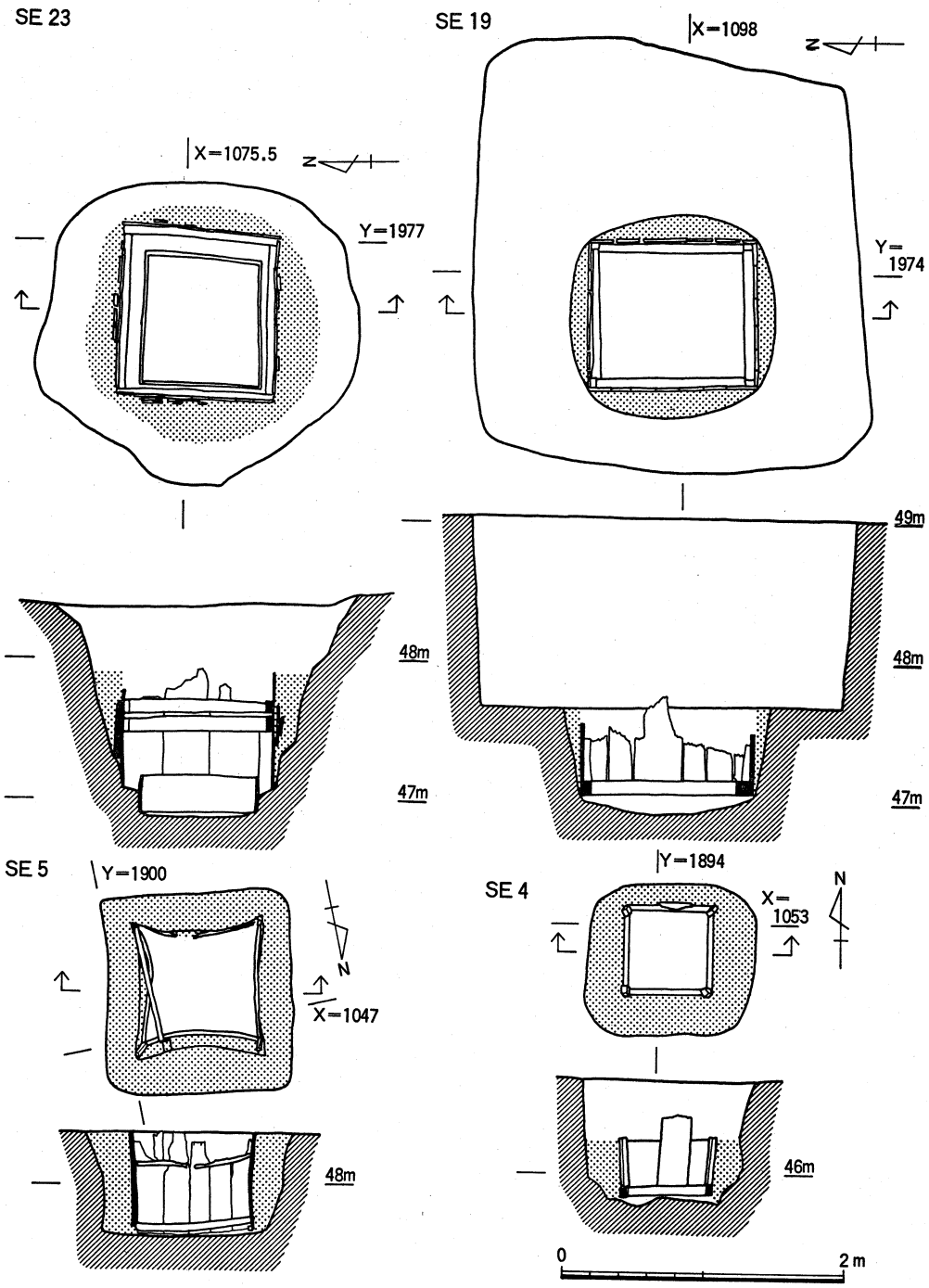


図7　井戸ＳＥ23・ＳＥ19・ＳＥ５・ＳＥ４　縮尺1/50

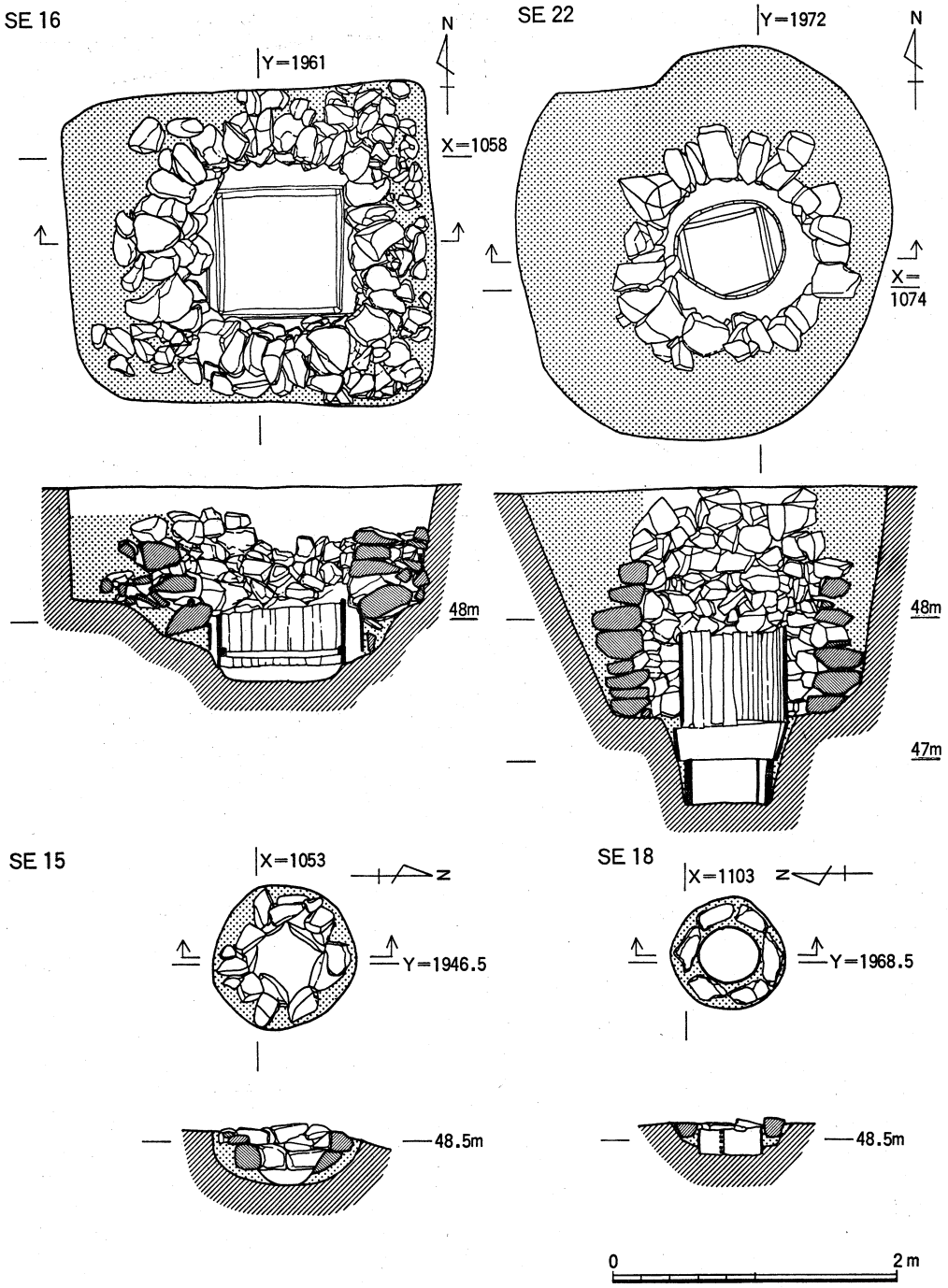


図８　井戸ＳＥ16・ＳＥ22・ＳＥ15・ＳＥ18　縮尺1/50

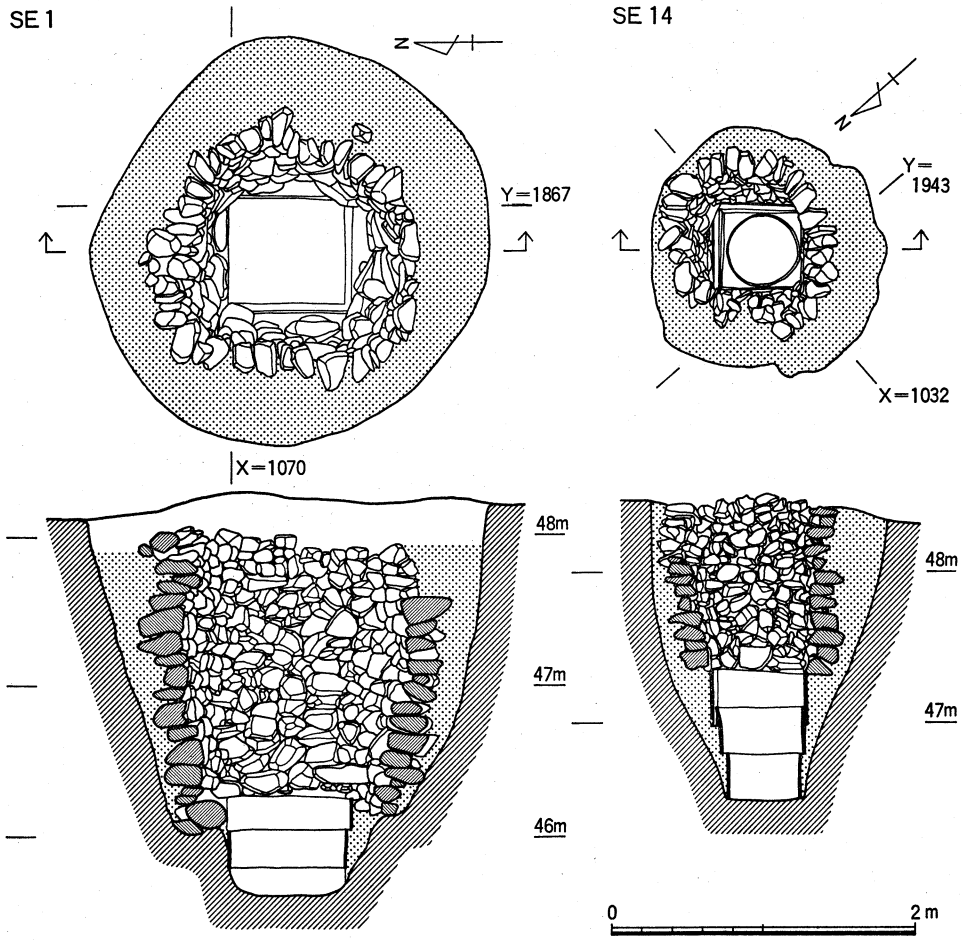


図9　井戸ＳＥ１・ＳＥ14　縮尺1/50

土　坑　　調査区東半の東端で検出した土坑ＳＫ６は，上部が直径約60㎝の不整円形ですり鉢状を呈し，深さは検出面から約60㎝。底部は一辺25㎝の方形になっている。この底部から，土師器皿と赤褐色に焼成した長胴の土師器の壺が出土した。墓あるいは鎮壇のような宗教的な遺構の可能性がある。また，東半に小規模な土坑ＳＫ３～ＳＫ５がある。いずれも土器溜で，土師器，瓦器，陶磁器などが出土した。このほか，近世の土取り穴の埋土からは，中世の遺物が大量に出土しているため，大規模な土器溜があった可能性がある。

溝　　東半でＳＤ１～ＳＤ６を検出した。方位を真北からやや東に振るものが多い。出土遺物が少量で年代幅が広いため，時期の特定はできない。12～15世紀のあいだにおさまるものと考える。

(2) 中世の遺物（図版６，図10～13）

井戸や土坑からは，比較的まとまった量の土師器，須恵器，瓦器，陶磁器などの遺物が出土した。以下に遺構ごとに説明する。

Ⅱ17～Ⅱ33はＳＥ24出土遺物。Ⅱ17～Ⅱ31は土師器皿。Ⅱ17・Ⅱ18・Ⅱ26は２段撫で素縁手法C_3類，Ⅱ19・Ⅱ20・Ⅱ27は２段撫でつまみ手法C_4類，Ⅱ21・Ⅱ22・Ⅱ28は２段撫で面取り手法C_5類，Ⅱ23・Ⅱ24・Ⅱ29・Ⅱ30は１段撫で素縁手法D_3類，Ⅱ25・Ⅱ31は１段撫で面取り手法D_4類の口縁形態を示し，２段撫で手法のほうが１段撫で手法より多い。口径は皿ＡⅠが15cm，皿ＡⅡが10cmにそれぞれピークがある。Ⅱ32は土師器受皿。Ⅱ33は瓦器椀。見込みに螺旋状暗文，口縁部外面に篦磨きを施す。橋本久和編年のⅡ－２にあたる。平安京Ⅳ期古段階ごろの資料である。

Ⅱ34～Ⅱ47はＳＥ11出土遺物。Ⅱ34～Ⅱ37・Ⅱ39～Ⅱ46は土師器皿。Ⅱ34・Ⅱ35・Ⅱ37・Ⅱ39・Ⅱ40は２段撫でつまみ手法C_4類，Ⅱ36は２段撫で素縁手法C_3類，Ⅱ41～Ⅱ45は１段撫で面取り手法D_4類，Ⅱ46は１段撫で素縁手法D_3類。Ⅱ47は土師器の受皿。Ⅱ40・Ⅱ42・Ⅱ45は口縁に煤が付着する。Ⅱ38は口縁が短く外反する土師器の鉢。器壁はかなり荒れている。平安京Ⅳ期中段階ごろの資料である。

Ⅱ48～Ⅱ54はＳＥ13出土遺物。Ⅱ48～Ⅱ53は土師器皿。Ⅱ49・Ⅱ51はC_4類，Ⅱ48・Ⅱ50・Ⅱ52・Ⅱ53はD_4類。Ⅱ54は灰釉系陶器椀。貼付け高台の畳付けに籾殻圧痕を残す。平安京Ⅳ期中段階ごろの資料であろう。

Ⅱ55～Ⅱ62はＳＥ28出土遺物。Ⅱ55～Ⅱ61は土師器皿。Ⅱ55はC_4類，Ⅱ56はC_5類，Ⅱ57・Ⅱ58・Ⅱ60はD_3類，Ⅱ59・Ⅱ61はD_4類で，D_3類の比率が高い。口径は皿ＡⅠが15cm，皿ＡⅡが９cmにそれぞれピークがある。Ⅱ62は土師器甕。平安京Ⅳ期中～新段階の資料であろう。

Ⅱ63～Ⅱ71はＳＥ29出土遺物。Ⅱ63～Ⅱ67・Ⅱ69～Ⅱ71は土師器皿。Ⅱ63はC_3類，Ⅱ64はC_4類，Ⅱ65はC_5類，Ⅱ66・Ⅱ69はD_3類，Ⅱ67・Ⅱ70はD_4類で，D_3類とD_4類とで過半数をしめる。口径は皿ＡⅠが14cm，皿ＡⅡが９cmにそれぞれピークがある。Ⅱ68は土師器受皿。Ⅱ71は土師器皿。轆轤成形によるもので，底面に糸切り痕を残す。平安京Ⅳ期中～新段階の資料であろう。

Ⅱ72～Ⅱ80はＳＫ３出土遺物。Ⅱ72～Ⅱ80は土師器皿。Ⅱ72・Ⅱ77はC_3類，Ⅱ73・Ⅱ78はC_4類，Ⅱ74はC_5類，Ⅱ75・Ⅱ80はD_3類，Ⅱ76・Ⅱ79はD_4類で，D_3類の比率が高い。口径は皿ＡⅠが14cm，皿ＡⅡが９cmにそれぞれピークがある。平安京Ⅳ期中～新段階の資料

であろう。

Ⅱ81～Ⅱ88はＳＫ６出土遺物。Ⅱ81～Ⅱ87は土師器皿。Ⅱ81～Ⅱ86は１段撫で面取り手法D_5類，Ⅱ87はE_1類。口径は皿ＡⅠが14cm，皿ＡⅡが９cmにそれぞれピークがある。Ⅱ88は土師器壺。轆轤回転を利用した撫でによって調整し，底部に糸切り痕を残す。中世京都Ⅰ期中段階ごろのものであろう。

Ⅱ89～Ⅱ97はＳＫ５出土遺物。Ⅱ89～Ⅱ91・Ⅱ95は赤褐色を呈する土師器皿。Ⅱ89はD_4類，Ⅱ90・Ⅱ91・Ⅱ95はE_1類。Ⅱ92～Ⅱ94・Ⅱ96は灰白色を呈する土師器椀。Ⅱ92～Ⅱ94はE_1類，Ⅱ96はE_2類。口径は皿ＡⅠが12cm，皿ＡⅡが９cm，椀ＡⅠが13cmにそれぞれピークがある。Ⅱ97は灰白色を呈する三足付皿。中世京都Ⅱ期古段階ごろのものであろう。

Ⅱ98～Ⅱ105はＳＥ31出土遺物。Ⅱ98・Ⅱ99・Ⅱ102・Ⅱ103は赤褐色を呈する土師器皿。Ⅱ98はD_6類，Ⅱ99・Ⅱ102・Ⅱ103はE_1類。Ⅱ100・Ⅱ101は灰白色を呈する土師器椀で，E_1類。口径は皿ＡⅠが12cm，皿ＡⅡが８cm，椀ＡⅠが12cmにそれぞれピークがある。Ⅱ104は土師器鉢。内外面ともに横方向の撫でを施す。Ⅱ105は瓦器鍋。口縁端部は肥厚し，屈曲はあまい。これらは中世京都Ⅱ期古段階ごろの資料である。

Ⅱ106～Ⅱ115はSE27出土遺物。Ⅱ106・Ⅱ107・Ⅱ109・Ⅱ110は赤褐色を呈する土師器皿。Ⅱ106・Ⅱ107・Ⅱ110はE_1類，Ⅱ109はD_5類。Ⅱ108は灰白色を呈する土師器椀で，E_1類。口径は皿ＡⅠが12cm，皿ＡⅡが８cm，椀ＡⅠが11～12cmにそれぞれピークがある。Ⅱ111は白磁皿。Ⅱ112は鎬蓮弁文青磁椀。Ⅱ113は青磁洗。Ⅱ114は白磁四耳壺。Ⅱ115は須恵器すり鉢。口縁端部は上下に拡張する。中世京都Ⅱ期古段階ごろのものであろう。

Ⅱ116～Ⅱ127はＳＫ４出土遺物。Ⅱ116～Ⅱ121は土師器皿。Ⅱ116・Ⅱ117・Ⅱ119はE_1類，Ⅱ118・Ⅱ120・Ⅱ121はE_2類。Ⅱ122～Ⅱ124は土師器椀。Ⅱ122・Ⅱ123はE_1類，Ⅱ124はE_2類。口径は皿ＡⅠが11cm，皿ＡⅡが８cm，椀ＡⅡが７cmにそれぞれピークがある。Ⅱ125は瓦器椀。内面にあらい螺旋状暗文を施す。橋本編年Ⅳ－２ごろに相当する。Ⅱ126は白磁皿。Ⅱ127は青磁椀。中世京都Ⅱ期中段階ごろの資料であろう。

Ⅱ128～Ⅱ136はＳＥ26出土遺物。Ⅱ128～Ⅱ130は土師器皿。Ⅱ128はF_2類，Ⅱ129はF_3類，Ⅱ130はE_4類。Ⅱ131は土師器椀でE_3類。Ⅱ132は瀬戸あるいは美濃産の片口。Ⅱ133は褐釉陶器壺。Ⅱ134は須恵器すり鉢。口縁端部は上に大きく拡張する。Ⅱ135は鉄釜。口縁端部は内部に大きく拡張し，段をなす。Ⅱ136は備前甕。口縁は玉縁状をなす。出土土師器がきわめて少ないが，中世京都Ⅱ期新段階からⅢ期にかけてのものであろう。

このほか，包含層から鞴の羽口，坩堝や鋳型が出土した〔五十川88p52〕。

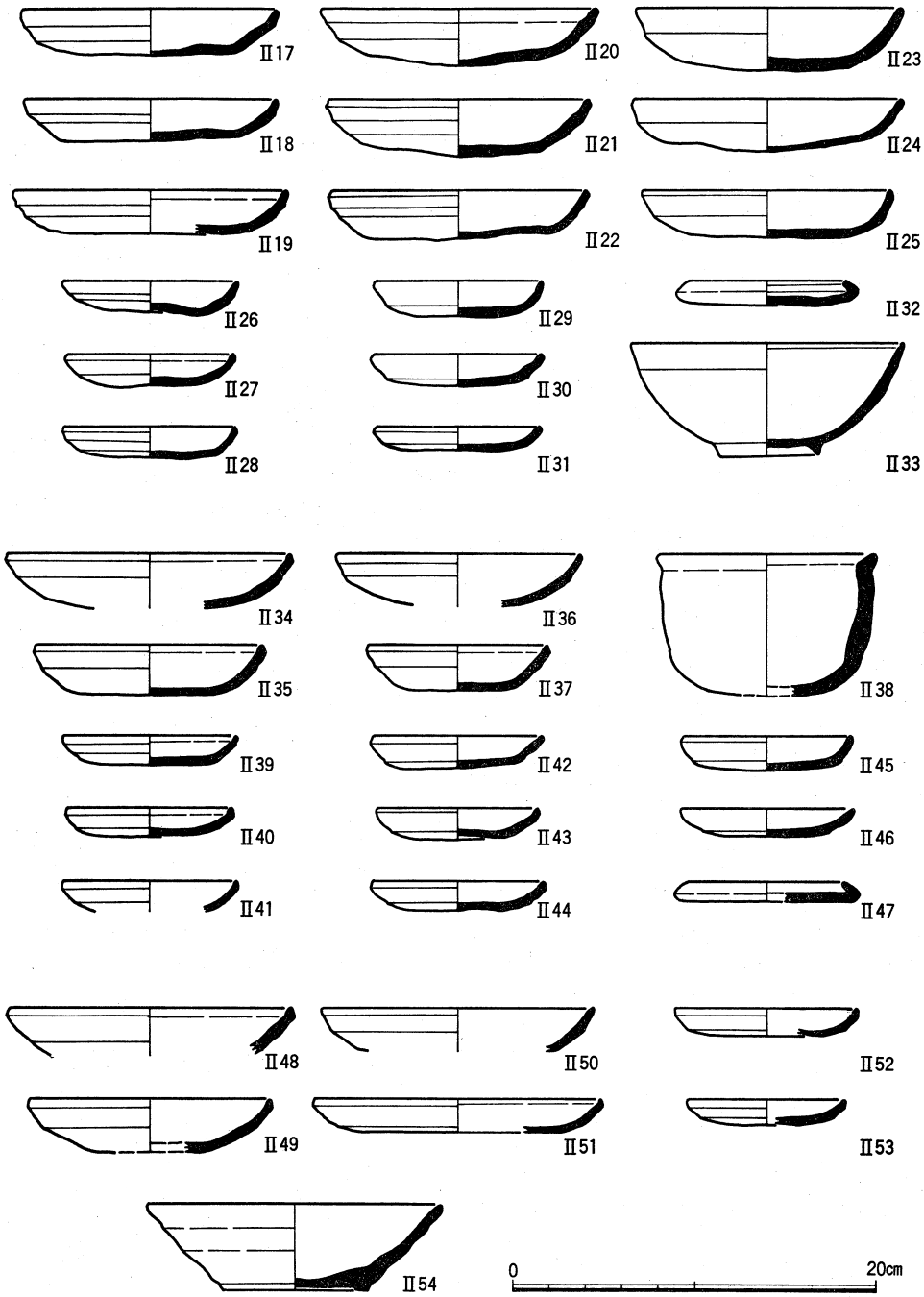


図10　ＳＥ24出土遺物（Ⅱ17～Ⅱ32土師器，Ⅱ33瓦器），ＳＥ11出土遺物（Ⅱ34～Ⅱ47土師器），ＳＥ13出土遺物（Ⅱ48～Ⅱ53土師器，Ⅱ54灰釉系陶器）

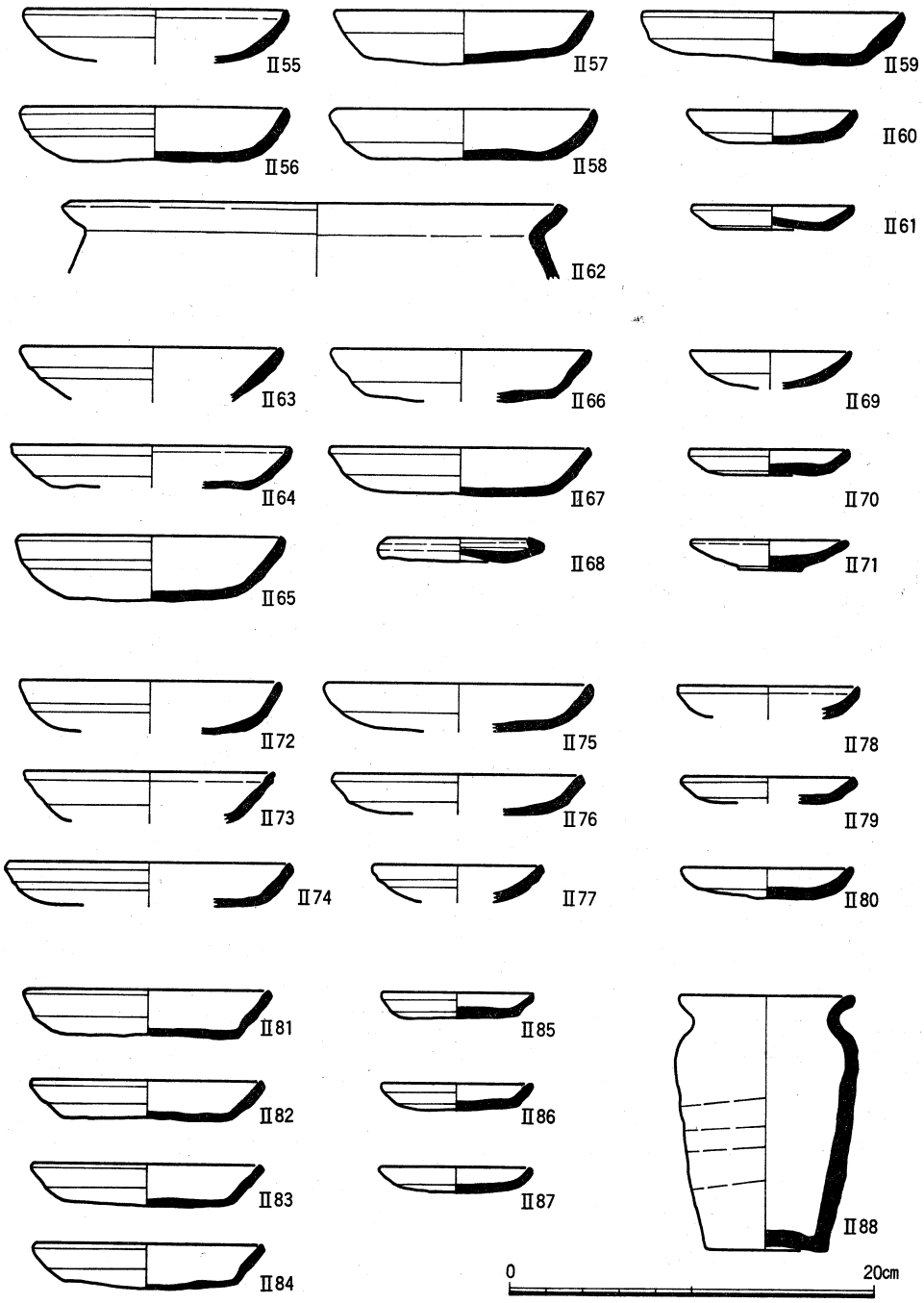


図11　ＳＥ28出土遺物(Ⅱ55～Ⅱ62土師器)，ＳＥ29出土遺物(Ⅱ63～Ⅱ71土師器)，
ＳＫ３出土遺物(Ⅱ72～Ⅱ80土師器)，ＳＫ６出土遺物(Ⅱ81～Ⅱ88土師器)

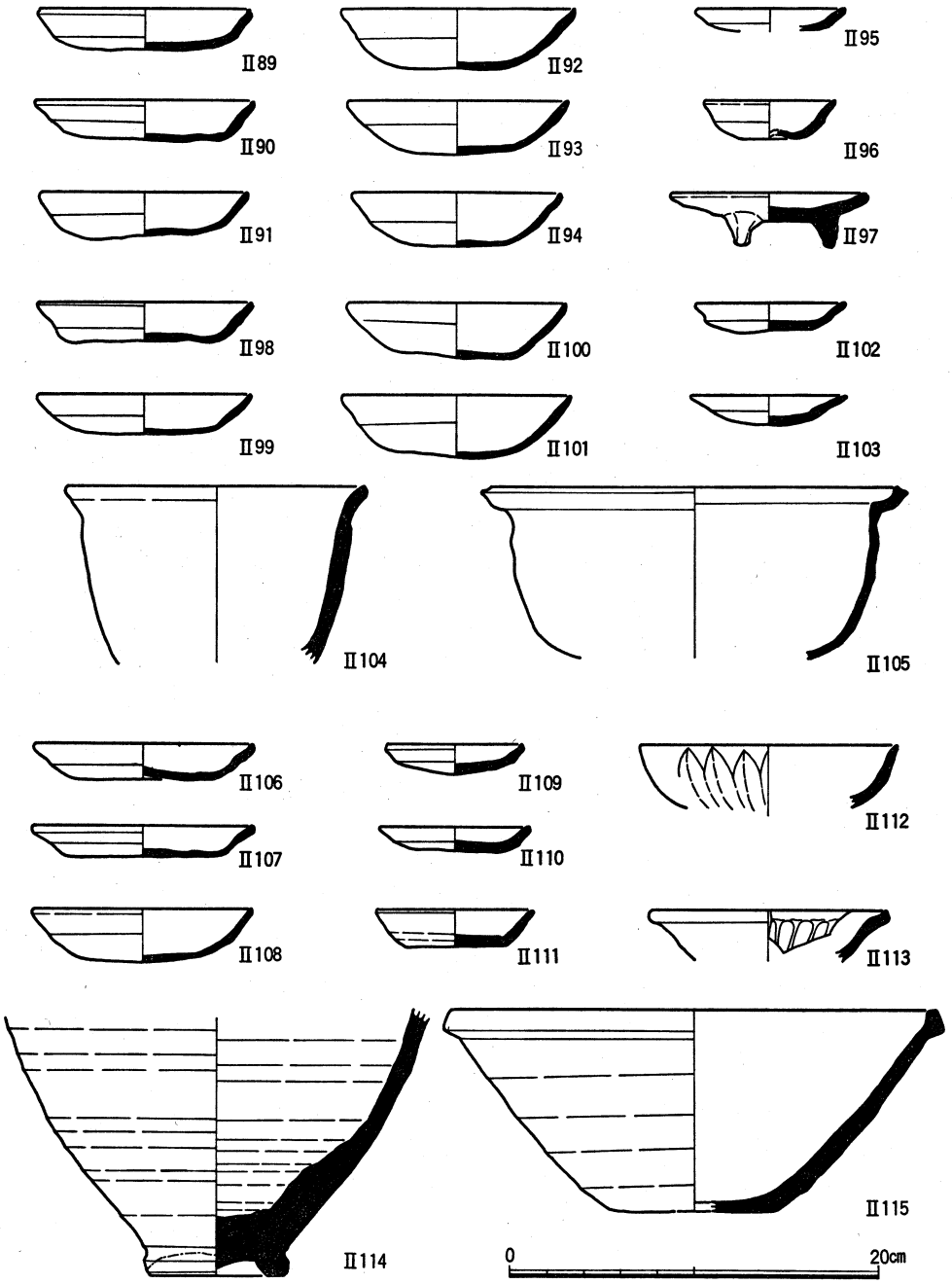


図12　ＳＫ５出土遺物（Ⅱ89～Ⅱ97土師器），ＳＥ31出土遺物（Ⅱ98～Ⅱ104土師器，Ⅱ105瓦器），ＳＥ27出土遺物（Ⅱ106～Ⅱ110土師器，Ⅱ111・Ⅱ114白磁，Ⅱ112・Ⅱ113青磁，Ⅱ115須恵器）

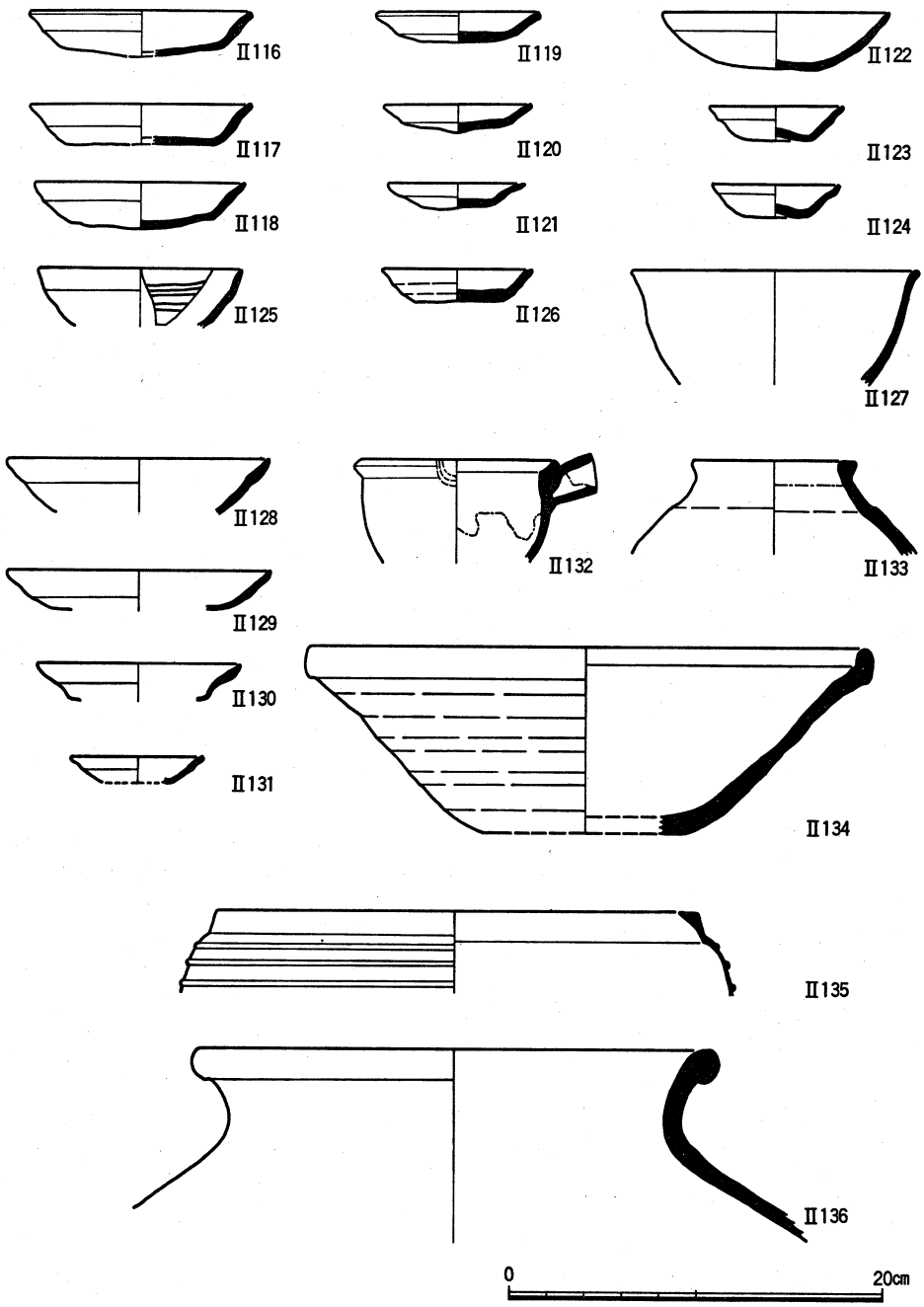


図13　ＳＫ４出土遺物（Ⅱ116～Ⅱ124土師器，Ⅱ125瓦器，Ⅱ126白磁，Ⅱ127青磁），
ＳＥ26出土遺物（Ⅱ128～Ⅱ131土師器，Ⅱ132 灰釉系陶器，Ⅱ133 褐釉陶器，
Ⅱ134須恵器，Ⅱ135鉄釜，Ⅱ136陶器）

5　近世の遺跡

(1)　近世の遺構（巻首図版，図版４・５，図14・15）

近世の遺構には，土取り穴，井戸，野壺，柵列などがある。

土取り穴　　ＳＸ１～ＳＸ11の単位がみとめられる。ＳＸ１～ＳＸ11の幅は2.5～13ｍ，検出長は短いもので10ｍ，長いもので56ｍをはかり，ほぼ真北から東に5°振る方位を示す。ＳＸ５とＳＸ６，ＳＸ５とＳＸ７，ＳＸ７とＳＸ８，ＳＸ９とＳＸ10，ＳＸ10とＳＸ11はそれぞれ幅約１ｍの畔をはさんで平行し，互いに切り合うことはない。いずれも地山をほぼ垂直に掘り込むが，最下部で粘土を追って横に掘り進んだ部分もある。また，土砂の埋積状況からＳＸ８は北から南へ，そのほかは南から北へむかって，先に掘った土坑を埋めながら掘りすすんだことがわかる。これらは，黄灰色シルト，青灰色シルトあるいは黒灰色粘土を採取するために掘削されたものであり，ＳＸ２では北端で高野川系流路を埋積する厚い砂礫層にあたってとまり，ＳＸ９でも白川系流路によって白色砂が厚く堆積してシルト層が深い部分では，掘削を断念している。

ＳＸ２を詳細にみると，いくつかの単位があることがわかる(図14)。さらにそのなかが

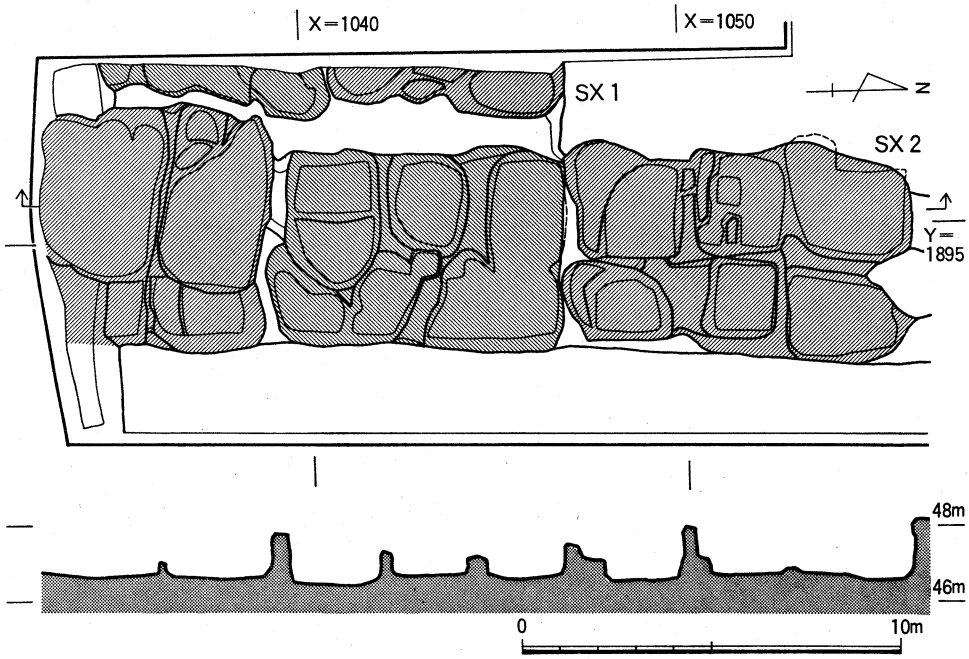


図14　土取り穴ＳＸ１・ＳＸ２　縮尺1/200

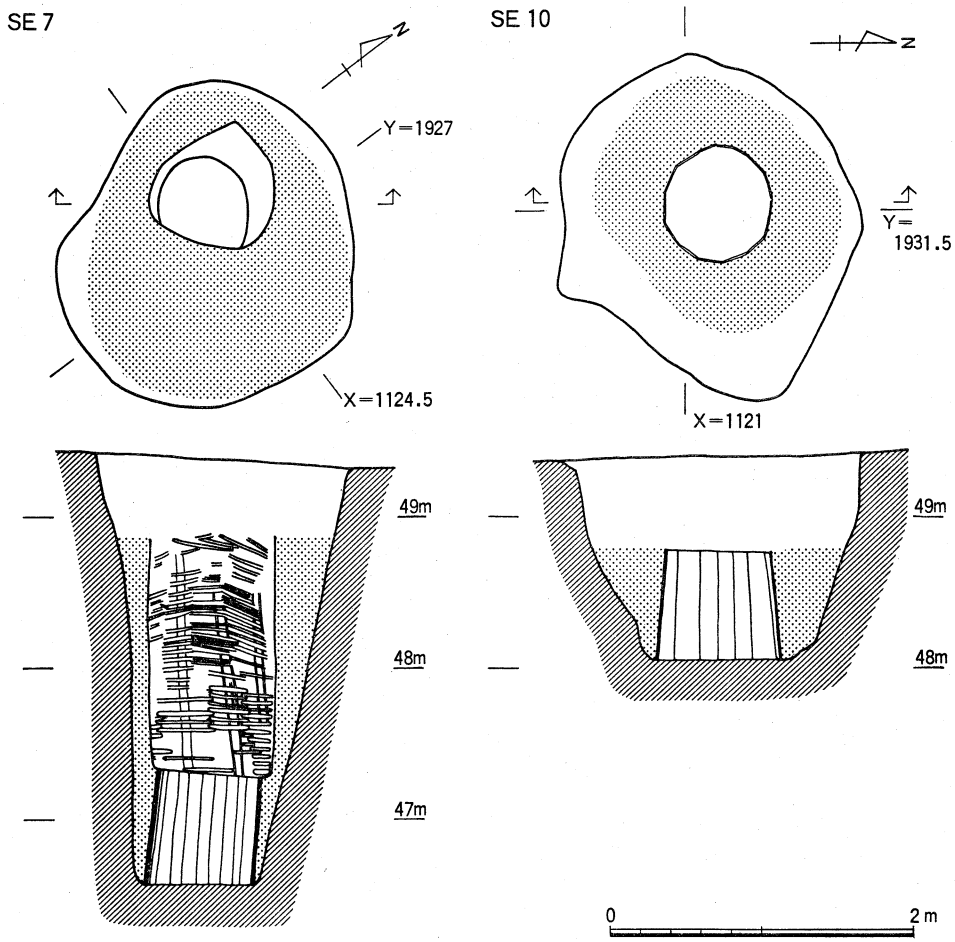


図15　井戸ＳＥ７・ＳＥ10　縮尺1/50

いくつかの小さな土坑にわかれている。これらの土坑は互いに切り合うことなく，接するように掘られ，その底面は粘土の下面にほぼ一致し，平坦である。ＳＸ１～ＳＸ11の底の所々に直径30cm前後の小さな掘り込みがある。これらの掘り込みは湧水を集めた水溜か，下層の粘土の有無を確認したためのものと思われる。なお，ＳＸ２，ＳＸ５，ＳＸ７，ＳＸ９～ＳＸ11の埋土からは18世紀を中心とする遺物が出土した。

井　戸　　西半の北端で４基の井戸を検出した。ＳＥ７は最下部に桶を据え，割竹を円筒形に組んだ井戸側をもつ井戸である。半截した竹を縦方向に通し，笊(ざる)編みにしている。ＳＥ10は井戸側はほとんど遺存せず，水溜の桶の回りに編んだ竹の痕跡が残っていた。ＳＥ６・ＳＥ９は縦板を円形に組み込んだ比較的深めの井戸で，近世末以降のものである。

野　壺　　調査区西半で８基の野壺を検出した。近代の野壺をのぞくと，いずれも江戸後期のものである。江戸後期の野壺は西半の北端に東西１列にならぶ。この野壺群に平行する東西方向の道路があったものと思われる。

柵　列　　西半の北部と西部で，東西方向の柵列を総計７列検出した。その柱間が1.8～3.2ｍと広いことから，京都大学構内一帯でよく検出されている耕作にともなう柵列と考えられる。

(2)　近世の遺物（図版７・８，図16～20）

Ⅱ137～Ⅱ164はＳＸ２出土遺物。Ⅱ137～Ⅱ148は土師器皿。Ⅱ137～Ⅱ145は，見込みに「Ｖ」字状の圏線がめぐる。Ⅱ146～Ⅱ148は小型の皿。Ⅱ137・Ⅱ139～Ⅱ141・Ⅱ143・Ⅱ147は口縁部の所々に煤が付着しており，これらは燈明皿と考えられる。Ⅱ137は赤褐色の漆のようなものが，内面全面に塗られている。Ⅱ149～Ⅱ152は焼き塩壺の蓋。いずれも土師質を呈し，内面に布目圧痕を残す。Ⅱ149・Ⅱ150は端部をほぼ直角に折りまげ，上面を平坦にしている。Ⅱ151・Ⅱ152は全体に丸みをおびた蓋で，上面は中央部がくぼむ。Ⅱ153～Ⅱ156は焼き塩壺。いずれも土師質を呈し，内面に布目を残す。Ⅱ153は長方形の枠で囲んだ「泉州磨生　サカイ　御塩所」の刻印をもつ。口縁の蓋受けの部分は篦で段状に削り出されている。Ⅱ154は枠内に「泉湊　□（伊織？）」の刻印をもつ。Ⅱ154～Ⅱ156は口縁部の蓋受けの部分が退化し，痕跡的になっている。Ⅱ155は刻印の部分が欠けている。Ⅱ156は長方形の枠内に「泉湊伊織」の刻印をもつ。Ⅱ157は磁器の燈明受皿である。内面に燈明皿を受けるための立ち上がりをもつ。燈明皿をうける立ち上がりは内傾し，口縁端部よりかなり低い。外面底部の立ち上がりの上端部は，露胎である。Ⅱ158は陶器の燈明皿である。口縁部に扁平な粘土塊を貼付する。見込みには圏線がめぐる。Ⅱ159は体部外面に轆轤水挽きのあとを残す陶器の椀。やや赤味をおびた乳白色の透明釉がかかる。高台部分は露胎である。Ⅱ160は唐津の片口鉢。見込みの釉を蛇の目に掻きとる。Ⅱ161は染付皿。口縁が輪花をなす。底面の釉を蛇の目に掻く。Ⅱ162は磁器椀。飴色の釉を施し，底部は露胎である。Ⅱ163は伊万里産の染付の椀。外面に菊花文を施す。Ⅱ164は備前産の片口のすり鉢。口径42cmをはかる大型のすり鉢である。口縁部外面に２条の凹線がめぐり，内面には９条を１単位とするおろし目を施す。見込み中央部には５条を１単位とする刷毛目を放射状に施す。

Ⅱ165～Ⅱ185はＳＸ９出土遺物。Ⅱ165～Ⅱ172は土師器皿。中型の皿（Ⅱ165～Ⅱ170）は口径10～11cm前後，見込みに「Ｖ」字状の圏線をもつ。Ⅱ171・Ⅱ172は小型の皿で器壁が厚

い。Ⅱ173・Ⅱ174は陶器皿。ともに淡緑色の釉がかかる。Ⅱ175・Ⅱ176は染付皿。Ⅱ176は口縁が輪花状を呈し内面に菊花文を描く。Ⅱ177～Ⅱ180は陶器椀。いずれも灰色の釉が全体にかかる。Ⅱ177は金泥で花文を描く。Ⅱ180は青灰色の奇怪な文様を付す。Ⅱ181・Ⅱ182は染付椀。Ⅱ181は複雑な花と蔓草，Ⅱ182は梅花を描く。Ⅱ182は見込みの釉を輪状に掻き取る。Ⅱ183は陶器花生。黄褐色の地に黒色で薄(すすき)様の草を描く。Ⅱ184は陶器鉢。底部をのぞく外面に乳白色の釉がかかる。体部内外面に轆轤水挽き痕が明瞭に残る。Ⅱ185は陶器鬢盥(びんだらい)。底部をのぞく外面に淡橙色の釉がかかる。

Ⅱ186～Ⅱ189はＳＸ７出土遺物。Ⅱ186～Ⅱ188は染付椀。Ⅱ189は陶器鉢。口縁から体部が輪花状をなし，内面に茶褐色で桐の花と葉を豪快に描く。

Ⅱ190～Ⅱ197はＳＸ５出土遺物。Ⅱ190は陶器皿。志野風の白色の釉が厚くかかる。Ⅱ191～Ⅱ196は染付椀。Ⅱ192は山水，Ⅱ194は草花をそれぞれ描く。Ⅱ197は瓦の留蓋。木の葉の装飾をもつ。

Ⅱ198～Ⅱ230はＳＸ10出土遺物。Ⅱ198～Ⅱ208は土師器皿。Ⅱ198は大型の皿で，口径が17.5cm。見込みに圏線をもつ。Ⅱ199～Ⅱ206は中型の皿。口径10～11cm。Ⅱ201以外は見込みに「Ｖ」字状の圏線をもつ。Ⅱ207・Ⅱ208は小型の皿。これらは燈明皿として使用したものが多い。Ⅱ209は陶器皿。淡緑色の釉がかかる。Ⅱ210～Ⅱ213は染付皿。Ⅱ210・Ⅱ213はくらわんか手の皿。Ⅱ211は胡蝶をあしらった小皿。Ⅱ214は陶器蓋。大きな宝珠つまみと高いかえりをもち，外面に黄褐色の釉がかかる。Ⅱ215は染付蓋。輪状つまみと圏線の装飾をもつ。Ⅱ216～Ⅱ219は陶器椀。ともに体部下半で屈曲し口縁部は直立する。Ⅱ216は淡茶褐色，Ⅱ217は淡緑色，Ⅱ218は茶褐色，Ⅱ219は黄褐色の釉がかかる。Ⅱ218には，やや下に向く把手の取り付き部があり，小鳥の餌や水を入れる餌猪口であろう。Ⅱ219の内面に茶褐色の一線がある。Ⅱ220～Ⅱ226は染付椀。体部から口縁部にかけて丸く仕上げている。Ⅱ220～Ⅱ223はほぼ同趣の草花文，Ⅱ226は網目文をそれぞれ描く。Ⅱ227は陶器鉢。口縁を削り取って船形とし，内面には黄褐色の地に茶褐色で薄様の草と雁を描く。Ⅱ228は陶器鍋。把手と三足を付す。底部をのぞく全体に茶褐色の釉がかかる。Ⅱ229・Ⅱ230は陶器壺。ともに体部下半から上の外面に茶褐色の釉がかかり，茶壺と考えられる。Ⅱ230は体部内外面に轆轤水挽き痕をとどめる。Ⅱ229は高台をもち，Ⅱ230は底部に回転糸切り痕を残す。

Ⅱ231～Ⅱ234はＳＸ11出土遺物。Ⅱ231・Ⅱ232は土師器皿。口径は10～11cmで，見込みに圏線をもつ。Ⅱ233は染付椀。草花を描く。Ⅱ234は陶器すり鉢。全体に赤紫色の釉がかかる。

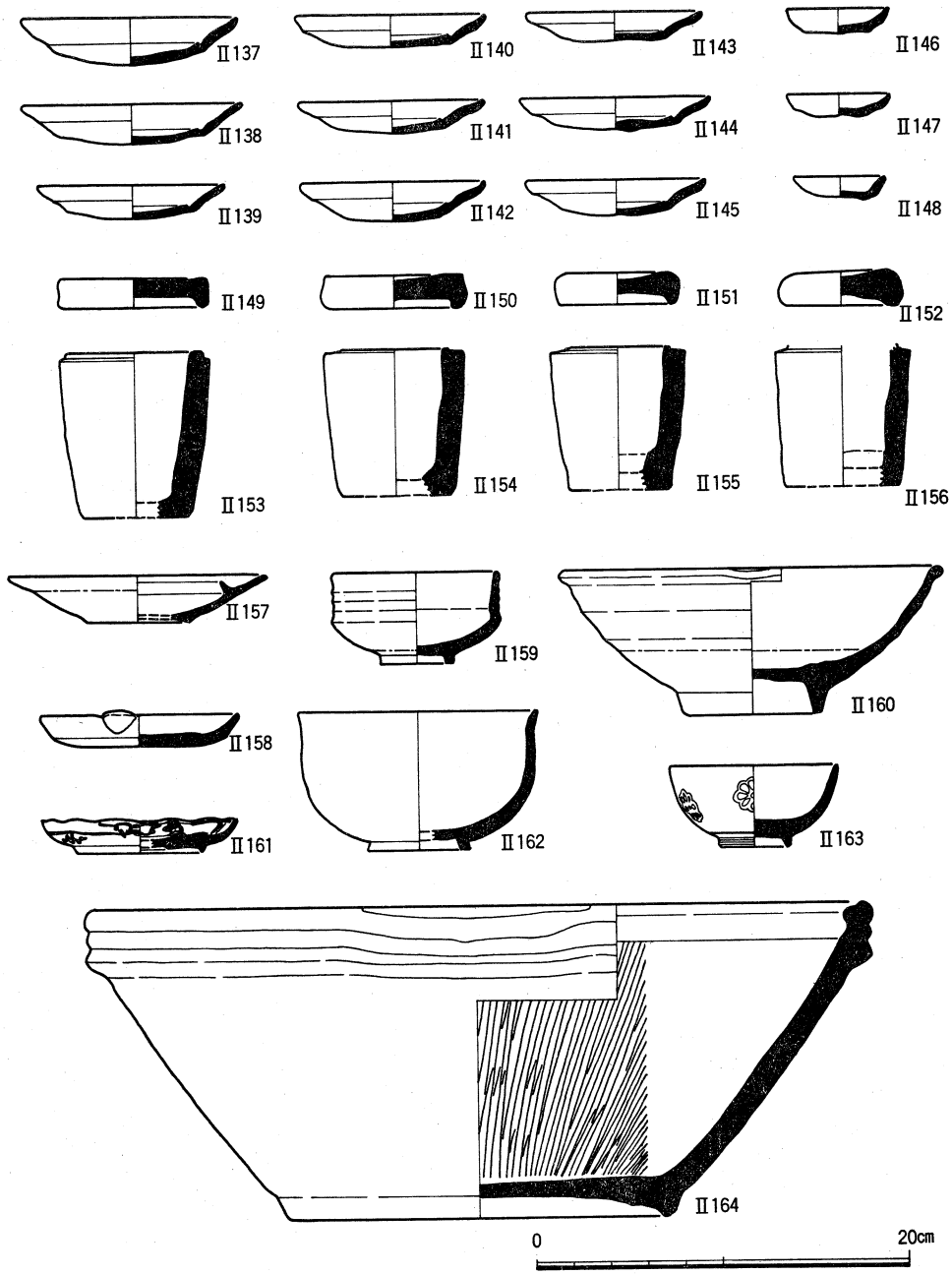


図16　ＳＸ２出土遺物（Ⅱ137～Ⅱ148土師器皿，Ⅱ149～Ⅱ152焼き塩壺蓋，Ⅱ153～Ⅱ156焼き塩壺，Ⅱ157陶器燈明受皿，Ⅱ158陶器燈明皿，Ⅱ159陶器椀，Ⅱ160陶器鉢，Ⅱ161磁器皿，Ⅱ162・Ⅱ163磁器椀，Ⅱ164備前すり鉢）

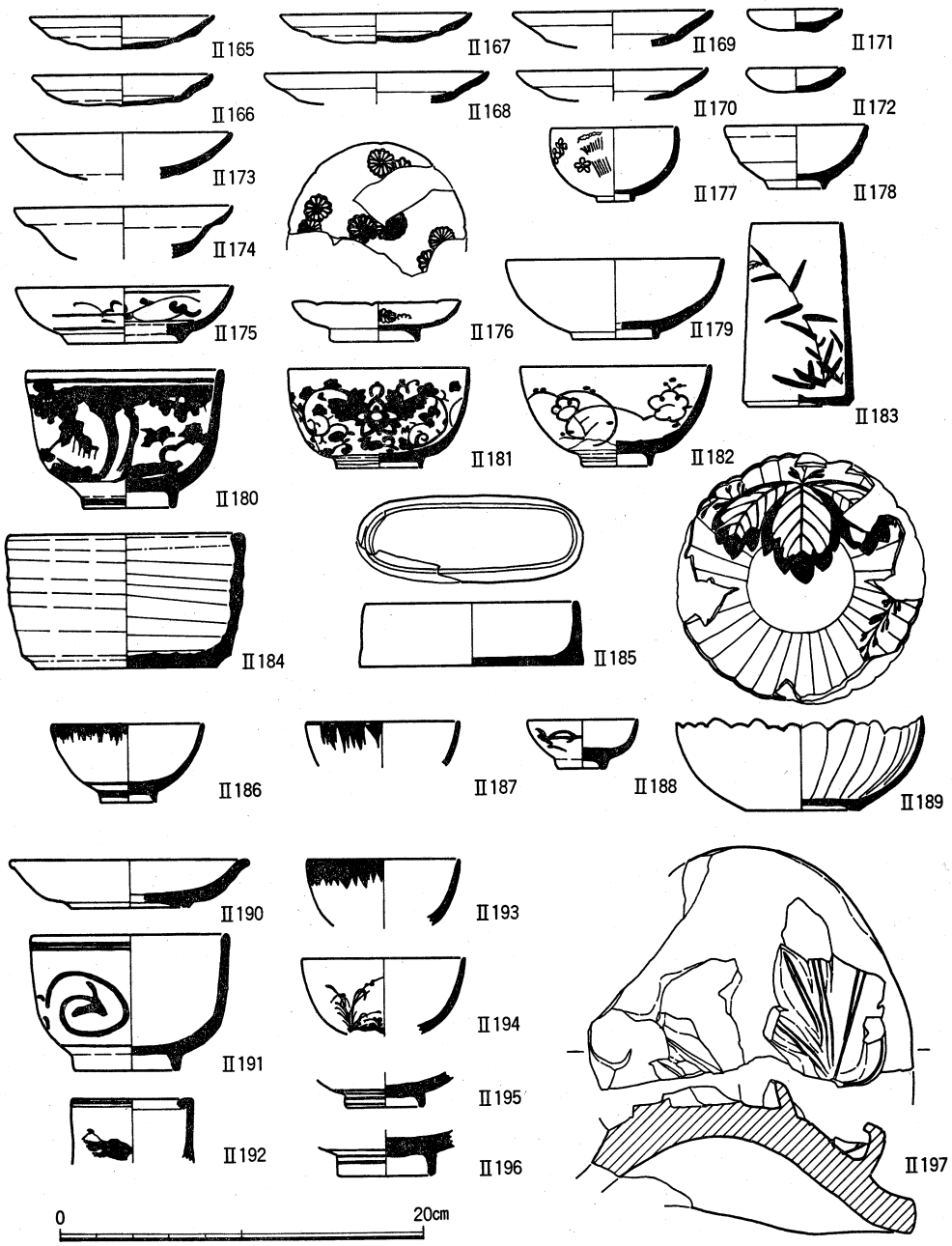


図17　ＳＸ９出土遺物（Ⅱ165～Ⅱ172土師器皿，Ⅱ173・Ⅱ174陶器皿，Ⅱ175・Ⅱ176磁器皿，Ⅱ177～Ⅱ180陶器椀，Ⅱ181・Ⅱ182磁器椀，Ⅱ183陶器花生，Ⅱ184陶器鉢，Ⅱ185陶器鬢盥），ＳＸ７出土遺物（Ⅱ186～Ⅱ188磁器椀，Ⅱ189陶器鉢），ＳＸ５出土遺物（Ⅱ190陶器皿，Ⅱ191陶器椀，Ⅱ192～Ⅱ196磁器椀，Ⅱ197瓦留蓋）

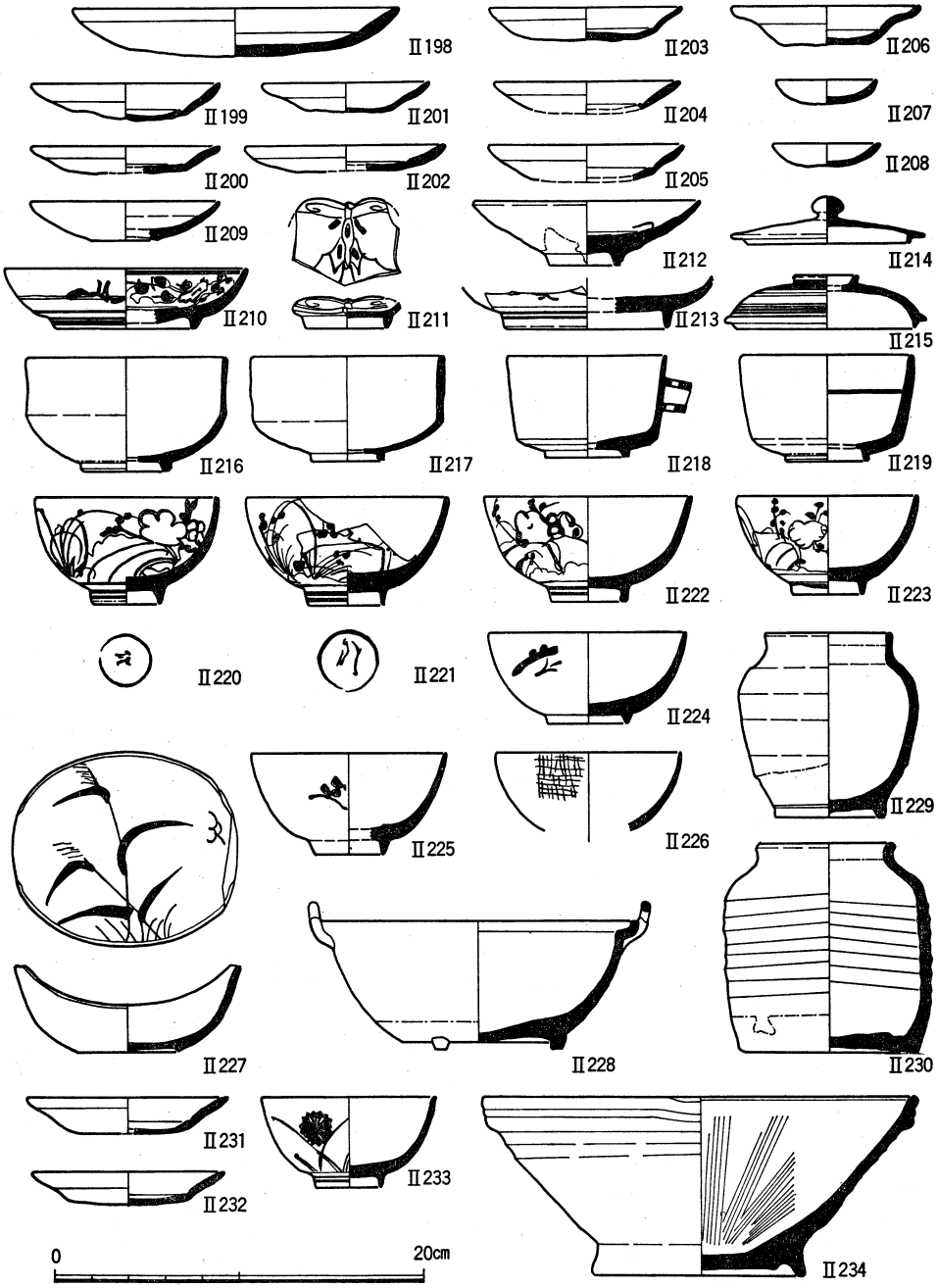


図18　ＳＸ10出土遺物（Ⅱ198～Ⅱ208土師器皿，Ⅱ209陶器皿，Ⅱ210～Ⅱ213磁器皿，Ⅱ214磁器蓋，Ⅱ215磁器蓋，Ⅱ216～Ⅱ219陶器椀，Ⅱ220～226磁器椀，Ⅱ227陶器鉢，Ⅱ228陶器鍋，Ⅱ229・Ⅱ230陶器壺），ＳＸ11出土遺物（Ⅱ231・Ⅱ232土師器皿，Ⅱ233磁器椀，Ⅱ234陶器すり鉢）

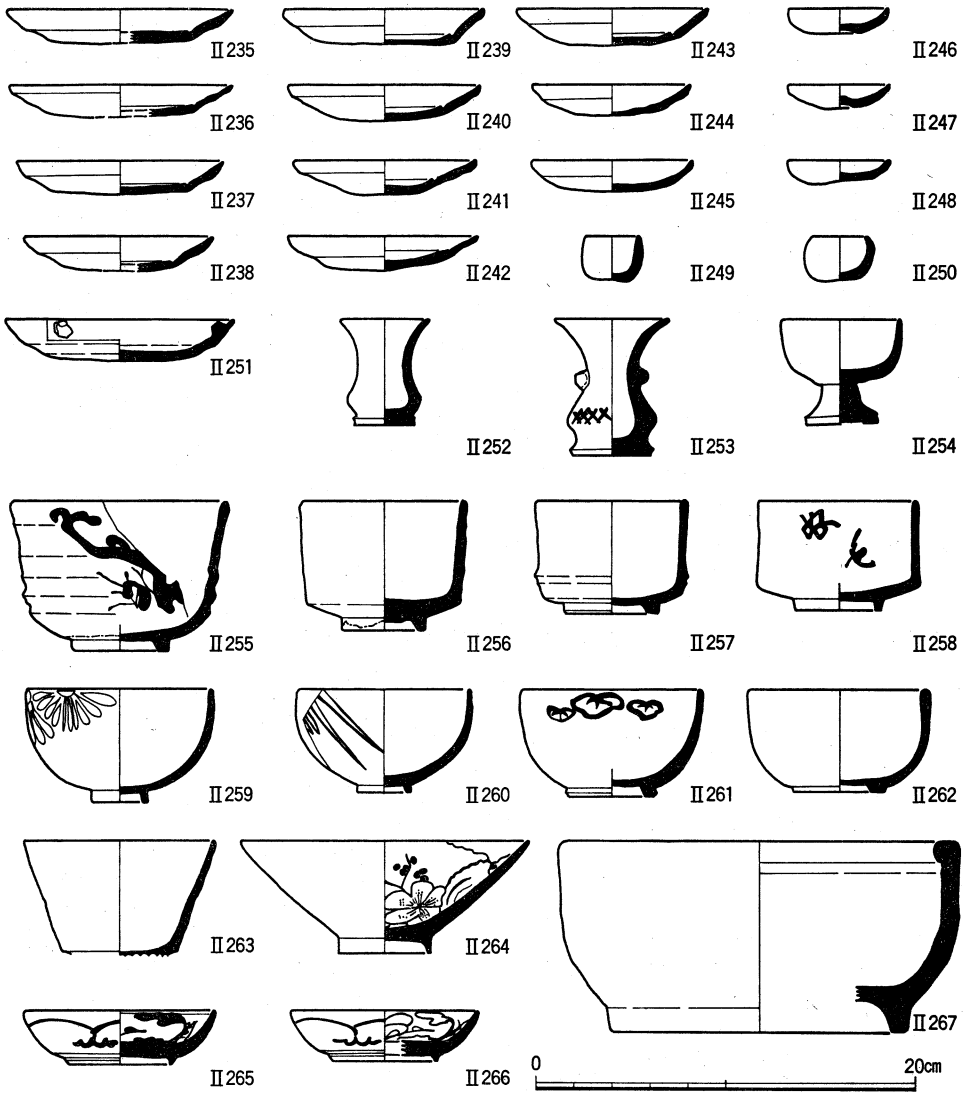


図19　ＳＫ２出土遺物（Ⅱ235～Ⅱ248土師器皿，Ⅱ249・Ⅱ250土師器壺，Ⅱ251陶器燈明受皿，Ⅱ252・Ⅱ253陶器仏花瓶，Ⅱ254磁器仏飯，Ⅱ255・Ⅱ257～Ⅱ260・Ⅱ263陶器椀，Ⅱ256・Ⅱ261・Ⅱ262・Ⅱ264磁器椀，Ⅱ265・Ⅱ266磁器皿，Ⅱ267素焼き盤）

ＳＸ２・ＳＸ５・ＳＸ７・ＳＸ９～ＳＸ11出土土師器の中型の皿は，口径が10～11cmで，圏線は「Ｖ」字状の断面を示し，径は６～７cmのものが多い。これらは同志社大学構内公家屋敷二条家北辺地点発掘調査区検出のＳＥ101とＳＫ105出土土師器〔同志社調査会83 pp.40-4〕の中間に位置するもので，18世紀中葉～後葉ごろの資料と考える。

Ⅱ235～Ⅱ267はＳＫ２出土遺物。Ⅱ235～Ⅱ248は土師器皿。Ⅱ235～Ⅱ243は口径10.0～12.0cmをはかり，鋭く刻まれた圏線をもつ。Ⅱ239は口縁部全周に，Ⅱ240は口縁部の所々に煤が付着する。Ⅱ244・Ⅱ245は圏線のない土師器皿。Ⅱ245は口縁部の一部に煤が付着する。Ⅱ246～Ⅱ248は，口径5.4cmをはかる小型の土師器皿で，手づくねの跡が著しい。Ⅱ247・Ⅱ248は口縁部の一部に煤が付着する。Ⅱ249・Ⅱ250は土師器の小型の壺で，胎土は白色を呈する。Ⅱ251は陶器の燈明受皿。燈明皿を受けるための突起が３個貼り付けられている。内外全面に赤褐色の釉を施す。Ⅱ252はやや小型の陶器仏花瓶。青緑色の釉を施し，底部は露胎で糸切り痕を残す。Ⅱ253は退化した耳がつく陶器の仏花瓶。底部をのぞく内外全面に飴色の釉を施し鉄釉で「X」字文をかく。底部には糸切り痕が残る。Ⅱ254は磁器仏飯。高台は削り出し高台である。Ⅱ255は陶器椀。外面に轆轤水挽き痕を残す。Ⅱ256は青磁椀。高台畳付けの部分をのぞく内外全面に厚い釉を施す。Ⅱ257～Ⅱ260は陶器椀。Ⅱ258～Ⅱ260は栗田焼とおもわれる。Ⅱ261～Ⅱ263は磁器椀。Ⅱ264は陶器椀。Ⅱ265・Ⅱ266は磁器染付皿。Ⅱ267は素焼きの盤。18～19世紀にかけての資料である。

このほか，ＳＸ２からは竹製品，木製品が出土した。竹製品には，底の中央を網代編み，周辺部分を笊編みとし，蛇腹まきを施した三本組み箍（たが）で縁部を補強したものが出土した（図20）。図21は採取した土を運搬するための畚（ふご）と桛（おうご）の図で，ＳＸ２出土の竹製品も，こうした畚の一種と思われる。出土した木製品には箸が多くみられた。ＳＸ２からは日常雑器として使用される土師器や陶磁器などが出土していることとあわせて，土の採取のさいに不用となったものをまとめて廃棄したものと考えられる。

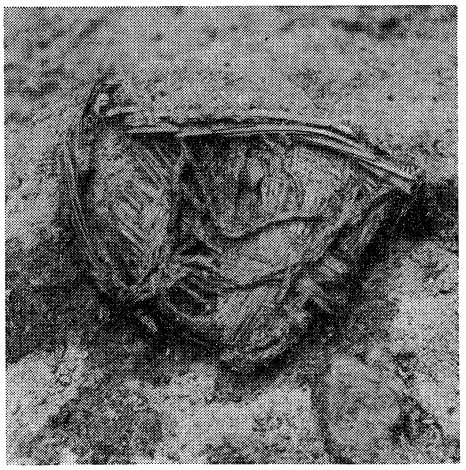


図20　畚の出土状況（南から）

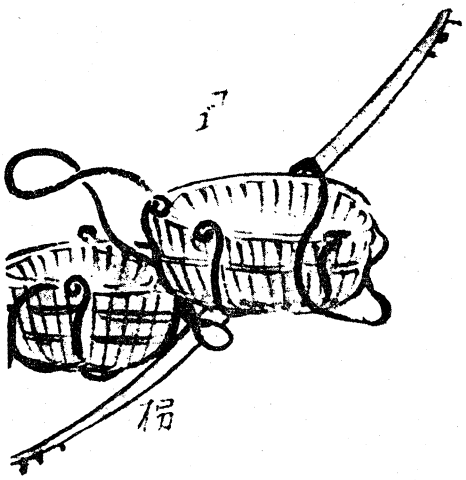


図21　畚と桛（『信樂燒圖解』〔小野編33〕より）

6　井戸用材の樹種

病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区で検出した井戸のうち，13基の井戸の用材を検討した。同一井戸から，複数の試料を採取したものも含め，合計29点の試料について樹種の同定をおこなった。その結果を表２に示す。表から明らかなように，ヒノキ18点，スギ９点，モミ１点，コウヤマキ１点が同定された。なお，同定された樹種の顕微鏡写真を試料番号順に図版９～11に示す。

井戸の形態については，さまざまな井戸側，水溜が存在するが，その型式による樹種の使い分けはみられなかった。また，一つの井戸で縦板や横桟などの部位による樹種の使い分けも認められなかった。

これまでに報告された井戸用材の樹種について調べた結果では〔島地・伊東編88〕，

針葉樹　スギ(37点)，ヒノキ(20点)，マツ類(８点)，モミ(６点)，コウヤマキ(５点)，カヤ(２点)
広葉樹　クリ(６点)，ケヤキ(２点)，トネリコ類(２点)，カシ類(２点)，シデ類(１点)，シイノキ(１点)，クスノキ(１点)，サクラ類(１点)

となっており，圧倒的に針葉樹の利用率が高い。この集計からわかるように，スギやヒノキがよく利用されていることは，今回の結果にも表われている。また，モミやコウヤマキが出土していることは，過去のデータと比較しても当然の傾向といえる。いずれにしても，針葉樹の利用が多いということは，方形ならびに円形井戸を組み立てる際に，板状に割りやすい，あるいは加工しやすい性質が好まれたからであろうと考えられる。

なお，樹種の内部構造の特徴を以下に記す〔島地・伊東82〕。

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Endl.　早・晩材の移行は緩やかで，晩材幅は狭い。垂直・水平樹脂道はなく樹脂細胞は晩材部に偏在する。分野壁孔は典型的なヒノキ型である。

スギ　*Cryptomeria japonica* D. Don　早・晩材の移行は急で，垂直・水平樹脂道はなく，樹脂細胞は早・晩材の境界ないし晩材部に散在する。放射柔細胞の壁は薄く，分野壁孔は典型的なスギ型である。

モミ　*Abies firma* S. et Z.　垂直・水平樹脂道を欠くが，ときに傷害樹脂道が出現する。放射仮道管はない。放射柔細胞の壁は厚く，末端壁はいわゆる数珠状を呈する。分野壁孔はスギ型で１分野に４個。

コウヤマキ　*Sciadopitys verticillata* S. et Z.　晩材幅はきわめて狭く，垂直・水平樹脂道および樹脂細胞を欠く。放射仮道管はなく，分野壁孔はやや小型の窓状を呈する。

表２　井戸用材の樹種

試料番号	出土遺構(構造・年代)	井戸用材	樹種
1	ＳＥ28(縦板組横桟止め・12世紀中～後葉)	縦板(内列)	ヒノキ
2		縦板(外列)	スギ
3		横桟	ヒノキ
4	ＳＥ17(縦板組横桟止め＋曲物・10世紀)	縦板	ヒノキ
5		不明	モミ
6	ＳＥ16(石組＋木枠→縦板横桟止め・13世紀前～中葉)	横桟	スギ
7		木枠	ヒノキ
8	ＳＥ23(縦板横桟止め＋木枠・13世紀前～中葉)	縦板	ヒノキ
9		縦板	スギ
10		横桟？	ヒノキ
11	ＳＥ22(石組＋木枠→桶＋木枠・14世紀中葉)	桶枠板	ヒノキ
12	ＳＥ19(縦板組隅柱横桟止め・12世紀前～中葉)	横桟	スギ
13		縦板	ヒノキ
14	ＳＥ14(石組＋横板＋曲物・14世紀後葉～15世紀)	横板	コウヤマキ
15	ＳＥ13(縦板組隅柱横桟止め＋横板＋曲物・12世紀中～後葉)	横板	ヒノキ
16		横板横桟	スギ
17		横桟	ヒノキ
18		横桟	ヒノキ
19		縦板	ヒノキ
20	ＳＥ10(円形割竹巻＋桶・19～20世紀)	桶枠板	スギ
21	ＳＥ４(縦板組隅柱横桟止め・13世紀前葉)	縦板	スギ
22		横桟	ヒノキ
23		隅柱	ヒノキ
24	ＳＥ１(石組＋横板・15世紀)	横板	ヒノキ
25	ＳＥ５(縦板組隅柱横桟止め・12世紀後葉～13世紀前葉)	横桟	ヒノキ
26		隅柱	ヒノキ
27		縦板	スギ
28		横桟	ヒノキ
29	ＳＥ７(円形割竹巻＋桶・17～18世紀)	桶枠板	スギ

7　小　　結

調査区の西端で検出した赤褐色砂礫の埋積した高野川系の河川の旧流路は，近世に土取りの対象となった粘土層を削りながら北から南へ流下している。このため，旧流路の部分に大規模な土取り穴は存在しない。この旧流路の上面で７世紀後半から８世紀初めの土坑ＳＫ１を検出しており，この旧流路の埋積は奈良時代以前のものといえる。本調査区の南西約 300ｍにあたるＡＦ14区で検出した平安中期の高野川の河道や護岸とともに，高野川系流路の変遷を知るうえで貴重な資料を得た。

今回の調査では10世紀から19世紀にかけての井戸31基を検出した。このうち12世紀から13世紀にかけての井戸は26基で，その大半を占める。この遺構と関連すると考えられるも

小　　結

ののひとつに福勝院があげられる。福勝院は鳥羽法皇の皇后高陽院泰子が仁平元年(1151)に創建した寺で，九躰阿弥陀堂，寝殿，三重塔，鐘楼，護摩堂のあったことが知られている〔杉山62pp.78-82〕。そして，13世紀後葉以降に衰退するようであるが，その退転の状況は明らかではない。高陽院泰子はその死後，この寺に埋葬されるが，そのときの葬送の道順は，『兵範記』久壽2年(1155)12月17日条に「自法成寺北面，出堤南行，自近衛末東行，入御々堂南西門」とあり，福勝院が近衛通に南面していたといわれている。大正4年刊の地誌『京都坊目誌』は本調査区の北東にあたる京都大学楽友会館一帯の字「一町が辻」を福勝院に比定しているが，その正確な位置は不明である。これらの井戸が福勝院に直接かかわるものと断定できる資料はないが，少なくとも福勝院の周辺で，福勝院に関わった人々に関連する遺構と考えられる。

また，中世のものと考えられる各種の鋳型や鞴の羽口が出土している。教養部構内西半，医学部構内で確認されている鋳造に関する遺跡がさらに病院構内の北半にまで広がっていることが予想される。古代・中世の鴨東白河の地にあって鋳造に関わった工人集団の存在が明白になってきたといえよう。

最後に，18世紀の遺物を包含する土取り穴について考察する。土の利用は陶磁器の原料のほか，壁土などが考えられる。しかし，明治5年刊の『陶磁器説』によれば，東山あたりでは上層の土は壁土に，下層の土は瓦や漆喰の原料に，最下層の土を陶土として使用しており，壁土または陶土だけを目的として採取しているわけではない。そこで，当時調査区周辺で土を必要としていたものを調べてみると，粟田焼の動向が浮かびあがってくる。17世紀に始まった粟田焼は，18世紀には三条通粟田口から蹴上にかけて同業者町を形成し，18世紀には最盛期をむかえる。この隆盛にともない，当初は建仁寺や東岩倉山(大日山)一帯で得ていた陶土が不足しはじめる。近江野洲郡南桜村などからも土をはこんでいたが，18世紀の後半には元真如堂，泉涌寺，日岡のほか「洛東岡崎村にて地主相対を以上買取」るようになる(『伊藤陶山所蔵文書』)。17世紀に刊行された地誌『莵藝泥赴(つぎねふ)』には「河の彦四郎」なる男が熊野社の西で土を掘り，売買していたという話がある。熊野社は本調査区の南約370mにあり，すでに17世紀からこの一帯で土の採取がおこなわれたことがわかる。文政6年(1823)には，五条坂職方が岡崎土の買占めをおこなったことから，粟田焼職方との間で争論がおきている〔森谷73pp.224-8〕。本調査区は岡崎にほど近く，また，土取り穴の埋土出土遺物が18世紀のものであり，粟田焼の土が求められていた時期と一致することから，採取された土は岡崎土として商われていた可能性がある。

最後に，土の採取方法について説明する。『陶磁器説』では，崩れやすい所では円形にそれ以外の所では方６尺の穴を掘るとある。『立杭窯の研究』には，丹波多紀郡の立杭焼の陶土は坪単位で売買され，この売買のため土取り穴は方形であることが報告されている〔藪内編 55 p38・図版(15)〕。本調査区で検出した土取り穴も，ＳＸ２やＳＸ４では方形に掘られた土坑間の尾根が明瞭に残る。しかしＳＸ２のひとつの単位の面積は33～47㎡，その中の土坑の面積も 4～13㎡と幅があって，土の採取をおこなう際に明確な規格があったとはおもえない。ただ，調査区全体をみると土取り穴は一定の方位をもっている。この方位は当時の地割りに規定されていると思われ近世の鴨東の地割りを復原するうえで貴重な資料といえる。

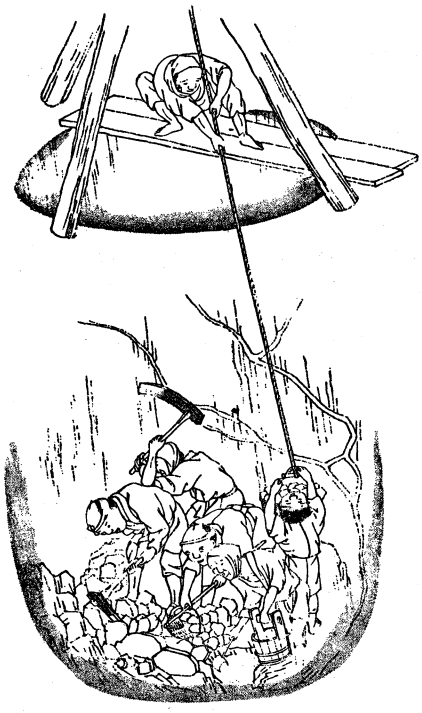


図22　近世の土取り作業「山頭及平地に圓穴ヲ掘ル」(京都府資料館蔵『陶磁器説圖』より)

また，『陶磁器説圖』には，水脈にあたれば竪に水道線を掘り，穴底に水溜を作り，そこから水をくみだす方法が描かれている(図22)。ＳＸ10などの底で検出した小土坑はこうした水溜であった可能性がある。

欽古堂亀祐の『陶器指南』には，「黒谷岡崎ヨリ出土ス土は妙々有事，世の焼物師ノシル所ナリ」とある。本調査区から出土した土もこのような良土であったのであろうか。発掘区の南端から北端に達する広大な土取り穴をみるにつけ，良い土を求めてやまなかった人々の情念をかいまみた思いがする。

なお，出土した竹製の畚の構造については，明海大学経済学部教授中村俊亀智氏の御教示をいただいた。末筆ながら，お礼申し上げます。

第３章　京都大学教養部構内ＡＰ25区の発掘調査

難波洋三

１　調査の経過

本調査区は，京都大学教養部構内の東部に位置する（図版１-167）。本調査区の周辺では，教養部図書館建設にともなう工事の際に縄文土器が採集されており，また，Ａ号館増築工事に関係して，本調査区の西に隣接する地区でおこなわれた発掘調査で，中世と近世の溝などが検出されている。ここに教養部校舎が新営されることになり，従来の知見にもとづいて，本予定地にも縄文時代や中世・近世の遺構が存在すると推定されたので，建設予定地の発掘調査をおこなった。発掘調査は，1986年７月１日に開始し，８月31日に終了した。調査面積は599㎡である。

２　層　　位（図版12，図23）

本調査区の現地表面は，北から南へと緩やかに低くなっており，標高は調査区の北端で55.5ｍ，南端で54.9ｍである。

調査区は，広範囲にわたって，第三高等学校創設以後攪乱を受けているため，近世以前の遺物包含層や遺構の遺存状態はよくない。溝ＳＤ１～ＳＤ３を検出した付近では上から順に，表土（第１層），茶褐色砂質土（第２層），白色砂（第３層）が確認できた。この付近でもやはり遺物包含層は完全に削平されており，遺構は，無遺物層の第２層以下に達している部分の一部がかろうじて残っているにすぎない。ただし，Ｘ＝1379以南には現地表下約40cmから60cmにかけて遺物包含層の暗褐色土が残る部分もあり，本調査区の南方の地域は攪乱を受けていない可能性がある。将来の調査がまたれる。

さらに，調査地点における自然地形の変遷を調べるために，Ｘ＝1410にそって東西方向の深掘りを，Ｙ＝2285にそって南北方向の深掘りをおこなった。その結果，両方向ともに，地表下約４ｍまでほぼ水平な堆積層が観察できた。

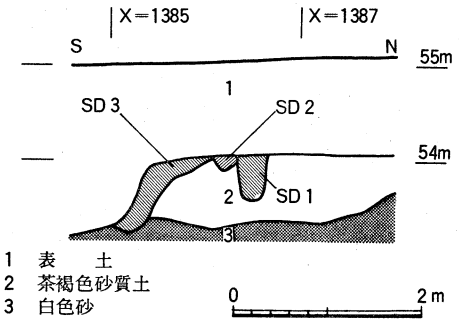


図23　調査区南北畔の層位　縮尺1/80

3　遺　　構（図版12，図24）

前述のように，調査区全域にわたって攪乱が著しく，検出した遺構は，調査区南部の溝ＳＤ１～ＳＤ３のみである。

溝ＳＤ３は，埋土に土師器の細片等をわずかに含んでいる。土師器の型式比定が困難なため，時代を特定できないが，中世に遡るものであろう。溝ＳＤ３は，西に隣接する14地点の発掘調査で検出された，中世のＶ字溝につながる。埋土の状態から見て，滞水はしていなかったようである。

溝ＳＤ１とＳＤ２は，出土遺物から考えて18世紀に使用，廃棄されたものであろう。溝

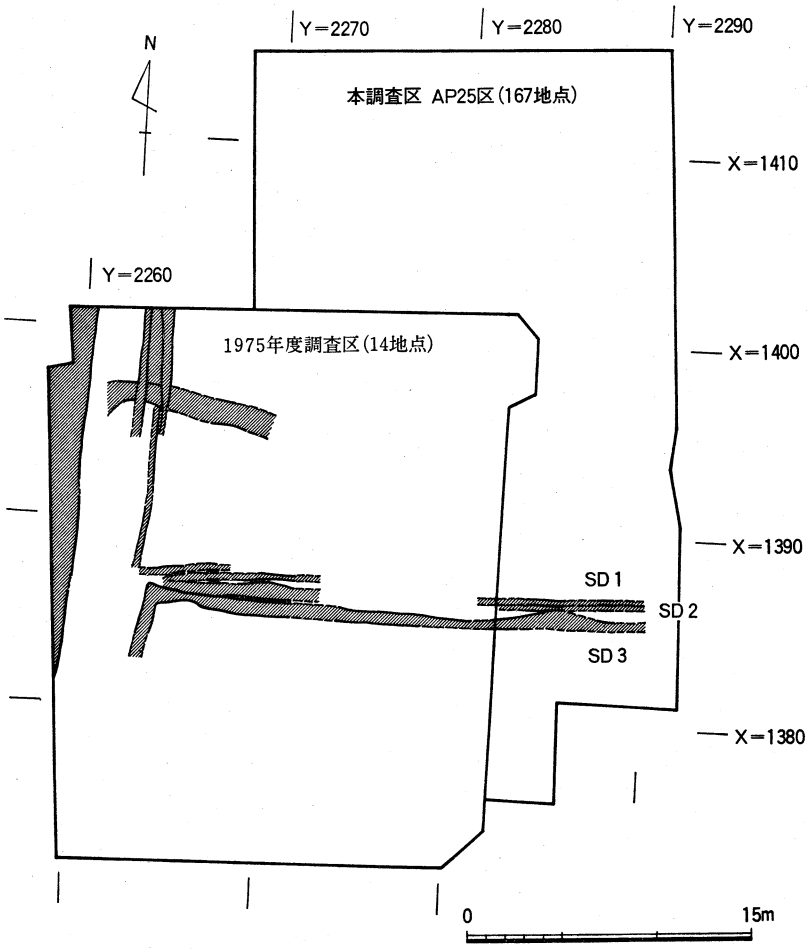


図24　調査区検出の遺構　縮尺1/400

ＳＤ１はＵ字溝で，埋土の黄褐色シルトは，上部ほど細砂の割合が高い。よって，溝ＳＤ１には，水が流れていたのであろう。ＳＤ２はＳＤ１によって肩が切られている。これらの３本の溝の方向は，ほぼ真東西である。

４　遺　　物（図版13，図25・26）

前述のように，溝ＳＤ１とＳＤ２からは，近世の遺物がまとまって出土している。以下これについて述べる。

Ⅲ１～Ⅲ11は，溝ＳＤ１出土の遺物である。Ⅲ１～Ⅲ３は土師器皿。Ⅲ１は内面と口縁外面の上端を撫でて仕上げる。Ⅲ２・Ⅲ３は内面に指おさえ痕を残す小型の皿である。Ⅲ４は土師器鍋。これは，17世紀前半以前に製作年代が遡るもので，混入品であろう。Ⅲ５・Ⅲ６は染付椀。Ⅲ５は内外面とも菊花文と氷割文で飾る。Ⅲ６は外面を氷割文で飾る。Ⅲ７は白磁椀。Ⅲ８は染付の椀蓋。外面に岩と水車と草文と飛鳥をえがく。Ⅲ９は染付の皿で，内面に牡丹唐草文，外面に唐草文をえがく。Ⅲ10は外面を縦方向の縞で飾る陶器鉢で，緑釉を全面にかける。Ⅲ11は陶器蓋。黒色のつやのない釉を薄くかける。

Ⅲ12～Ⅲ56は，溝ＳＤ２出土の遺物である。Ⅲ12～Ⅲ15は，内面に圏線がめぐる土師器皿である。Ⅲ16・Ⅲ17は，Ⅲ１と同型式の土師器皿である。Ⅲ18～Ⅲ21は，Ⅲ２・Ⅲ３と同型式の小型の土師器皿である。この小型の皿には，Ⅲ18・Ⅲ19のように内面に指おさえ痕が残るものと，Ⅲ20・Ⅲ21のようにさらに内面を撫でて仕上げるものがある。Ⅲ12～Ⅲ21は製作に回転台や轆轤を用いていないが，Ⅲ15は逆時計まわりの回転台による撫で痕が見込みに残っている。Ⅲ12～Ⅲ14・Ⅲ16～Ⅲ21は，京都市左京区岩倉の木野でつくられたと考えられるが，木野では土師器の製作に回転台や轆轤を使っていなかったので，Ⅲ15は

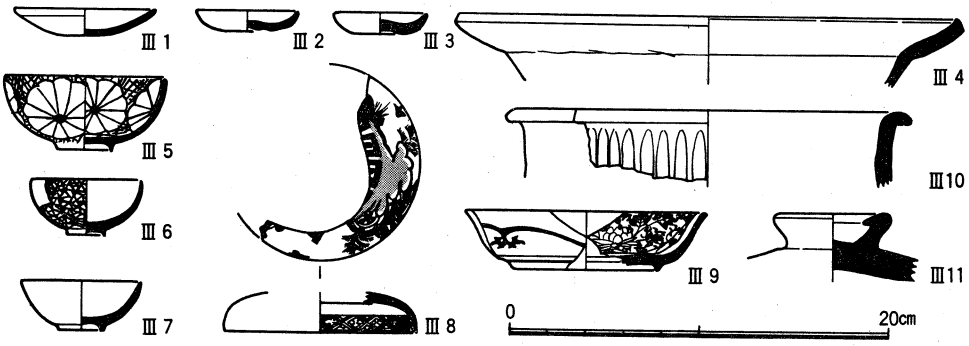


図25　ＳＤ１出土遺物（Ⅲ１～Ⅲ３土師器皿，Ⅲ４土師器鍋，Ⅲ５・Ⅲ６染付椀，Ⅲ７白磁椀，Ⅲ８染付椀蓋，Ⅲ９染付皿，Ⅲ10陶器鉢，Ⅲ11陶器蓋）

木野とは別の製作地のものであろう。土師質の燈明皿と燈明受皿に，Ⅲ15と類似した形態で，透明釉あるいは緑釉を薄く全面にかけたものがあり，Ⅲ15と同じく見込みに逆時計回りの回転台による撫で痕が残っている。Ⅲ15はこれらと同じ所でつくられたものかもしれない。Ⅲ22は，深草周辺でつくられた土師器のデンボである。Ⅲ22を含め，デンボは逆時計回りの回転台で調整されており，底部の篦切り痕が残る。デンボは，ツボツボとともに深草周辺でつくられ，伏見稲荷の門前で祭器あるいは玩具として販売された土師器である。ツボツボは直径高さともに2㎝程度のものしかないが，デンボは，大中小の3個体を入れ子にした図が寛文6年(1666)刊の『ひなまつりの故実』などに掲載されており，大中小3個体を1組で販売されていたようである。Ⅲ23は，口縁を波状に仕上げた土師器皿である。Ⅲ22と同じく白色を呈しており，やはり深草周辺でつくられたものであろう。合川珉和画『通神画譜』文政2年(1819)刊には，同型式の土師器皿を，大中小の3個体入れ子にした図が掲載されており，これもデンボと同じく，大中小3枚1組で販売していたと考えられる。Ⅲ24・Ⅲ25は焼き塩壺の蓋である。いずれも内面に布圧痕が残る。Ⅲ25は二次的に熱を受けた痕が顕著である。Ⅲ26・Ⅲ27は土師器の壺蓋である。Ⅲ26は内面に回転調整痕が明瞭に残っており，逆時計回りの回転台を用いたことがわかる。Ⅲ28は土師器の五徳であろう。内面上部に煤が付着している。口縁内面には半円球の突起が三方に付いていたようである。Ⅲ29～Ⅲ31は土師器炮烙である。外面には型痕の粗面が残り，口縁と内面は回転撫でで仕上げている。Ⅲ32は土師器の鍋である。外面には口縁まで全面に型痕の粗面が残り，Ⅲ29～Ⅲ31の炮烙と同じく外型を用いて作っている。Ⅲ33・Ⅲ34は染付のいわゆる「くらわんか」の椀である。Ⅲ33はコンニャク判で菊花を施文している。Ⅲ35・Ⅲ36は染付椀である。Ⅲ37は外面のみ青磁釉をかけた磁器の椀。Ⅲ38は口縁が外反する染付の小椀。Ⅲ39・Ⅲ40は筒形の磁器向付で，Ⅲ40は外面に青磁釉をかける。Ⅲ41は内外面に褐色釉をかけた陶器椀，Ⅲ42は黒色の帯文を描いた上に暗緑色の透明釉をかけた陶器椀である。Ⅲ43は染付の鉢。Ⅲ44は見込みの釉を蛇の目状にぬぐった唐津系銅緑釉皿である。Ⅲ45は内面に枝梅を描いた京焼系の皿である。Ⅲ46・Ⅲ47は京焼系の土瓶の蓋である。Ⅲ48は唐津系の鉢で，外面に刷毛目を施す。Ⅲ49は陶器香炉であろう。内外面に茶褐色の釉をかける。Ⅲ50・Ⅲ51は陶器の燈明受皿である。Ⅲ52は京焼系の小型の仏花瓶。Ⅲ53はほぼ同大の土師質の仏花瓶。Ⅲ52はさび絵で，Ⅲ53は緑釉で文様を描く。ともに時計まわりの轆轤回転を利用した糸切り痕が底部に残る。Ⅲ54・Ⅲ55は茶褐色の釉をかけた同型式の陶器鍋である。Ⅲ56は伏見人形の牛の頭部である。

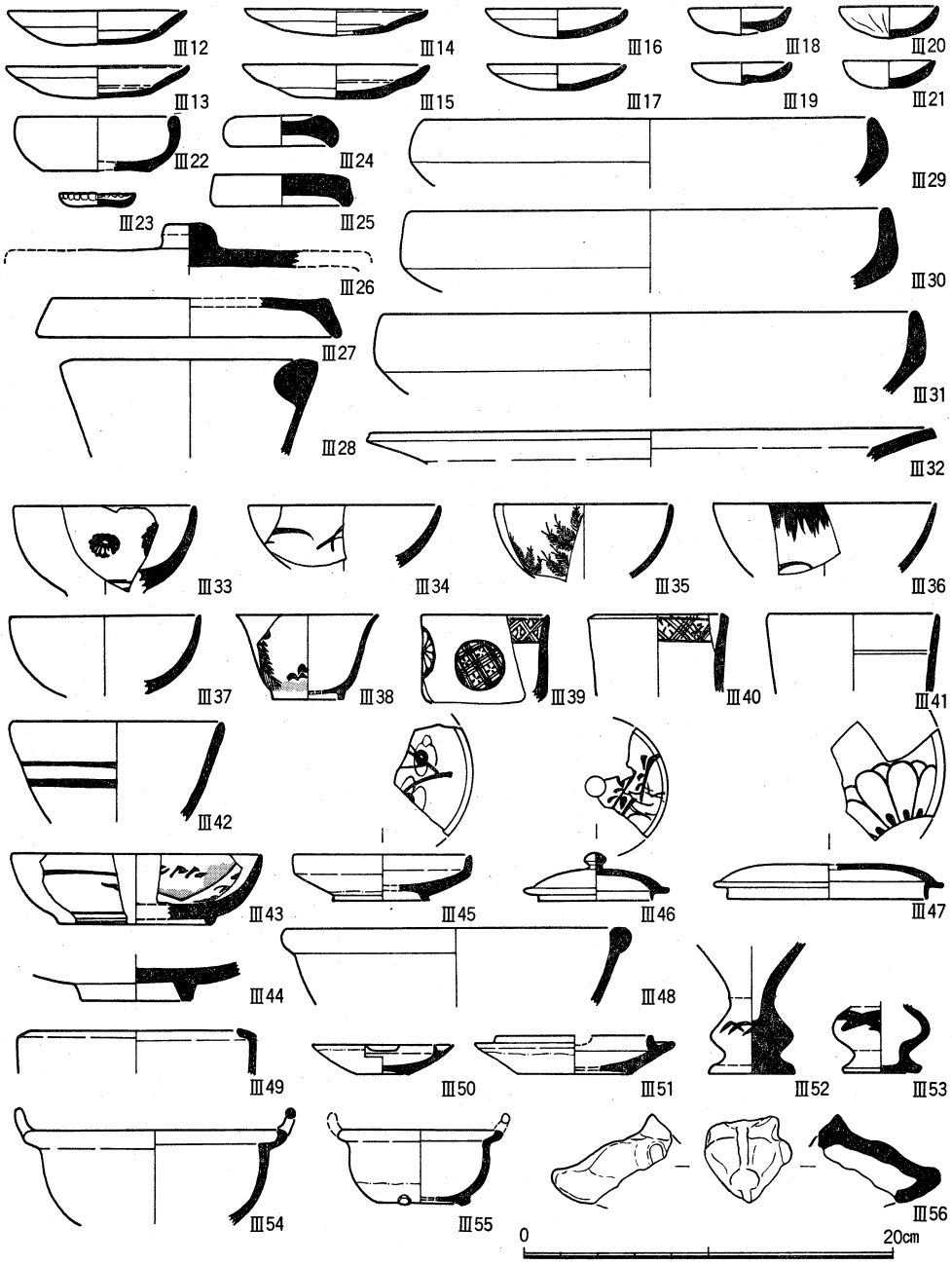


図26　ＳＤ２出土遺物（Ⅲ12～Ⅲ21・Ⅲ23土師器皿，Ⅲ22デンボ，Ⅲ24・Ⅲ25焼き塩壺蓋，Ⅲ26・Ⅲ27土師器壺蓋，Ⅲ28土師器五徳，Ⅲ29～Ⅲ31土師器炮烙，Ⅲ32土師器鍋，Ⅲ33～Ⅲ36・Ⅲ38染付椀，Ⅲ37青磁椀，Ⅲ39・Ⅲ40染付向付，Ⅲ41・Ⅲ42陶器椀，Ⅲ43染付椀，Ⅲ44・Ⅲ45陶器皿，Ⅲ46・Ⅲ47陶器蓋，Ⅲ48唐津鉢，Ⅲ49陶器香炉，Ⅲ50・Ⅲ51燈明受皿，Ⅲ52・Ⅲ53陶器仏花瓶，Ⅲ54・Ⅲ55陶器鍋，Ⅲ56伏見人形）

ＳＤ１からは，製作年代が18世紀後半まで下るⅢ５やⅢ６が出土しているが，広東椀，口反り椀，ゆきひらなど，18世紀末以降に特徴的な遺物はない。よって溝は18世紀末までに埋まったと考えられる。一方，ＳＤ１に切られているＳＤ２出土遺物のうち，Ⅲ44は17世紀後半から18世紀前半，Ⅲ33は18世紀前半に製作されたと考えられているものであるが，Ⅲ40は18世紀後半まで製作年代が下る可能性がある。

５　小　　結

本調査区で検出した溝ＳＤ１とＳＤ２は，その位置から考えて，近世吉田村の中口門から西へと伸びていた道路の南北いずれかの側溝にあたると考えられる〔浜崎83ｂ〕。中世の溝ＳＤ３も，ほぼこれと同じ位置に同じ方位ではしっており，中世の地割が近世まで踏襲されていたことがうかがえる。また，1975年に調査を実施した，西に接する14地点では，これらの溝と直交する方向の溝と落ち込みが検出されている。天理大学附属図書館蔵の『吉田社周辺絵図』によれば，中口門の西側は，東西46間半すなわち約83ｍの間が地下屋敷と畑となっており，その西端に南北方向の地境と思われる線がえがかれている。中口門から西46間半の地点は，ほぼこの落ち込みの位置にあたり，この図の地境にあたる可能性がある。

前述したように，本調査区は，近代の攪乱が著しく，遺構がほとんど残っていなかった。しかし，かろうじて残っていた溝と，西接する調査区でかつて検出した遺構と合わせて検討することにより，近世吉田村周辺の土地利用の一部を解明することができた。

第４章　京都大学本部構内ＡＸ30区の発掘調査

清水芳裕

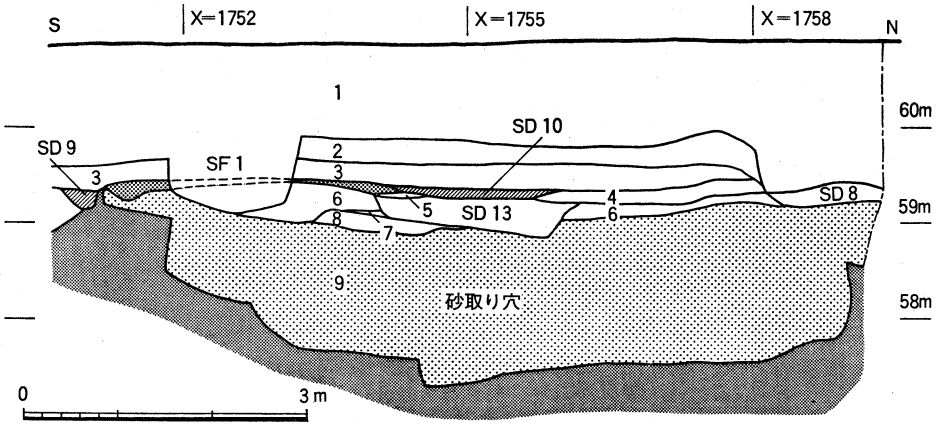
1　調査の経過

調査区は吉田山の西麓，京都大学本部構内の東北部に位置する(図版１-168)。工学部媒体統合実験研究棟の新営計画にともない，従来の調査から周辺のＡW28区(57地点)やＡＸ28区(90地点)で，近世白川道の遺構や中世の遺構群が明らかにされているため，予定地内全域の発掘調査をおこなったものである。

調査面積は330㎡である。古代から近世にいたる時期の遺構が残っており，古代の土坑，中世の道路遺構，近世の溝状遺構群などが検出された。とくに中世後半の道が発見されたことにより，これまで本部構内の５ケ所で明らかになっていた近世のそれとともに，古代以降，文献に志賀越，山中越，今道越，白川道などの名であらわれる道に関して，新たな資料を得ることとなった。

2　層　　位（図27）

調査区の現地表面は標高約61ｍで北東から南西に緩やかに下がる。基本的な層位は西半部では上から表土(第１層)，灰褐色土(第２層)，茶褐色土(第３層)，灰褐色砂質土(第４



1　表　　土　　3　茶褐色土　　5　暗黒色砂質土　　7　黄灰色砂質土　　9　白色砂
2　灰褐色土　　4　灰褐色砂質土　　6　赤褐色土　　8　黒褐色砂質土

図27　調査区西壁の層位　縮尺1/80

層)，暗黒色砂質土(第５層)，赤褐色土(第６層)，黄灰色砂質土(第７層)，黒褐色砂質土(第８層)，白色砂(第９層)の順である。また東半部では第２・３層の間に黄褐色土，暗褐色土，黒褐色土の３層が加わり，その結果，遺物包含層は東に厚く堆積する。

３　遺　　構（図版14，図28）

表土下の灰褐色土は砂礫をほとんど含まず，耕作土と考えられ，近世末の土師器，陶磁器，泥面子などが出土する。東半部の茶褐色土上面では西に低い段を境とする南北の溝とこれに直交し互いに約２ｍの間隔をもって平行する５列の溝が検出された。同様の遺構は北部構内ＢＤ30区の調査でも検出されており，南北の溝に対して直交する約1.2ｍの間隔をもった溝が連なるものである〔浜崎83ａ〕。これらは畑の畝に関係する溝と考えられる。このほか近世の溝ＳＤ８が調査区西北端で検出され，多くの陶磁器が出土した。

道路ＳＦ１は北東一南西方向で検出された。この遺構は13世紀ごろの土師器を含む黒褐色土の上面に構築されており，また15世紀ごろを中心とする土師器や中国製陶磁器を含む茶褐色土がこれを覆っている。道路の路面は２面存在し，古い路面１は黒褐色土の上面を固く叩きしめて作られている。道路幅は約4.5ｍで，両側に幅約30～80㎝の側溝ＳＤ９・ＳＤ10が設けられ，道路と周囲との明瞭な境を作り出している。この路面１には上端で幅約15～50㎝の轍が平行して数列検出された(図版14-2)。さらにこの路面１を覆って，径約

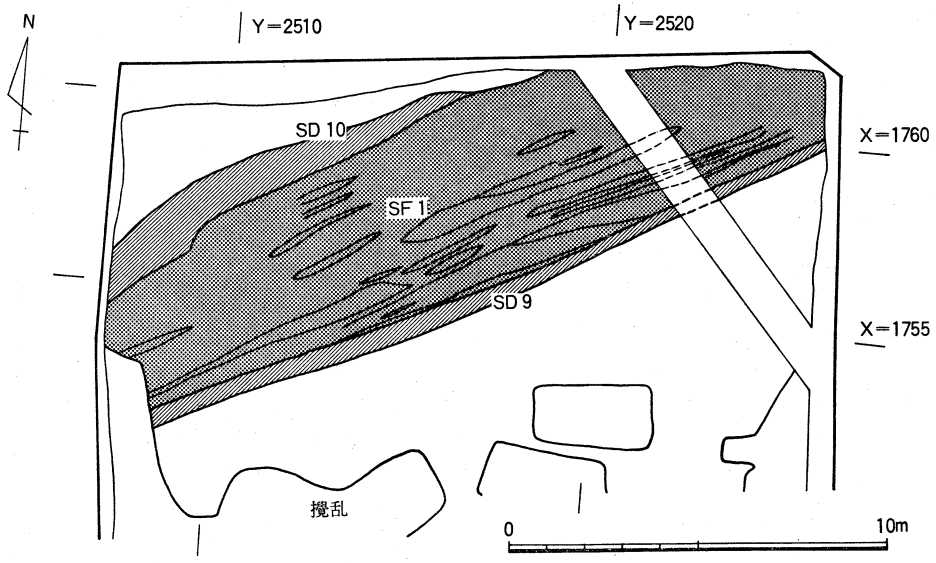


図28　道路ＳＦ１　縮尺1/200

10～20cmの礫を全面に敷きつめ，粗い砂質土でこれらを叩きしめた路面2が作られている（図版14-1）。この上面は礫が全面に露出した状態で，この面では轍の痕跡はみられないが，道路が使用された当時は砂質土によってより平坦な路面であったと考えられる。したがって，小規模な道路の修復は不明であるが，少なくとも大がかりな改修がなされている。しかし，道路の位置や規模にはほとんど変化がなく，従来の路面の修復にとどまり，側溝も両路面に存続して機能していたものであることが明らかとなった。

このほか，灰褐色土を掘り込む南北の溝ＳＤ１，赤褐色土を掘り込み粘質土が埋積した最大幅約１ｍで東西にはしる溝ＳＤ13などの溝を検出した。調査区北半では大規模な砂取り穴を，また，南半では土師器甕２個体だけを含む径約１ｍ，検出面からの深さ約0.8ｍの土坑ＳＫ２を検出した。

さて，京都大学では，これまでの発掘調査や立合調査によって，白川道に関する遺構は，本地点以外で５ケ所確認されている。その結果白川道に関する位置や構造が具体的に知られるようになった。その位置関係を近世吉田社周辺の絵図をもとに現本部構内の建物配置との関係から復原したものが図29である。Ａ～Ｅはいずれも近世の道路遺構で，Ｃ～Ｅ地点では近世後半の路面〔岡田・吉野80，五十川83，京大遺跡調査会88a〕，さらに，Ａ，Ｂ地

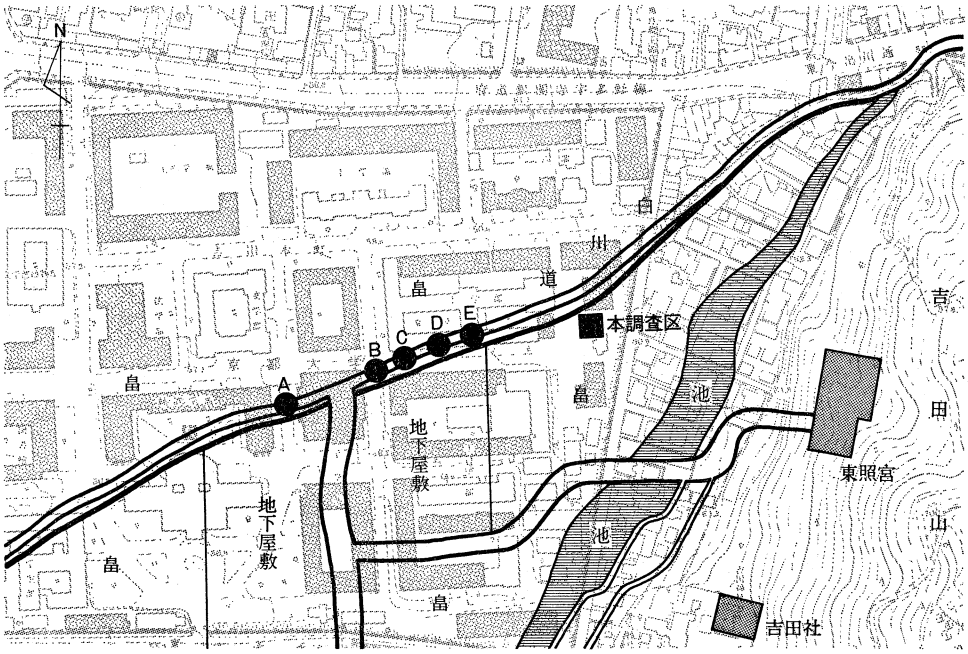


図29　近世吉田村北部の復原図と白川道の検出地点　縮尺1/5000

点ではこれらと同じ道路の断面が工事にともなう立合調査で検出されている。今回発見された道路は中世に遡るもので，さらに既発見地点から復原できる近世の道路の位置からは約20ｍ南へずれることが明らかになった。このことから文献にあらわれる中世から近世の一連の道は，その位置を少しずつ異にしながら存続しつづけたことがわかる。その要因は，この一帯の地が吉田社の社領であった中世から，吉田村をはじめとする村落が形成されはじめ，それを中心に周辺が田畑化されていった近世へと土地の利用が変化したことに対応しているものと考えられる。

4　遺　　物（図版15，図30～32）

出土した遺物は中世後半と近世のものが大部分を占め，このほかに若干の古代の遺物がみられる。Ⅳ１・Ⅳ２は，ともにＳＫ２出土の土師器甕である。Ⅳ１は口縁が緩やかに内湾し，口縁端には内傾した面取りをもつ。胴部内外面には刷毛目調整を，口縁部には横撫での調整を施す。Ⅳ２では内外面に刷毛目調整を施したのちに，外面の下半部を部分的に削る。Ⅳ３～Ⅳ６は，砂取り穴の埋土から出土した遺物である。Ⅳ３～Ⅳ５は土師器皿である。Ⅳ４は「て」字状口縁手法B_3類，Ⅳ５は１段撫で手法D_3類にあたる。Ⅳ６は瓦器椀で内面は丁寧な篦磨きで調整し，暗文を施す。比較的浅い器形で器壁は厚い。

Ⅳ７～Ⅳ30は黒褐色土からの出土遺物である。Ⅳ７～Ⅳ27は土師器皿。Ⅳ７・Ⅳ８・Ⅳ13・Ⅳ20～Ⅳ22・Ⅳ26は１段撫で手法D_1類，Ⅳ９～Ⅳ12・Ⅳ14・Ⅳ15・Ⅳ24・Ⅳ25は１段撫で手法D_2類，Ⅳ19・Ⅳ27は１段撫で手法D_3類，Ⅳ16～Ⅳ18は１段撫で手法D_4類にあたる。Ⅳ28・Ⅳ29は土師器の受皿，Ⅳ30は玉縁口縁の白磁椀である。この黒褐色土の出土遺物には，２段撫で手法を用いた土師器皿がほとんどなく，さらに大型の皿では口径14cm前後のものが多く，約13cmのものが少量加わり，小型の皿では口径８～９cmのものが主体を占める。このような点から黒褐色土出土遺物は中世京都Ⅰ期古段階～中段階にあたるものといえる。

Ⅳ31～Ⅳ34は道路ＳＦ１の２枚の路面をはさむ砂礫層から出土したものである。Ⅳ31は１段撫で面取り手法F_3類の土師器皿。Ⅳ32は白磁皿で内面見込みに圏線を施し，全面に施釉ののち，底部の釉を掻き取る。Ⅳ33・Ⅳ34は青磁椀で，底部は厚く比較的高台は小さい。Ⅳ33は蓮弁の鎬が明瞭でなく，見込みに圏線をもつ。Ⅳ34は内面見込みに型押しの花文を施す。Ⅳ31の土師器皿の形態などからＳＦ１の路面２の下限年代は中世京都Ⅲ期後半と考えられる。

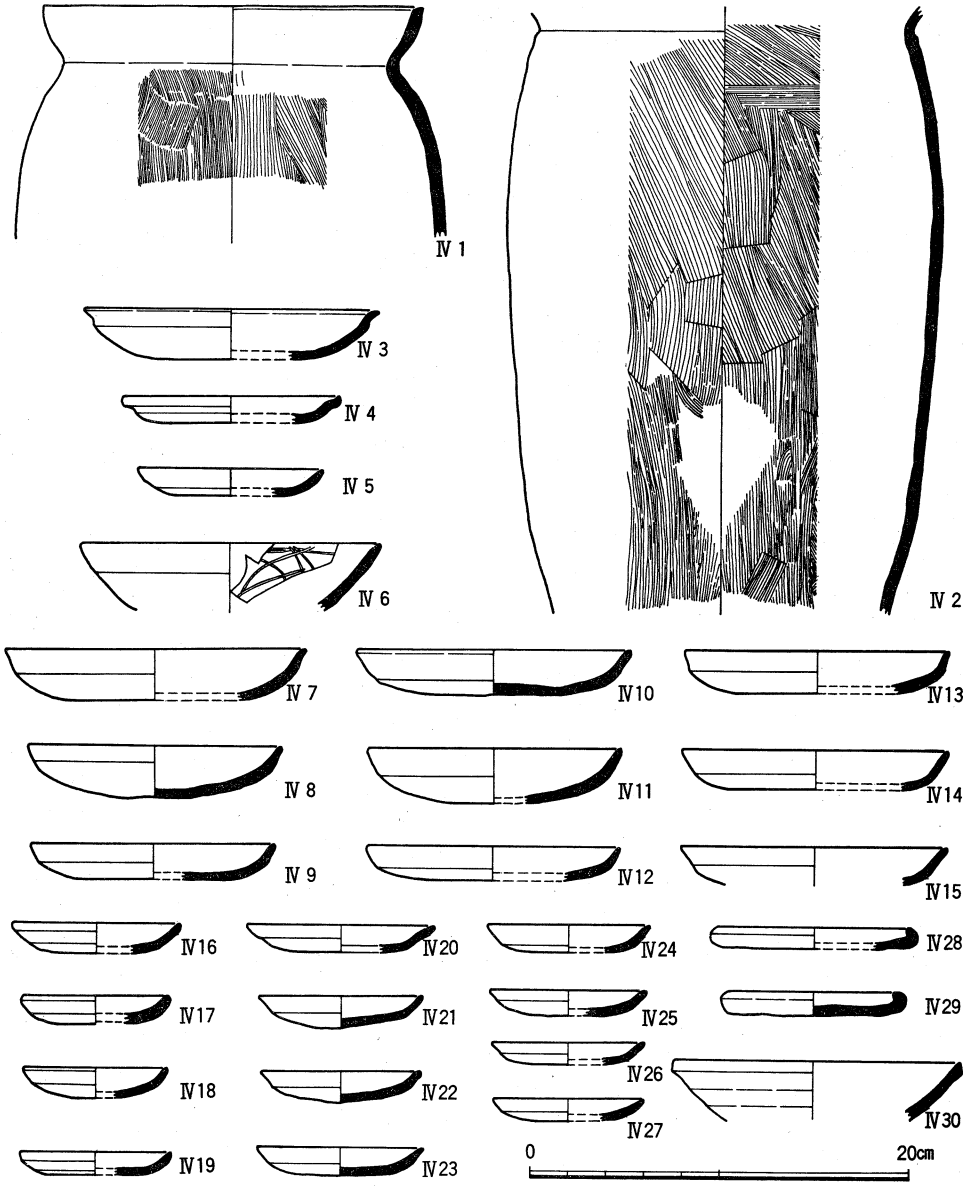


図30　ＳＫ２出土遺物(Ⅳ１・Ⅳ２土師器)，砂取り穴埋土出土遺物(Ⅳ３～Ⅳ５土師器，Ⅳ６瓦器)，黒褐色土出土遺物(Ⅳ７～Ⅳ29土師器，Ⅳ30白磁)

Ⅳ35・Ⅳ36はＳＦ１の路面２の出土遺物である。Ⅳ35は口縁端部が上下に発達した常滑産の陶器甕。Ⅳ36は白磁椀の底部。高台は削り出しで外面は露胎である。Ⅳ37はＳＦ１の側溝ＳＤ９出土の土師器高杯の脚部である。脚部の径は小さく，面取りは明瞭でない。

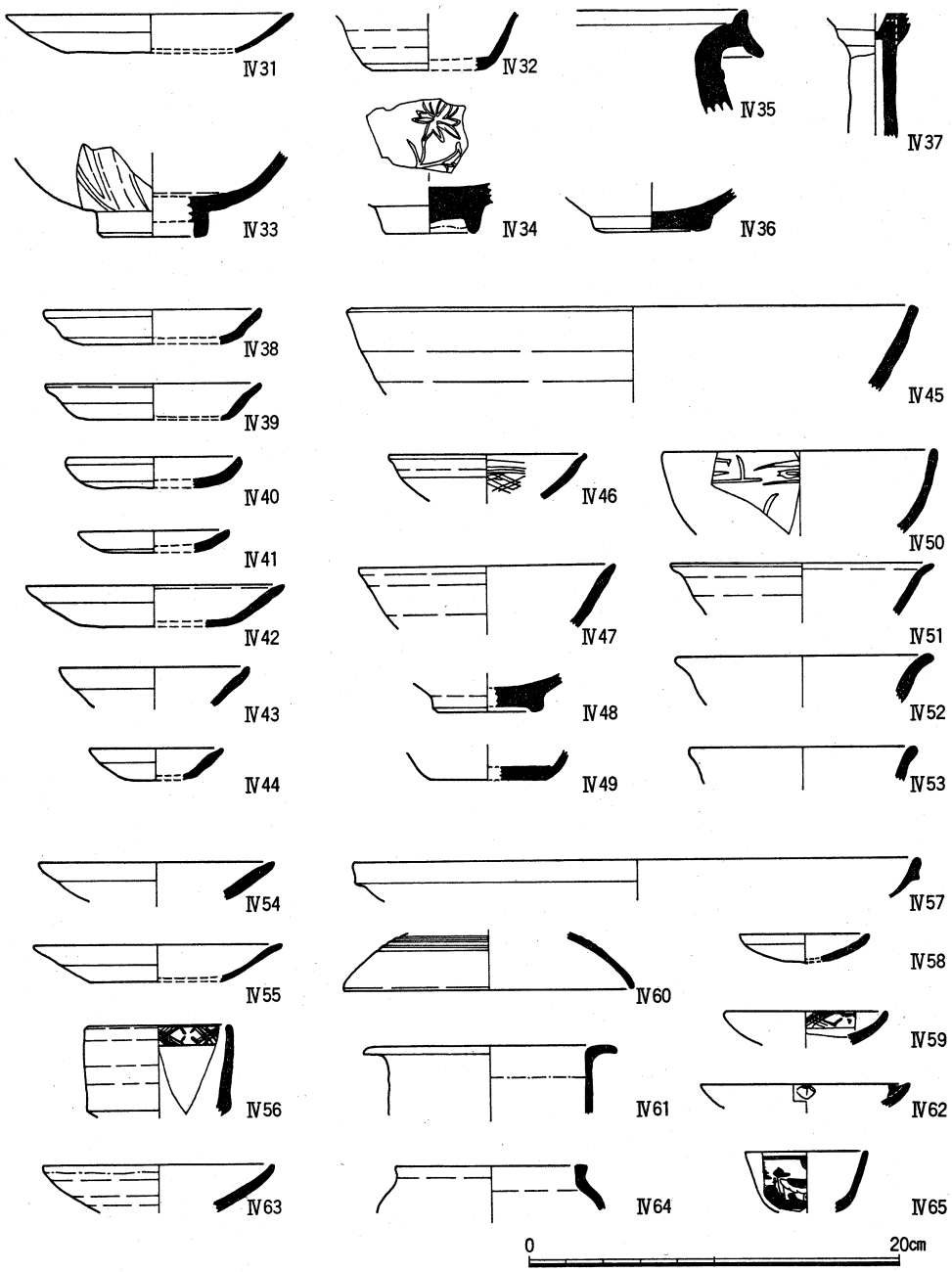


図31　ＳＦ１砂礫層出土遺物（Ⅳ31土師器，Ⅳ32白磁，Ⅳ33・Ⅳ34青磁），ＳＦ１路面１出土遺物（Ⅳ35陶器，Ⅳ36白磁），ＳＤ９出土遺物（Ⅳ37土師器），茶褐色土出土遺物（Ⅳ38～Ⅳ44土師器，Ⅳ45須恵器，Ⅳ46瓦器，Ⅳ47～Ⅳ49白磁，Ⅳ50～Ⅳ53青磁），暗褐色土出土遺物（Ⅳ54・Ⅳ55土師器），ＳＤ１出土遺物（Ⅳ56磁器），灰褐色土出土遺物（Ⅳ57・Ⅳ58土師器，Ⅳ60～Ⅳ64陶器，Ⅳ59・Ⅳ65磁器）

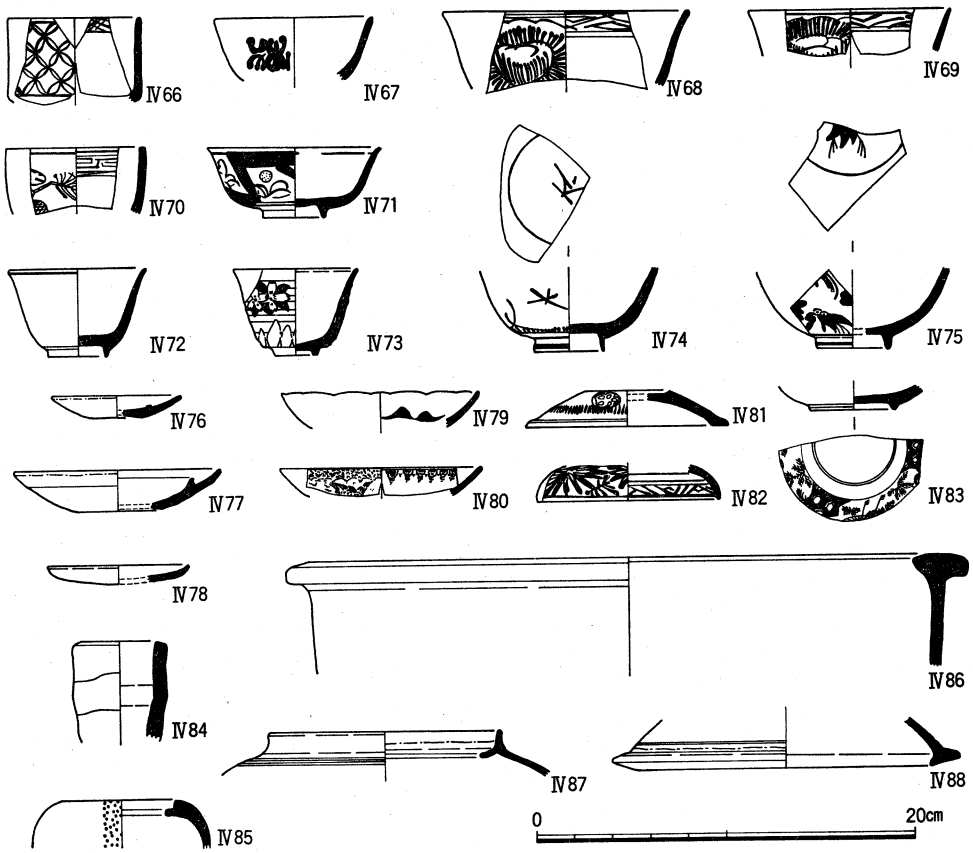


図32　ＳＤ８出土遺物（Ⅳ66～Ⅳ72・Ⅳ74・Ⅳ75・Ⅳ79・Ⅳ80・Ⅳ82・Ⅳ83磁器，Ⅳ73・Ⅳ76・Ⅳ77・Ⅳ81・Ⅳ86～Ⅳ88陶器，Ⅳ78・Ⅳ84・Ⅳ85土師器）

Ⅳ38～Ⅳ53は道路ＳＦ２の路面１を覆う茶褐色土出土遺物である。Ⅳ38～Ⅳ42は土師器皿。Ⅳ41・Ⅳ40・Ⅳ39・Ⅳ42はそれぞれ１段撫で手法のD_3類・D_4類・E_1類・F_3類にあたる。Ⅳ43・Ⅳ44は灰白色の土師器椀。Ⅳ45は須恵器すり鉢。Ⅳ46は瓦器椀で内面に暗文を施す。Ⅳ47・Ⅳ48は白磁椀，Ⅳ49は白磁皿，Ⅳ50は雷文帯蓮弁文青磁椀で雷文はややくずれており，この種の青磁椀の中では比較的新しい時期に属する。Ⅳ51～Ⅳ53は口縁が外反する無文の青磁椀である。１段撫で手法F_3類の土師器皿Ⅳ42などが混在する点からみて道路ＳＦ１は中世後半の遺構であることがわかる。

Ⅳ54・Ⅳ55は暗褐色土出土遺物。ともに土師器皿でⅣ54は１段撫で手法F_3類，Ⅳ55は同手法F_4類にあたる。

Ⅳ56はＳＤ１出土の磁器染付の向付。Ⅳ57～Ⅳ65は灰褐色土出土遺物である。Ⅳ57は土

師器鉢。体部の器壁は非常に薄く，外面には離型材として用いた雲母を含む細粒が付着しており型作りであることがわかる。また外面に煤が付着しており，一般に炮烙とよばれるものであろう。Ⅳ58は土師器皿。Ⅳ59は磁器染付の皿で外面に青磁釉を施す。Ⅳ60は陶器の蓋で上半部に同心円の沈線をめぐらせ，全体に淡黄色の釉を施す。Ⅳ61は陶器鉢。黒色釉を施し内面の口縁より下は露胎である。Ⅳ62は陶器の燈明受皿で内面上部に燈明皿を受ける突起をもつ。Ⅳ63は磁器の燈明皿。内面に黄褐色の釉を施し，釉には貫入が目立つ。Ⅳ64は陶器壺。外面に濃淡２種の緑色釉を施し，口縁上部から内面は露胎である。

Ⅳ65は磁器の小型椀で外面には鉄絵で屋形船を描いている。Ⅳ66は磁器染付の向付，Ⅳ67～Ⅳ70・Ⅳ72・Ⅳ74・Ⅳ75・Ⅳ83は磁器染付の椀。Ⅳ69・Ⅳ74は濃いコバルト色を呈し明治以後に下がるものであろう。Ⅳ67は口銹を施す。Ⅳ71は赤色の上絵付けの太い線で区画を設け，茶褐色と青色の上絵付けの花文を描いた小型の磁器椀。Ⅳ73は萬古焼の椀。上半には轆轤目を残し，下半には篦押しの凹部を残す。外面には桜花を描き，内面には白色釉を施す。外面下部に「桜花」の押印がみられる。

Ⅳ76は陶器の燈明皿。内面には淡黄色の釉がかかり口縁部外面に煤が付着する。Ⅳ77は陶器の燈明受皿。内面に淡黄灰色の釉を施し，立ち上がり部の上端には釉を欠く。Ⅳ78は土師器皿。Ⅳ79は輪花形の磁器染付鉢で口銹を施す。Ⅳ80は紙型を用いて施文をおこなった磁器染付の皿で，外面にはＣ字形と紡錘形の文様を口縁にめぐらせ，ほかに瓔珞(ようらく)文，飛鶴文が加わる。内面には口縁に接して瓔珞文をめぐらせる。Ⅳ81は陶器の蓋で「飛び鉋」を一段めぐらせその上部に桜花の文様を付して，淡緑色の釉を施す。Ⅳ82は磁器染付の椀蓋。Ⅳ84は土師器焼き塩壺。Ⅳ85は口縁部に蓋受けの構造をもち外面には魚子状(ななこ)の凹みが付され，内面には指押え痕が残る用途不明の土師器である。Ⅳ86は陶器土瓶の口縁部で，白化粧の上に暗緑色の透明釉を施す。蓋受けと内面は露胎で，肩部に凹線がめぐる。Ⅳ88はゆきひら蓋で薄い黒色釉を施す。ＳＤ８出土資料のうち，Ⅳ69・Ⅳ74のような純度の高いコバルト釉を用いた染付や，Ⅳ80のように紙型による施文法を用いたものがあることから，この遺構の下限は19世紀後半であろう。

５　小　　結

土坑ＳＫ２から出土した６・７世紀ごろのものと考えられる土師器甕は，1980年度の本部構内ＡＴ27区で検出された８世紀後半にあたる２棟の竪穴住居跡〔五十川81〕などとともに平安遷都以前の鴨東地域の歴史の一端を知る資料となった。

小　　結

また今回の調査では古代から近世にわたって文献の上にしばしばあらわれる京と近江を結ぶ道のうち，中世後半の遺構が発見され，従来から本部構内で知られている近世の白川道との位置関係の比較をするための新たな資料を得ることができた。中世後半の道に関する文献の記録もいくつか存在する。15世紀には神楽岡，山中，坂本に関所が設けられ，有力寺社，荘園領主による関銭の徴収に対し，馬借が関の撤廃を要求して坂本からしばしば京に乱入したことが，『看聞御記』などの貴族の日記にあらわされている。[(1)] また，室町後期には，山中路は上洛のための軍事的要路とみなされ，安土に居城していた織田信長がしばしば道路の普請を吉田や白川の住民達に命じたことが吉田社の神官吉田兼見の記した『兼見卿記』にみられる。[(2)]

古代以来京への重要な幹線としての役割をはたした，この道は北白川扇状地からさらに西へ延びる扇状地末端部の小規模な尾根状の地形を選択して設けられ，道路の保全上非常に有利な位置に設けられている。このような地形の上を時代によりその位置をわずかに変えながら道路が維持されてきたことがわかる。従来から明らかになっていた近世の道と今回の中世の道の位置関係もそのことを示している。今後さらにそれ以前の道路遺構が周辺で検出されることが十分考えられる。こうした蓄積がなされれば，道とその周辺村落の景観や土地利用の変化，あるいる道路構築にかかわる土木技術の変遷などを検討する上で貴重な資料となるであろう。

〔注〕

1　『看聞御記』応永25年(1418)6月25日・永享5年(1433)7月24日の条，『大乗院寺社雑事記』文正元年(1466)12月20日・文明4年(1472)9月9日の条など。
2　『兼見卿記』天正3年(1575)2月15日・同年同月26日・同年3月3日の条。

参 考 文 献

石田志朗・中村徹也　1972年　『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』

泉　拓良　1977年　「京都大学植物園遺跡」『佛教藝術』115号

1983年　「京都大学教養部構内ＡＯ21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和52年度』

泉　拓良・浜崎一志　1981年　「京都大学構内の試掘・立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』

泉　拓良・吉野治雄　1979年　「京都大学医学部構内ＡＯ18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』

五十川伸矢　1981年　「京都大学本部構内ＡＴ27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』

1983年　「京都大学本部構内ＡＸ28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』

1986年　「京都大学医学部構内ＡＮ20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和58年度』

1988年　「鴨東白川の鋳物工房――京都大学構内の鋳造に関する遺跡――」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度』

五十川伸矢・飛野博文　1984年　「京都大学教養部構内ＡＰ22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』

五十川伸矢・宮本一夫　1988年　「京都大学医学部構内ＡＮ18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度』

宇野隆夫　1981年　「遺物の考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ―白川北殿北辺の調査―』

梅原末治　1923年　「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告』第５冊

1935年　「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第16冊

1936年　『摂津阿武山古墓調査報告』(『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第７輯)

岡田保良　1981年　「層位と遺構」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ―白川北殿北辺の調査―』

岡田保良・吉野治雄　1980年　「京都大学本部構内ＡＷ28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度』

小野賢一郎　1933年　『陶器全集』

小野山節・都出比呂志　1973年　『高槻市安満遺跡の条里遺構』

小野山節・中村徹也　1976年　『京都大学教養部Ａ号館増築予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』

川上　貢　1977年　「京都大学構内における史跡の文献的考察」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和51年度』

京大遺跡調査会(京都大学構内遺跡調査会)

1988年ａ　『京都大学本部構内の遺跡――ＡＷ27区発掘調査現地説明会資料――』

1988年ｂ　『京都大学医学部附属病院構内の遺跡―ＡＨ19区発掘調査現地説明会資料―』

京大調査会(京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会)

1977年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和51年度』

参 考 文 献

京大埋文研（京都大学埋蔵文化財研究センター）

1978年a　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和52年度』

1978年b　『京都大学埋蔵文化財調査報告　第1冊――京大農学部遺跡BG36区――』

1979年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』

1980年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度』

1981年a　『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ――白川北殿北辺の調査――』

1981年b　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』

1983年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』

1984年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』

1985年　『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ――北白川追分町縄文遺跡の調査――』

1986年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和58年度』

1987年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和59年度』

1988年　「京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度』

島地　謙・伊東隆夫　1982年　『図説木材組織』

島地　謙・伊東隆夫編　1988年　『日本の遺跡出土木製品総覧』

島田貞彦　1924年　「京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第5号

島田貞彦・水野清一・小川五郎・三宅宗悦　1929年　「摂津国高槻「摂津農場」石器時代遺跡調査報告」『人類学雑誌』第44巻第7号

杉山信三　1962年　『院の御所と御堂』（『奈良国立文化財研究所学報』第11冊）

平良泰久・塩沢珠代・杉本　宏・橋本高明　1978年　「吉田近衛町遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1978-4

同志社調査会（同志社大学校地学術調査委員会）　1983年　『公家屋敷二条家北辺地点の調査―同志社女子中・高　黎明館増築に伴う発掘調査―』（『同志社大学校地学術調査委員会調査資料No.15』）

中村徹也　1973年　『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』

1974年a　『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』

1974年b　「京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』

1975年　『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』

橋本久和　1980年　「中世土器研究予察」『上牧遺跡発掘調査報告書』（『高槻市文化財調査報告書』第13冊）

浜崎一志　1983年a　「京都大学北部構内BD30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』

1983年b　「浄蓮華院と吉田構――応仁の乱後の吉田の復原的考察――」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』

1984年　「京都大学病院西構内AF15区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』

浜崎一志・宮本一夫　1987年　「京都大学病院構内AF19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和59年度』

藤岡謙二郎　1973年　「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理学的意義」『人文』第19集

1978年　「北白川扇状地と京都大学構内遺跡」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和52年度』

森谷尅久　1973年　「伝統産業の成立」『京都の歴史』第6巻

藪内　清編　1955年　『立杭窯の研究――技術・生活・人間――』

横山浩一・佐原　眞　1960年　『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部日本先史時代

京都大学構内遺跡調査要項

京都大学埋蔵文化財研究センター要項

第1条　京都大学に埋蔵文化財研究センター(以下「センター」という。)を置く。

第2条　センターは，京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のため必要な業務を行う。

第3条　センターにセンター長を置く。

2　センター長は，京都大学の専任の教授をもって充てる。

3　センター長の任期は，2年とし，再任を妨げない。

4　センター長は，センターの所務を掌理する。

第4条　センターに，必要に応じて，助教授，助手その他の職員を置く。

第5条　センターに，調査研究及び保存に関する業務を処理するため，研究部を置く。

2　研究部に主任を置き，前条の教官をもって充てる。

3　主任は，研究部の業務をつかさどる。

第6条　センターにセンターの事業に関する基本的計画，人事その他管理運営に関する重要事項を審議するため，運営協議会を置く。

2　運営協議会は，次の各号に掲げる委員で組織する。

(1)　センター長

(2)　センターの研究部の主任

(3)　前2号以外の学識経験者のうちから総長の委嘱した者　若干名

(4)　事務局長及び施設部長

3　センター長は，運営協議会を招集し，議長となる。

4　前各項に規定するもののほか，運営協議会の運営に関し必要な事項は，運営協議会が定める。

第7条　この要項に定めるもののほか，センターの組織及び運営に関し必要な事項はセンター長が定める。

センター長	西川　幸治(工学部教授)
運営協議会委員	小野山　節(文学部教授)
〃	應地　利明(文学部教授)
〃	川又　良也(法学部教授)
〃	上田　正昭(教養部教授)
〃	足利　健亮(教養部教授)
〃	東村　武信(原子炉実験所教授)
〃	鎌田　元一(文学部助教授)
〃	山中　一郎(文学部助教授)
〃	石田　志朗(理学部助教授)
〃	林　昭三(木材研究所助教授)
〃	清水　芳裕(文学部助手)
運営協議会委員	石井　久夫(事務局長)
〃	榊原　郁夫(施設部長)
研究部主任	清水　芳裕(文学部助手)
研究部研究員	五十川伸矢(文学部助手)
〃	浜崎　一志(工学部助手)
〃	宮本　一夫(文学部助手)
〃	難波　洋三(文学部助手)
〃	盛　恵子(施設部教務補佐員)
事務室	和田　俊司(施設部事務官)
〃	中村　美代(施設部事務補佐員)
〃	菅原　令子(施設部事務補佐員)

京都大学構内遺跡調査金規約

第1条　この会は，京都大学構内遺跡調査会(以下「調査会」という。)と称し，京都大学の委託により同大学構内における建築物新営工事等に伴い必要な敷地内の遺跡調査を行うことを目的とする。

第2条　調査会は，事務所を京都市左京区北白川西町財団法人阪本奨学会内に置く。

第3条　調査会は，第1条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1)　京都大学の委託により行う当該敷地内の埋蔵文化財についての発掘調査

(2)　前号の調査により出土した埋蔵文化財の保存，管理に関する事項の審議

(3)　埋蔵文化財の調査に関する発掘調査概要報告書の作成

(4)　その他必要とする事項

第4条　調査会に次の役員を置く。

(1)　会長1名

(2)　委員

イ　京都大学の学識経験者　若干名

ロ　新営工事等の敷地の属する京都大学の部局の長または部局附属施設の長

ハ　新営工事等の敷地の所在する地域の文化財保護行政当局の推薦する者　若干名

(3)　監事　若干名

2　会長は，前項2号イの委員の推薦する者とする。

3　会長の任期は2年とし，再任を妨げない。

4　委員及び監事は，会長が委嘱する。

5　第1項第2号ロ及びハの委員は，当該敷地内の遺跡調査に関する委員としての任務が終わったときは，退任する。

第5条　会長は，調査会を代表し，業務を総括する。

2　委員は，委員会を構成し，委員会の議決に基づく業務を執行する。

3　監事は，調査会の会計を監査する。

第6条　委員会は，会長及び委員をもって組織する。

2　委員会は，会長が招集し，議長となる。

3　委員会は，新営工事等の敷地が京都市以外の地域にある場合で，必要と認めたときは，部会を置くことができる。

第7条　第3条の発掘調査の実施に当たるため，調査会に調査班を置く。

2　調査班は，調査班長，調査員及び調査補助員をもって組織する。

3　調査班長は，委員会の議に基づき会長が委嘱する。

4　調査員及び調査補助員は，調査班長の推薦により会長が委嘱する。

第8条　調査会の事務を処理するため，調査会に事務局を置く。

2　事務局に職員若干名を置く。

3　職員は，会長が任免する。

第9条　調査会の経費は，京都大学から支出される調査委託費をもって充てる。

第10条　調査会は，4月1日に始まる年度ごとに，事業報告書及び収支決算書を作成し，監事の監査を経て，年度終了後3ヶ月以内に委員会の承認を受けるものとする。

第11条　この規約に定めるもののほか，調査会の運営に関し必要な事項は，会長が定める。

京都大学構内遺跡調査要項

調査委員会

会　　長　　久馬　一剛(農学部教授)

委　　員　　小野山　節(文学部教授)　　山中　一郎(文学部助教授)
大山　喬平(文学部教授)　　石田　志朗(理学部助教授)
亀井　節夫(理学部教授)　　西村　　進(理学部助教授)
川上　　貢(工学部教授)　　上野　陽里(医学部助教授)
西川　幸治(工学部教授)　　清水　芳裕(文学部助手)
足利　健亮(教養部教授)　　建本　信雄(事務局庶務部長)

規約第4条1項(2)ロ
内野　治人(医学部附属病院長)　　佐野　哲郎(教養部長)
赤井　浩一(工学部長)　　藤原　元始(ＲＩセンター長)

規約第4条1項(2)ハ
浪貝　　毅(京都市埋蔵文化財調査センター所長)
泉　　拓良(奈良大学助教授)

監　　事　　金　　光男(施設部企画課長)　　有原　満雄(医学部附属病院管理課長)
松田　栄博(教養部事務長)　　岸本　弘三(工学部経理課長)
上田　照夫(ＲＩセンター事務掛長)

事　務　局

事務局員　　和田　俊司(施設部事務官)　　松本　一代(調査会事務員)

調　査　班

調査班長・主任　清水　芳裕，五十川伸矢，浜崎　一志，宮本　一夫，難波　洋三，盛　　恵子

調　査　員　　伊東　康人，梶　　聡，竹村　厚司，竹村　恵二，千葉　　豊，早野　三郎，
森本　　晋，山口　和穂

調査補助員　　石本　由野，上野　京子，加茂　友基，河野　一隆，菊池　啓介，坂田　朱美，
高橋　克壽，高橋　照彦，田中　克幸，谷口由利子，中村　直弘，西川恵美子，
松田　　聡，宮崎　智嗣，横田　泰之

作　業　員　　五十棲彰雄，射場　実信，右川　　清，浮田　博文，川上ヨシエ，木村　謙次，
河野　佳子，古前　健次，鈴木　　功，橋本　庄次，橋本　俊夫，長谷川智造，
長谷川秀実，福田　文治，三谷　正三，安田　秀男

病院構内ＡＪ18区整理調査班

所在地	京都市左京区吉田橋町
工事名	附属病院内科系病棟新営
調査期間	1986年4月1日～同10月31日
面積	4294.5㎡
班長・主任	清水芳裕，浜崎一志，難波洋三
調査員	1名
調査補助員	2名
作業員	2名

病院構内ＡＪ19区整理調査班

所在地	京都市左京区吉田橋町
工事名	医学部内科系臨床研究棟新営
調査期間	1986年4月1日～同11月30日
面積	3000㎡
班長・主任	五十川伸矢，宮本一夫
調査員	3名
調査補助員	7名
作業員	9名

京都大学構内遺跡調査要項

教養部構内ＡＰ25区発掘・整理調査班

所在地　京都市左京区吉田二本松町
工事名　教養部校舎新営
調査期間　1986年７月１日～
1987年１月31日
面積　599㎡
班長・主任　清水芳裕，宮本一夫，難波洋三
調査員　４名
調査補助員　９名
作業員　14名

本部構内ＡＸ30区発掘・整理調査班

所在地　京都市左京区吉田本町
工事名　工学部媒体総合実験研究棟新営
調査期間　1986年９月16日～
1987年１月31日
面積　330㎡
班長・主任　清水芳裕，難波洋三
調査員　１名
調査補助員　２名
作業員　11名

医学部構内ＡＬ20区発掘調査班

所在地　京都市左京区吉田橋町
工事名　放射性同位元素総合センター
有機廃液処理設備室新営
調査期間　1986年12月15日～
1987年１月31日
面積　331㎡
班長・主任　浜崎一志，難波洋三
調査員　２名
調査補助員　４名
作業員　９名

学生寄宿舎建設予定地試掘調査

所在地　京都市左京区吉田近衛町
調査期間　1986年４月28日～同４月30日
面積　24㎡
担当者　清水芳裕，五十川伸矢，浜崎一志

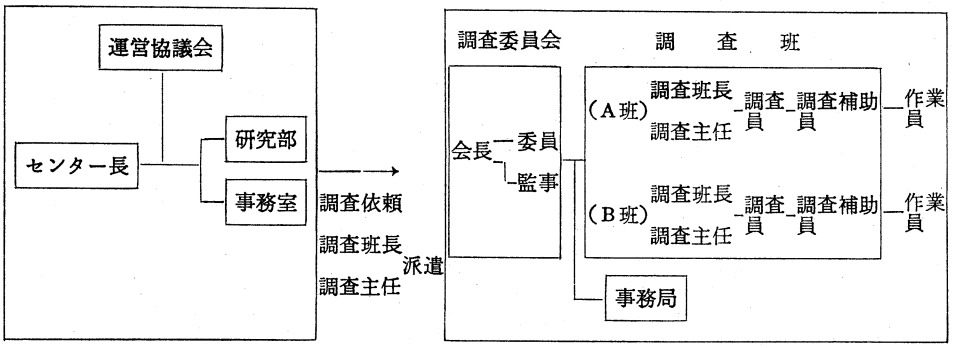
農学部附属農場試掘調査

所在地　京都市左京区北白川追分町
調査期間　1986年８月26日～同４月30日
面積　16㎡
担当者　清水芳裕

附属病院サービスサプライ棟増築予定地試掘調査

所在地　京都市左京区聖護院川原町
調査期間　1986年８月29日
面積　12㎡
担当者　浜崎一志
調査補助員　４名

京都大学構内遺跡の調査体制



京都大学埋蔵文化財研究センター　　京都大学構内遺跡調査会

表3　京都大学構内遺跡のおもな調査

（地点は図版1を参照，文献中「埋」は京大埋文研，「調」は京大調査会をさす。）

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1923	農学部	1・2	濱田　耕作	表採・試掘			縄文土器，石器	梅原23，島田24	
1924	農学部	不明	藤本理三郎				石棒	横山・佐原60	
1929	大阪府安満		島田　貞彦，水野清一ほか	発掘			弥生土器	島田・水野ほか29	
1934	大阪府阿武山古墳		梅原　末治	発掘			乾漆棺，玉飾枕	梅原36	
1935	北白川小倉町		梅原　末治				縄文土器，石器	梅原35	
1956	農学部	3	羽館　易	採集			縄文土器		
1971	農学部	4	石田　志朗	採集			弥生土器	埋79	
1972	農学部	5		採集			石棒		
	大阪府安満		小野山　節 都出比呂志	事前発掘	1500	条里の溝	弥生土器，石器	小野山・都出73	建物をずらし条里の溝を保存
	追分地蔵	6	石田　志朗 中村　徹也	事前発掘	600		弥生土器，石器	石田・中村72	
	教養部	7	藤岡謙二郎	工事中採集・実測			縄文土器	藤岡73	
1973	農学部	8	中村　徹也	事前発掘	13	瓦溜	縄文土器，瓦(平安)	埋78b	瓦溜埋戻し
	農学部	9	中村　徹也	事前発掘	600		縄文土器，土師器	中村73	
	農学部	10	中村　徹也	事前発掘	40		縄文土器		
	植物園	11	中村　徹也	事前発掘	400	縄文後期甕棺・配石遺構	縄文土器	中村74b，泉77	甕棺・配石遺構の移築を決定
1974	農学部	12	中村　徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村74a	
	農学部	13	中村　徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村75	
1975	教養部	14	小野山　節 中村　徹也	事前発掘	750		土師器，瓦，陶磁器	小野山・中村76	
1976	農学部BE33区	16	泉　拓良	事前発掘	900	縄文晩期土壙墓	縄文土器，土師器，瓦	調77	
	病院AE15区	19	岡田　保良	事前発掘	2200	古代・中世池，溝，土器溜	土師器，瓦，陶磁器	調77，埋81a	
	植物園BD35区	29	吉野　治雄	保存				調77	甕棺・配石の移築復原

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1976	病院 AH17区	34	泉　拓良	事前発掘	200	近世溝，井戸，集石	土師器，瓦	埋78 a	
	和歌山県 瀬戸		丹羽　佑一	事前発掘	300	縄文時代土壙墓	縄文土器，人骨	埋78 a	
1977	病院 AF14区	39	岡田　保良 宇野　隆夫	事前発掘	800	古代護岸，中世溝，井戸	土師器，瓦，陶磁器	埋78 a，埋81 a	
	医学部 AO18区	41	泉　拓良 吉野　治雄	事前発掘	1200	中世溝，土器溜，井戸	土師器，瓦，陶磁器	埋79	
1978	理学部 BE29区	54	岡田　保良 宇野　隆夫 吉野　治雄	事前発掘	500	弥生中期方形周溝墓，中世火葬塚	弥生土器，土師器，瓦	埋79	火葬塚と方形周溝墓を現地保存
	農学部 BG32区	55	泉　拓良 宇野　隆夫	事前発掘	100	古代土坑，溝	縄文土器，土師器	埋79	
	北部 BG31区	56	泉　拓良 宇野　隆夫	事前発掘	650	縄文晩期埋没林	縄文土器	埋80 埋85	
	本部 AW28区	57	岡田　保良 吉野　治雄	事前発掘	500	近世白川道	陶磁器，土師器，銭貨	埋80	
1979	医学部 AP19区	74	清水　芳裕 五十川伸矢 吉野　治雄	事前発掘	2776	中世井戸，溝，土器溜	土師器，瓦，陶磁器，旧石器	埋81 b	
	本部 AT27区	75	五十川伸矢	事前発掘	400	奈良後期竪穴住居，中世土壙墓，近世道路	土師器，須恵器，白磁	埋81 b	竪穴住居跡を現地保存
1980	本部 AT27区	89	泉　拓良	事前発掘	115	近世道路，堀	土師器，近世陶磁器	埋81 b	
	本部 AX28区	90	泉　拓良 五十川伸矢 浜崎　一志	事前発掘	1120	近世白川道，中世土器溜，井戸，建物	土師器，瓦，陶磁器，銅鏃(弥生)，磨製石鏃	埋83	
	京都府 美月		泉　拓良 清水　芳裕 五十川伸矢 浜崎　一志 吉野　治雄	事前発掘	1468	弥生中・後期水路，土坑，中世土器溜	弥生土器，打製石斧，瓦器，陶磁器	埋83	立合調査中に遺跡発見，工事を中断し発掘調査
	教養部 AO21区	91	吉野　治雄	事前発掘	112	中世井戸，土壙墓	土師器，瓦器，陶磁器	埋83	
	本部 実験排水	98	清水　芳裕	立合		流路，中世土器溜	土師器，丸瓦	埋83	遺構実測

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1981	理学部 BD30区	109	泉 拓良 浜崎 一志	事前発掘	272	古代建物，近世瓦溜	土師器，瓦，陶磁器	埋83	
	和歌山県瀬戸		泉 拓良 清水 芳裕 五十川伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1500	弥生土坑，弥生配石，古墳時代土坑	縄文土器，硬玉管玉，弥生土器，製塩土器	埋84	
	本部 AX28区	110	浜崎 一志	事前発掘	34	中世土器溜	土師器，瓦，陶磁器，硯	埋83	
	教養部 AP22区	111	五十川伸矢 飛野 博文	事前発掘	1716	古墳，古代梵鐘鋳造遺構，中世門，溝，墓	縄文土器，弥生土器，須恵器，土師器，鋳型，溶解炉	埋84	梵鐘鋳造遺構を現地保存
	京都市本山			分布調査			縄文土器，緑釉陶器，灰釉陶器	埋83	
1982	京都府中海道		泉 拓良	試掘	20	中世土器溜	縄文土器，土師器	埋84	
	病院 AF15区	122	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	1028	中世井戸，溝，土坑	土師器，瓦器，白磁	埋84	
	農学部 BF33区	123	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	787	縄文住居跡，中世土坑	縄文土器，土師器	埋84	縄文住居跡を現地保存
	和歌山県瀬戸		泉 拓良	事前発掘	297	古代製塩炉	縄文土器，弥生土器，製塩土器	埋84	古代製塩炉を移築保存
	本部 AT29区	124	泉 拓良 飛野 博文	事前発掘	890	中世濠，建物	土師器，瓦器，陶磁器	埋86	
	農学部 BE33区	125	泉 拓良 飛野 博文	事前発掘	803	中世・近世水田，溝	土師器，瓦，陶磁器	埋86	
1983	医学部 AN20区	134	泉 拓良 五十川伸矢	事前発掘	863	中世井戸，土取り穴	須恵器，瓦器，土師器	埋86	
	北部 BF31区	135	清水 芳裕 五十川伸矢	事前発掘	737	縄文埋没林，古代・中世溝	縄文土器，土師器，緑釉陶器	埋87	
1984	病院 AF19区	141	浜崎 一志 宮本 一夫	事前発掘	863	近世池，井戸，野壺	縄文土器，蓮月焼	埋87	
	病院 AJ19区	142	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	260	中世土坑，近世土取り穴	土師器，近世陶磁器	埋87	
	医学部 AN18区	143	五十川伸矢 宮本 一夫	事前発掘	1920	中世井戸，土取り穴，中世梵鐘鋳造遺構	土師器，瓦器，鋳型	埋88	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1985	北部 ＢＪ31区	153	清水　芳裕 宮本　一夫	事前発掘	624	古代溝,建物跡,土坑,近世溝	弥生土器,土師器,須恵器	埋88	
	病院 ＡＪ18区	154	清水　芳裕 浜崎　一志 菱田　哲郎	事前発掘	4295	中世井戸,近世土取り穴	土師器,近世陶磁器	第２章	
	病院 ＡＪ19区	155	五十川伸矢 宮本　一夫	事前発掘	3000	中世井戸,近世土取り穴	土師器,近世陶磁器,鋳型	第２章	
1986	教養部 ＡＰ25区	167	清水　芳裕 宮本　一夫 難波　洋三	事前発掘	599	中世・近世溝	土師器,近世陶磁器	第３章	
	本部 ＡＸ30区	168	清水　芳裕 難波　洋三	事前発掘	330	古代土坑,中世道路	土師器,陶磁器	第４章	
	医学部 ＡＬ20区	169	浜崎　一志 難波　洋三	事前発掘	331	近世土取り穴	土師器,陶磁器		発掘中
	教養部 ＡＬ23区	170	清水　芳裕 五十川伸矢 浜崎　一志	試掘	24	中世溝	土師器,瓦器,陶器	第１章	
	病院 ＡＨ15区	171	浜崎　一志	試掘	12				遺跡なし
	北部 ＢＩ32区	172	清水　芳裕	試掘	16		縄文土器,須恵器,土師器		縄文包含層
	病院 ＡＪ10区	173	清水　芳裕	立合					遺跡なし
	京都府 宇治		五十川伸矢	立合					遺跡なし
	教養部 ＡＰ25区	174	浜崎　一志	立合					遺跡なし
	教養部 ＡＳ25区	175	浜崎　一志	立合					遺跡なし
	本部 ＡＷ30区	176	五十川伸矢	立合					遺跡なし
	病院 ＡＨ10区	177	五十川伸矢	立合			土師器,陶磁器		中世包含層
	病院 ＡＫ16区	178	浜崎　一志	立合					遺跡なし
	病院 ＡＪ13区	179	清水　芳裕	立合					遺跡なし

第Ⅱ部　京都大学埋蔵文化財研究センター紀要 Ⅶ

市坂の土器作り

難波洋三

市坂の土器作り

難波洋三

1　はじめに

近年，近世を対象とする考古学的調査が盛んになり，従来はほとんど注目されることがなかった近世の土器についての知見も急速で増している。これを分析する上で，残存する土器作りに関する情報は極めて有効であるが，特殊な性格が強い京都市左京区木野の例を除いて，ほとんどまとまった記録・報告がない。このような状況から，私は土器製作地での聞き取り調査の必要性を感じ，いくつかの製作地でこれを行なった。本稿では，そのうち，京都府相楽郡木津町市坂の土器作りを報告し，合せて，関係する問題についての考察を記す。

市坂で，炮烙[(1)]を中心とする土器が作られていたことを知ったのは，河井寛次郎の著書『陶技始末』昭和56年（1981）刊に所収されている一文によってであった。この文は，最初，「陶技始末（六）」として，昭和6年（1931）9月発行の『工藝』第九号に掲載されたものである。河井寛次郎が，東京高等工業学校を卒業し，京都市立陶磁器試験場に移ったのは，大正13年（1924）のことであるから，この間に市坂で土器作りを実見したのであろう。これは，私の所見に登った，市坂の土器作りに関する唯一の記録であり，後に述べる聞き取りと照合する上で，貴重な資料である。長くなるが，以下に，関係する部分を引用する。

「町をはなれて奈良街道は市坂の丘の聚落に這入るのである。其の村外れに土器や焙烙を作る一軒の農家がある。

後の谷へ僅かに支へて建つた此の小さい家の街道に沿ふた一間には僅かな手づくねの土器や焙烙が一杯埃を冠つて並んでゐる。

仔細に見ると棚の上には焼餅に模様を捺す素焼の型が重なつて嘆いて居る。胡麻炒（ごまいり）が寝轉んで退屈して居る。此の二三十にも足らぬ素焼物をたよりに細々と此家は煙を上げて居るのである。

入口の狭い土間にごみごみ置かれた農具や道具の中を眼を懐中電燈の様にして捜してやつと一臺の轆轤を見付出す。土に心棒を立てて其上に轆轤が乗つているだけなのである。

ごたごたの中から眼はもつと色々な物を捜し分けねばならない。焙烙の草臥れた土型が

図33　市坂の土器窯
(「陶技始末(六)」『工藝』第九号)

二三十枚重なり合つて居るのが出て來た。唐草を彫つた老衰した胡麻炒の土型が現れた。

「御免なさい。御免なさい。」

裏の入口から草鞋ばきの男の人がのつそり出て見へた。焙烙や胡麻炒の様によごれた中から顔が覗いて居るのである。

田甫の事で仕事は今休みなのである。

奈良の春日神社の土器や高坏(たかつき)は昔から此の家で作られるのだそうな。其の土器や高坏と云ふのは手揉の指跡だらけなものなのである。同じ手から體から同時に茄子や南瓜やこの土器が出るのである。土型の中に砂を振り土の「丸へご」を入れて布で押へ廻すのである。

型からはみでた土は針金を張つた竹の弓で切り捨て日に干して型ごとひつくり返せば角力取の御尻の様にふつくらした焙烙が出來るのである。

道を隔てた丘の藪の中に素燒窯がある。若竹に圍まれた三坪程な空地の片隅に小牛程にうづくまつて居る窯のふちは珍しく鞍の様に前後が出張つている。野天晒しなので雨降りには菰を冠せる爲かも知れぬ。

だまり込んで坐つて居る。中には「つく」を一本たて其上に傘骨の様に胡麻炒を渡して火床が出來て居る。これに山盛りに物をつめて雑木を焚くのである。(図33)」

2　聞き取り

1987年10月以来，8回にわたって，市坂の土器作りの子孫である大正14年（1925）生まれの浅田又彰氏，又彰氏の叔母にあたる大正8年（1919）生まれの福島よ志氏，又彰氏の叔父にあたる大正10年（1921）生まれの高原庄道氏から聞き取りをした。

浅田又彰氏宅は，京都府相楽郡木津町市坂幣羅坂48番地にある。河井寛次郎が訪れた当時の浅田家宅も，同じ所にあった。木津の中心から南約2㎞，市坂の南のはずれに位置し，家の西を通る旧奈良街道をたどって幣羅坂を上り奈良坂を下れば，約3㎞で奈良市の市街地に出る（図34)。

土器作りに関する3氏の記憶は，浅田又彰氏の曽祖父の岩吉と祖父の文治郎が土器を作っていたのを実見した記憶である。岩吉の存命中は岩吉がもっぱら土器を作った。昭和2

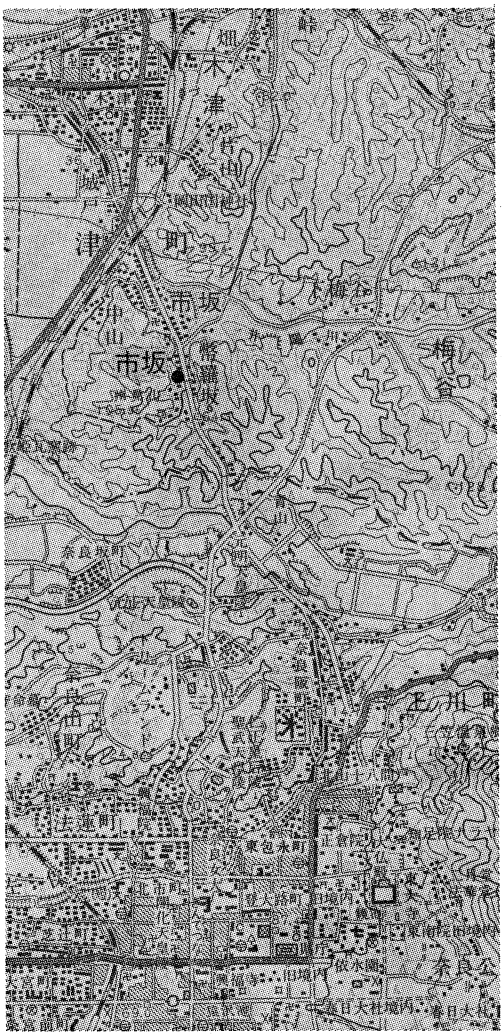


図34　市坂周辺地図　縮尺1/50,000

年（1927）に，岩吉が78歳で没した後は，文治郎が土器作りに従事した。文治郎は，昭和9年(1934)に60歳で没し，以後，春日大社に納める土器だけを1年間作ったが，その後廃業し，専業農家となって現在にいたっている。当時，浅田家は，水田6反，畑2反，藪7反と山を所有しており，他に水田2～3反を小作に任せていた。しかし，収入は，農業よりも土器作りのほうが上回っていたであろうという。

土器作りを廃業するにいたったのは，農業が忙しくなったうえ，鉄製の炒り鍋の普及等によって，ホウラクの需要が次第に落ちてきたことが原因のようである。廃業後もホウラクを求める人はかなりあったが，代りにホウラクの土型を与えたという。

土器作りをしていた当時の浅田家宅は，旧奈良街道の東側の現在と同じ地所内にあった。母屋はホンヤと呼ばれていた。ホンヤは，旧街道に平行な南北の棟を持ち，庇のみ瓦葺の藁屋根で，西にあった旧街道に面する玄関を入ると，裏口まで東西に土間がまっすぐに続き，その両側に部屋が並んでいた。

玄関を入って左手は，この地方でハタベヤあるいはハタヤと呼ばれる部屋であるが，浅田家ではここが土器を作る作業場に当てられていた。この部屋は，広さが6～8畳あり，西北の2畳分のみ床を貼って古い畳が敷いてあった。畳敷きの部分の中央にロクロが1台あり，ロクロの南に座布団を敷き，あぐらをかいて座り，北を向いて作業をした。河井寛次郎の記によると，ロクロの軸は土中に埋め込んであったらしいが，この点については3

氏の記憶が曖昧である。この部屋は，北の通路に南する側が開いている他は窓などがなく，薄暗かったという。また，この部屋の西壁には棚が造りつけてあり，土器作りの道具等が置いてあったようである。さらに，部屋の東の部分には，南北方向に据えられた唐臼があった。

土間の北側の，旧街道に面する部屋は，製品の販売のための2～3畳のミセノマで，床が張ってあったが，畳は敷いてなかった。北壁には，2～3段の棚が造りつけてあった。製品は，この棚と床の北の辺りに置いてあった。ミセノマの，旧街道に面した西側前面には，昼間は床を倒して出した。この部屋を善根宿とし，巡礼を泊めることもあったという。

ホンヤの南にはカド（庭）があり，土器の乾燥場などに使われた。カドに面して，旧街道ぞいに，瓦葺き土壁作りの，一棟になった牛小屋と土小屋が，南北に並んでいた。北の土小屋と南の牛小屋の間は，カドと旧街道を結ぶ狭い通路であった。また，ホンヤの北側には，東面する蔵があった。

旧街道を隔てて西側には，間口5間奥行3間ほどの2階建ての納屋があり，製茶に使う焙爐等を置いていた。その西に，近所の5軒で共同使用していた露天の井戸があり，さらにその西の薮のなかの，旧街道から10m余り隔たった斜面に，窯があった。今でも，付近は，カマタキヤマと呼ばれている。窯のあった地点は，畜舎を作るために，近年削平されてしまったが，窯は，現在の地表面よりも2mほど高い位置にあったようである。

伝えられたところによると，浅田氏の先祖は，奈良から当所に，土を求めて移住してきたという。浅田という姓を名乗り始めたのは明治以後のことであり，それ以前は，代々の当主が襲名していた又兵衛の名が屋号になっており，岩吉もやはり又兵衛と名乗っていた。職名は，ホウラクヤと呼ばれていた。

ホウラクは，近所の浅田昭二家や辻岡喜一郎家でも作ったことがあるらしいが，両家共に，3氏が物心のついたころには，すでに作っていなかった。両家のうち，浅田昭二家は，岩吉の異母兄による分家ということであり，ホウラクを作りはじめたのは明治以降と考えられる。

（土の採取と調整）

用いる粘土は，水分を含んでいるときはやや青みがかっており，乾くと白くなった。この粘土は，奈良街道の東の自家が所有する山麓の地所や，井戸と窯の間の崖面で採取した。土取り用の特殊な道具はなく，トウグワで掘り，箕を使って藁製の畚（ふご）に入れ，採取壙の横まで乗りつけたカタビキに乗せて，持って帰った。土取りは，1年の決った時期にするの

ではなく，心要に応じて行なった。掘り取って来た粘土は，土小屋に収納する。土小屋は，6～8畳ほどの広さであった。粘土は，寝かさずに使い，数箇所で掘り取ったものを混ぜて使ったりはしない。これを必要に応じて取り出し，カケヤで砕いて水を打ち，莚を掛けて放置し，軟らかくしておき，足で踏んで高さ70～80cmくらいに積み上げる。これを金鍬で厚さ約5mmに薄く削り，石などを除く。さらに足で踏んでは返す作業を何回か繰り返して仕上げる。これらの作業は，莚を敷いた上でする。水篩をしたり，篩にかけたりはしなかった。粘土を手で揉むこともなかった。粘土は，器種に関係なく，同質のものを使った。また，混和材として，砂などを加えることはなかった。

（製作）

土師質素焼きの，ホウラク・カワラケ（土器皿）・ハナモチのカタ（花餅の土型）・コンロのス（焜炉の灰落とし）などを作っていた。これらの製品の中で最も多く作っていたのはホウラクで，単価も高く，売上も多かった。これに次ぐのがカワラケであった。ゴマイリは，他の産地で作ったものを仕入れて転売していたが，作ってはいなかった。窯跡付近採集品にも，確実にゴマイリあるいはその土型と思われるものはない。土器は，年中作っていた。職人を雇ったことはない。

ホウラクを作るには，必要な量の粘土を取り，ダンゴを作ってロクロの円盤上に置き，ロクロを左手でゆっくりと回しながら，右手に持った叩き板で均一な厚さに叩き延す。岩吉は，叩きながら，ナムアミダ，ナムアミダ・・・・と唱えていたという。このようにしてできた粘土の薄板を，直径約10cm長さ約60cmの麺棒状の棒に巻き取って，土師質で浅い皿形のカタ（土型）の内側に移して貼る。これが底部になる。この時に，砂土などの離型材は使わなかったという。この内面に粘土板を貼った土型を，ロクロの円盤に置いた布製の輪の上に乗せて固定する。そして，左手でロクロを回しながら，土型の内面に貼った粘土板を撫でた後，土型からはみ出した部分を，両端に布あるいは皮の持ち手の付いた約20cmの針金で切り取る。次に，粘土紐を用意し，これを右手に持ち，ミミ（口縁部）を作り付ける。そして，ロクロを速く回しながら，鹿皮で内面と口縁部外面を撫でる。最後に，外面の，底部と口縁部の境の部分の余分な粘土を，ヘラで切り取って仕上げる。以上の作業は，ロクロの上に据えた土型から製品を外さないで行なう。できあがったホウラクは，土型のまま作業場で陰干した後，カドに出し，莚の上に並べて日向で乾燥する。ホウラクの土型は大小10種類ほどあったが，乾燥して土型から外れるのを待たずに次々と同大のホウラクを作るためには，同大の土型が複数必要である。浅田家には，かつては土型が50枚以

上あった。浅田家に残っていた土型のうち，直径65cm深さ9.5cmのものは，最大のものを作る際に用いたもので，直径34.5cm深さ3.5cmのもの(図42-2)は，内面に焼成後に「二」と彫ってあり，2番目に小さいものを作るのに用いたものという。ホウラクの大小は，イッショウ（一升）・ニショウ（二升）・・・・と呼び分けており，最大のものがジュッショウ（十升）であった。よく売れたのはヨンショウ（四升）・ゴショウ（五升）のもので，家族の多い家ではシチショウ（七升）・ハッショウ（八升）のものを買った。ホウラクは，成形が終り，まだ軟らかいうちに，製品の底部に，「一」から「十」までの大きさを表す印を押す。これに用いたという土印が1つ，浅田家に残っている（図40-2)。

ホウラクは，小麦粉を水で溶いて焼いてダンゴを作るのと，輪切りのサツマイモを焼くのに主に用いたが，餅を細かく切ったキリコやマメを炒ったり，番茶を作る際にも使った。

カワラケは，主に岩吉が作っていたが，文治郎の妻のまさも製作したらしい。福島氏によると，まさは，ミセノマの東の部屋の板敷の所で作っていたという。まず，丸めた粘土を左手で受け，右手で叩いて延し，手の凹みの形にする。さらに指で整形した後，濡らした鹿皮で内面と口縁部を撫でて仕上げる。できたものは，長さ1間・幅1尺くらいの長い板の上に並べておき，乾燥する。この板の裏には，板の短辺に平行する桟が2箇所に打ち付けてあった。

（焼成）

窯は，上部が開口した円筒形の本体の下部に，焚口が一つ開いた形態で，高原氏によると，直径が約2.5m，最大高が約1.5mであり，窯壁の厚さは約20～30cmであったらしい。[2] 窯の側壁はほぼ垂直で，窯の南側に，幅50cmで高さ60cmくらいの焚き口があった。これは，窯の本体からは突き出していなかったという。窯の内部は，地面から約30cm上に床があった。床は，下がやや太い中実な土製の円柱を中心に立て，これに放射状に幅を渡したもので，幅の隙間から火が上がってくる。[3] 焼成する製品は，この床の上に置く。3氏の知る範囲では，窯を作り代えたことはないという。窯は露天にあり，小屋掛けはしていなかった。窯壁は，河井寛次郎が記しているように，焚き口の上部とその反対側が高くなっていたが，これは雨を防ぐためにトタンを屋根形に掛けるための構造である。

窯詰めと窯出しは，上の開口部から行なった。製品は，窯の上縁より下までしか詰めない。高原氏によると，ホウラクは，まず中央に底部を上にして数枚重ねて積み，そのまわりに斜めに順次立てかけて，全体が山状になるように詰めたと言う。この際，ホウラクの間には，藁を挟んだらしい。そして，製品を詰めた上を，さらに藁で厚く覆う。[4] 焼成の日

は，朝から窯詰めを行ない，3時頃から焚き始める。燃料には，マツバ（葉の付いた松の枝）と松割木を用い，藁や雑木は使わない。最初はマツバをくべ，次第に割木を増やして火力を強める。また，焚き始めには焚き口近くで燃やすが，徐々に奥で燃やす。マツバは，刺又状の道具で奥へ入れる。8時頃には，火掻き棒（図36-2）を使って燠を掻き出し，これに水を掛け，焚き口に瓦を当てて塞ぐ。そして，翌朝，製品を取り出した。焼成は火加減が難しく，岩吉の存命中は岩吉がひとりでこれを行なった。

窯焚きなどに関する祭祠は，正月に窯に締縄を掛けて餅を供える程度であったらしい。また，特別な禁忌はなかったという。

燃料は，自家の持山から取って来た。燃料の松は，冬の間に切る。冬以外の季節に切った木にはヤニが多く，ムシが付くということである。[(5)] 切り倒した松はその場で枝を払い，枝は葉のついたまま藁縄で縛ってソク(束)にして，放置しておく。幹の部分は持ち帰り，鋸で適当な長さに切った後，割り木にして，旧街道の西にあった納屋の軒先に積んでおく。一方，山に残した葉の付いたままの松の枝の束は，2月から春先の菜種梅雨の前までに持ち帰り，天井裏に蓄える。

（販売）

製品の販売には，旧奈良街道を通る人あるいは地元の人への店頭販売，ホウラクウリによる振売，荒物屋への卸売の，3つの形態があった。

前述のように，店頭販売のために母屋の北の部分をミセノマとしてあり，作り付けの棚にホウラクを大きさ別に並べた。店番はおらず，客が来ると，玄関を挟んで南側の作業場で土器を作っている岩吉や文治郎が応対した。作業場の北東の柱の北側には，長さ約1mの，底を残して節を抜いた竹筒が掛けてあり，売上の銭貨を，上からこれに入れた。カワラケは，燈明皿や，神仏あるいは墓の供物の容器として用いた。年末と盆の前に需要が多かったという。

振売のホウラクウリは，近住の生駒丑松と駒奈良吉の2人がしていた。共に水田1～2反以下を作る程度の小農で，農業の合間に土器の振売をした。ホウラクウリは，浅田家から買い取ったホウラクを10～15枚とゴマイリ・カワラケ・コンロのス・ハナモチのカタなどを，竹で編んだ目の粗い浅い籠に入れ，オオコ（天秤棒）で前後に担って，杖をつき，山城町・加茂町・木津町・和束町・笠置町，奈良方面は平城村のあたりまで，行商にいった。商品を入れる籠は，ホウラクカゴと呼ばれており，直径約1m，深さ約25cmで，側部が内傾していた。19世紀前半に，大和のホウラクウリが用いた籠と大差ない（図53）。得

意先は決っており，これを中心に歩く。「ホウラク，ホウラクいらんかな。」という売声であったという。

卸売の品は，玉水・加茂・笠置などの荒物屋からの注文の手紙・葉書によって，カタビキで運んだ。

この他，春日大社に，年に1度，12月中旬の春日若宮おん祭の頃に，カワラケなどを納めた。各器種の納める数量については，あらかじめ手紙で注文が来た。特別な装束などはつけず，カタビキで運んだ。春日大社に納める土器には，他に高さ15cm皿部径8cmほどの高坏があったという。これらの土器についても，一般に販売する場合と同じように代金をもらっていたようである。

以上，3氏からの聞き取りを記した。前述のように，浅田家で土器を作っていたのは昭和10年（1935）頃までであり，廃業してからすでに50年以上経っている上に，当時，浅田氏は10歳，福島氏は17歳，高原氏は15歳にすぎなかった。よって，さらに細部にわたる質問を用意したが，すでに記した以上の聞き取りは難しかった。3氏の話の内容は，全体としてよく一致しているが，問題の残る部分もいくつかある。しかし，実際に作業を身近で見た人が，3氏を除いていなくなった今となっては，これらの点について，さらに情報を集めて検討することは，不可能となっている。残念である。

3　浅田家に残る関係資料

浅田家には，土器製作関係の資料として，記録・製作用具・製品が残っている。以下，これについて説明する。ただし，炮烙と炮烙土型については，窯跡付近採集品と一括して説明を加えることにする。

（記録）

浅田家には，1冊の冊子が残っている。これは，本来は愛宕講の記録帳として，寛政2年（1790）に作成されたものである。記事の内容は，前半と後半に分かれる。前半は，講の記録と，その余白に書かれた浅田家の由来や代々の当主の生年・没年齢などの記録からなる。後半は備忘録となっており，当初に備っていた白紙が尽きた後，5回にわたって紙が加えられている。備忘録の部分の最も古い記年のある記事は寛政9年（1797）のものであり，最も新しい記事は「紀元2594年」すなわち昭和9年（1934）に書かれている。最後の記録者は，その記年からみて，浅田氏の祖父の文治郎と考えられ，この記録がほぼ140年にわたって書き継がれたことがわかる。この前半の浅田家関係の記録は，後に加筆した

り，過去帳の写しを貼付したりして，代々の当主の生年や没年齢等の記録集とする意図がうかがえるが，一定の書式を踏襲して整備するには致っていない。そのうち，最も古く書かれたと考えられる部分のひとつは，初代が大和から移住してきた時の年齢及び初代からその曽孫までの生年・没年齢などを記した部分である。この部分では，初代の子と孫を又兵衛と記しているのに対して，曽孫は今又兵衛と記しており，今の字を付して同名の前2名と区別している。また，この曽孫の又兵衛の没年齢のみは，異なる筆跡で書かれており，後の加筆とできる。以上の2点から，この部分の記録者は，宝暦2年（1752）に生まれ，64歳（文化12年　1815）で没した，九兵衛の曽孫の又兵衛であったと考える。また，後半の書き始めが寛政9年（1797）頃であったことを考えれば，前半の余白部の記録のうち，この部分が，寛政9年（1797）頃から文化12年（1815）の間に書かれたことがわかる。

以上から，この冊子は，寛政2年（1790）に愛宕講の記録帳として作られ，寛政9年（1797）頃からは，宝暦2年（1752）生まれの当主の又兵衛が後半の白紙部を備忘録に転用し，その記載を続けているうちに家の由来などを書き留めておくことを思い立ったが，後半の備忘録の体裁を崩さないために，前半の講の部分の余白部にこれを記したという経緯がうかがえる。

宝暦2年（1752）生まれの又兵衛によって書かれたこの記録には，寛永12年（1635）生まれの彼の曽祖父九兵衛が47歳の時に，延宝5年（1677）生まれで当時4歳の祖父又兵衛を伴って，大和国九条村から当所に移住してきたとある。移住の年は，曽祖父の生年と移住時の年齢から計算すると延宝9年（1681），祖父のそれから計算すると延宝8年（1680）となり，1年のずれがある。ただし，延宝8年から寛政11年までの経年を記した箇所があることから，筆者は，移住の年を延宝8年（1680）と考えていたようである。多分，曽祖父の移住時の年齢等は，祖父の移住時の年齢と曽祖父の没年・没年齢等から，後に算定したのであろう。

後半の備忘録の大部分は，天災や社会状況に関する記録であり，残念ながら，土器の製作や販売などに関する記録は，ほとんどない。ただ，安政年間の部分に，「春日様燈籠書付，寛文九年壬酉八月十一日，和州添下郡西京九條村土器職仲間，子孫長久二世為安楽，忠兵へ，理貞女，九兵衛，甚九郎，与右衛門，善右衛門，仁助，善助，〆八人名前有」とある。この燈籠と考えられる九兵衛ほか数名の寄進銘のある銅製釣燈籠を，高原氏が実見している。ここにある寛文9年（1669）は，浅田氏の先祖の九兵衛が市坂村に移住してくる10年余り前に当り，書付に名前のある九兵衛は，移住者の九兵衛と同一人物であろう。

また，この一文によって，前記の九条村が添下郡西京九條村（現大和郡山市九条町）であり，浅田氏の先祖がその地の土器職仲間の一人であったことがわかる。この一文は，移住以前の大和国での消息を物語る唯一の資料として，きわめて重要である。

ここで，浅田氏の祖先の九兵衛が移住する以前に住んでいた，大和国の中世・近世の土器作りについて，主に文献資料によって概観してみよう。『多聞院日記』によれば，文明10年（1478）頃，土器作手12人が，後の奈良町内に住んでいた。[6] 一方，『大乗院寺社雑事記』には，「西京白土器」[7]，「西京瓦器座衆」[8]，「西京火鉢作」[9]，「ヒハチ西京」[10]とあり，15世紀後半頃，西ノ京にも土器作りが住んでいたと考えられる。しかし，両者の関係については，不明な点が多い。[11] 西の京の土器作りに関する，さらに年代の下る資料として，次のようなものがある。貝原益軒は，元禄9年（1696）刊の『大和廻』に，「風爐　今ハ西の京と云所に在　下手也」と記しており，『日本輿地通志　畿内部大和國』享保21年（1736）刊の添下郡の土産の項には，「塼爐　世ニ奈良風爐ト稱ス　土益（カハラケ）　俱ニ九條村出」とある。また，土風爐師として知られる京都の永楽家の本来の姓は西村であるが，これは奈良の西ノ京に住んでいた事に因んでおり，その初代，善五郎宗印（永禄元年1558没）は，春日大社で使う土器を作っていたという。[12] これらの資料から，現在の大和郡山市九条町を中心に西ノ京周辺では，中世から引続き近世以後も土器作りが盛んに行なわれていたことがわかる。浅田家の先祖九兵衛は，この西ノ京の土器作りの流れを汲むのであろう。

一方，奈良町内の土器作りに関する以後の資料には，次のようなものがある。村井古道の正徳3年（1713）の著と見られる『南都名産文集』に，春日大社の神供に用いる土器の坏手（ツクテ）があげられており，高坏形の土器の図が添えられている。[13] これらの土器の製作者について考える際に興味深いのは，江戸時代後期の『倭訓栞』では，坏手を作手と記し，「春日神供の土器の名にいへり　坏盤の義なるへし」としていることである。この坏手と作手の混同は，これらの土器が，春日大社の作手工匠によって作られていたことを示しているのであろう。[14] あるいは，坏手という名称自体が，作手に由来している可能性もある。ちなみに，村井古道著『奈良坊目拙解』享保20年（1735）刊によれば，奈良町内の北水門町に春日御供所の作手工匠の「作手（ツクデ）屋敷」があり，また，同書に転載されている元禄2年（1689）の『奈良町中民屋改帳』によれば，押上町にも「春日作手一軒」があったらしい。これらの作手に，土器作りが含まれている可能性もあろう。また，嘉永元年（1848）刊『嘉永増補改正大和國細見図』の「國中名産略記」には，奈良の産として「土器　春日神供ニ用ユ」とあり，明治7年（1874）刊の『大和國奈良細見図』の「奈良

名産略記」にも，土器があげられている。この頃まで，奈良町内で，作手工匠による土器作りが，行なわれていた可能性がある。

このほか，風爐も奈良の産として記されることが多い。しかし，前述の『日本輿地通志　畿内部大和國』等の記載から見て，奈良風爐とは，主に九條村など西ノ京周辺で作られた風爐を指していた可能性が高い。村井古道の享保12年（1727）の著『奈良名所記』[15]にも，奈良の名物としてあげた土風爐に「西京風爐ト云」と付記がある。ただし，18世紀中頃には，市坂の東約1㎞の梅谷で，上田宗品が，南都風爐師と称して，風爐を始めとする各種の茶道用の土器類を作っており[16]，奈良町周辺にも，このような土器類を作る者がいた可能性はある。

『日本輿地通志　畿内部大和國』によれば，大和国では，他に，城下郡八尾村（現磯城郡田原本町八尾）で土瓷が，高市郡雲梯村（現橿原市雲梯町）でホウロクが，それぞれ作られていた。さらに，明治14・15年（1881・1882）の調査に基づいて川井景一が編集した『大和國町村誌集』明治24年（1891）刊には，八尾の物産として砂鍋5千枚があげられている。八尾では，江戸時代から引続いてこの時期まで土器の製作が行なわれており，砂鍋すなわち炮烙も，少なくともこのころには作られていたことがわかる。大阪府枚方市津田での聞き取りによれば，1戸が1年間に生産する炮烙の数は，約2万枚であったという。また，『明治十年内國勸業博覧會出品解説』明治11年（1878）刊によれば，東京府浅草今戸（現東京都台東区今戸）の小宮幸次郎の1年間の炮烙の生産数は1万7千枚，三河国碧海郡下重原村（現愛知県刈谷市下重原町）の野村文四郎の1年間の炮烙の生産数は1万枚である。以上の例から，家内労働による小規模な生産者が，1年間に生産し得る炮烙の数は，1万枚から2万枚程度であったと考えられる。よって，八尾村での炮烙の生産数5千枚は，1年間に1戸で充分生産しうる数である。

（回転台）

ロクロは，円盤のみが残存する（図36-1）。ケヤキの板目材で作られており，直径約45㎝厚さ約7㎝である。明治初頭に京焼の製作に使われた手轆轤の円盤には，但馬産のケヤキ材が好んで使われた[17]。ケヤキ材が好まれたのは，耐久性がある上に，比重が大きく同大の円盤でもより大きな慣性力が産み出せるからであろう。

円盤の裏面中央には，小さな凹みがあり，この部分に軸の突端が接する（図36-1上）。上記の京焼の製作に用いられた手轆轤では，この部分に「釉薬陶」を埋め込み，軸棒との間に生じる摩擦抵抗を小さくする工夫をしている。また，大阪府枚方市津田と広島県東広

島市八本松で実見した，土器製作に使用されていたロクロ（図51-1•3）は，円盤がスギあるいはヒノキと思われる軟質の材で作られているため，この部分に硬質の木片が埋め込まれていた。本例には，そのような構造はない。

この凹みを中心として，一辺18cmの正方形を作る位置4カ所に，約2.0×1.8cmのほぼ同大の臍穴があり，そのうちの3カ所には，カシと思われる材が残っている。この臍穴に立てた4本の角柱によって，下部と円盤を連結する。角柱は，円盤に対してほぼ垂直に立てられており，それぞれ1辺が中心を向くように配されている。聞き取りでは確認できなかったが，下部は，1枚板か，2枚の板を十字に組んだもので，中心に軸を通す円孔があったのであろう（図51参照）。これに対し，京焼などの製作に用いられた手轆轤は，軸受けの部分が筒状であり，この部分の構造が異なる（図35）。

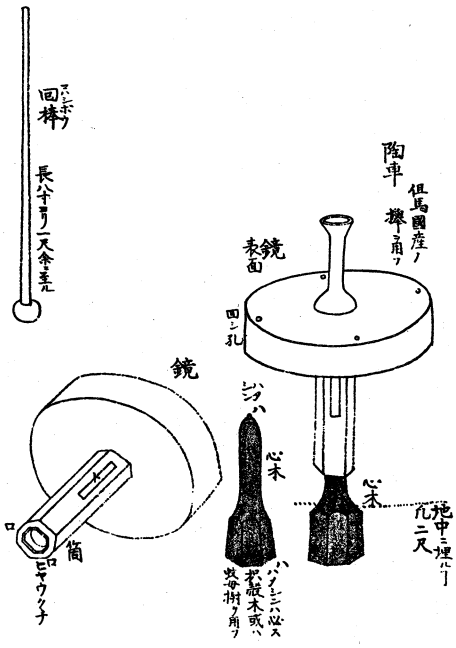


図35　京焼の手轆轤（『京都陶磁器説并図』）

また，円盤上面には，手轆轤に見られる周縁の回し孔がない。日本の手轆轤の場合，この孔に回し棒を差し込んで右手で時計回りの回転を与える。ところが，市坂で作られた製品の回転を利用した切り取りは，いずれも逆時計回りの回転を使って行なっており，撫でについても，やはり逆時計回りの回転を使って行なったものがあることが注目されよう。聞き取りによれば，このロクロは蹴轆轤でも回し棒を使う手轆轤でもなく，成形・調整に際しては，円盤を直接左手で回していたようである。この際，作業に応じて，ロクロを時計回りにも逆時計回りにも回すことが可能であるが，左手で円盤を手前に引いてロクロを逆時計回りに回すことが多かったようで，遺物の観察結果も，これと一致している。

江戸時代以降，市坂の例を含め，土器作りでは，ロクロの円運動を調整には使うが，挽き出し成形する作業にはほとんど使っていない。すなわち，これらはロクロと呼ばれているが，用法からはいずれも回転台とすべきものである。(18)

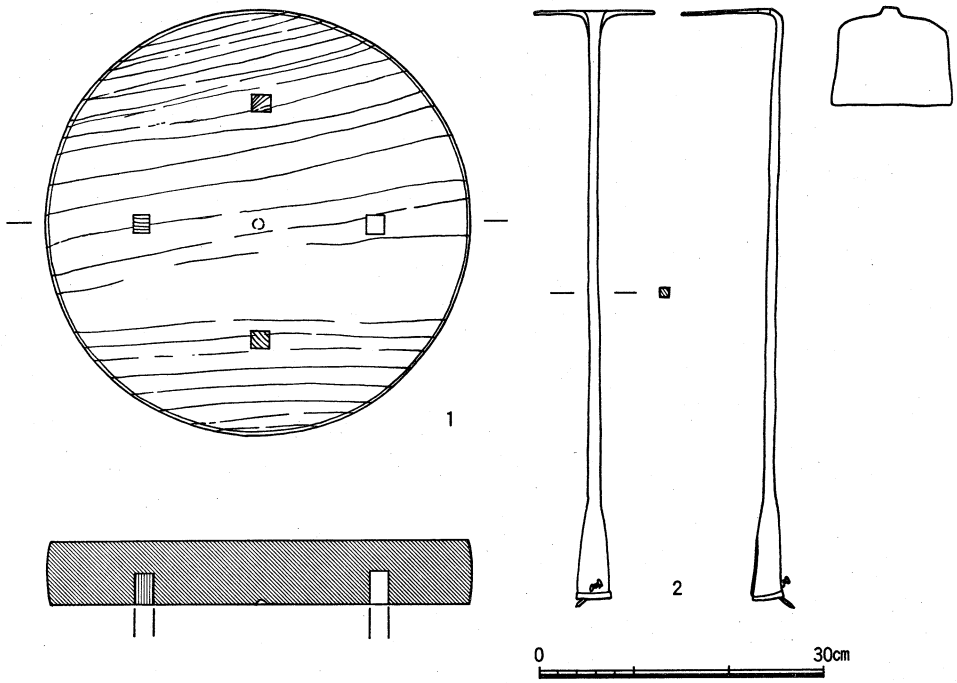


図36　回転台円盤，火掻き棒　縮尺1/8

（火掻き棒）

焼成の際に，煙や灰を掻き出すのに使う道具の，鉄製部分である(図36-2)。鍛造品で，鉄棒の一端に台形の鉄板が付いており，他端の袋部に木製の柄を差し込み，目釘で固定するようになっている。ソケットの中には，柄の一部が残っていた。本来は，柄を含めて全長が約1.5ｍあったという。燃料の松の枝などを押込むのに用いる，正徳２年（1712）序の寺島良安著『和漢三才図会』に火杈と記されている先端が二股になった刺又状の道具と共に使ったというが，これは残っていない。

（土型）

浅田家に残存する土型類は，花餅土型の原型33個，小塔土型１組２個，炮烙土型３枚で，いずれも土師質素焼である。

Ａ．花餅土型の原型

肩部と把手部からなり，大多数の例は，型面に陽出した紋章を飾る（図37～39)。焼成はいずれも良好で，１㎜弱の砂粒をわずかに含んでいる。この原型の型面に粘土をかぶせて，文様が凹となった土型を作る。残存する原型の型面には粘土の付着が顕著で，このよ

うな方法で土型を作ったことを示している。花餅は，湯を加えて練った米粉を土型に詰め，型抜きをした後，これを蒸して作り，色粉を塗って仕上げる。市坂では，8月20日頃に，大峰講のなごりの大峰山登山が，今でもおこなわれている。昔は，これに初めて参加する人の家へ，ルスミマイと称して，親戚が花餅を作って持って行った。

花餅土型の原型を，以下のように分類する。

A～E類は，型部の文様が手彫りである。

A類（図37-2～4, 図39-1）は，把手部を面取り状に削って仕上げており，この部分が長い。把手部の削りの各単位は型部へ向けて削るが，型部裏面側から見て時計回りに順次削り進んだことが，型部裏面に残る工具痕によってわかる。型部は厚く，裏面と側面を削って仕上げる。図37-2～4は，焼成前に，刃部断面三角形の彫刻刀状の工具で，銘を刻んでいる。銘を刻む際に彫り出された粘土は，ささくれを作っていない。この銘によって，図37-2は文政13年（1830）閏3月に，図37-3•4は天保6年（1835）3月16日に，源蔵という同じ細工人によって作られたことがわかる。型部の刻文は，図37-3が違い大根，図37-4が枝橘，図39-1が枝梅である。図37-2は衣に梅鉢を散らしているので，天神を表していると考えられる。

B類（図37-1）は，調整はA類とほぼ同じであるが，把手部が型部に近いほど細い点で異なる。型部は薄く，側面を削っていない。型部の刻文は，橘である。

C類（図37-5，図39-2）は，把手部が型部に近いほど太く，これを面取り状に削って仕上げる点で，A類と共通するが，短い点で異なる。型部はA類より薄く，側面は指撫でした後に裏面との稜を削り落としている。型部の刻文は，図37-5が三つ玉，図39-2が下がり散藤である。図39-2の把手部には，一角を把手端部に向けた三角形の墨書がある。

D類（図37-6•7, 図39-3～9）は，把手部に指押え痕が残るものである。型部の刻文は，図37-6が三つ葉南天，図37-7が揚羽蝶，図39-3が立ち葵，図39-4が桐，図39-5が十六菊，図39-6が鳥居笹，図39-7が高砂松，図39-8が桐車，図39-9が蔦である。揚羽蝶や蔦には，文様の略化がうかがえる。

E類（図37-8, 図39-10）は，特に肉高に文様を彫りだしており，把手部はきわめて短く，型部側が面をなさないものである。型部の刻文は，図37-8が揚羽蝶，図39-10が十六菊である。菊の弁間などの文様の凹部には，白雲母の細粉が残っている。E類は特に文様の彫りが深いので，土型を製作する際に，雲母を離型剤として用いることがあったのであろう。

以上のA～E類の型部文様が手彫りであるのに対し，F類（図38-1～4, 図39-11～19）と

G類（図38-5•6）の文様は型抜きされている。

F類（図38-1～4, 図39-11～19）は，作りが丁寧で，型部側は面を成し，把手部にはD類と同じく指押え痕が残る。この部分を型によって作った際に，離型材として用いた雲母が，型部表面に薄く付着して残っている例が多い。型部の文様の周囲は，図39-16を除き，型抜きの後，撫でて平滑に仕上げている。また，図39-15•16は，型抜きの後に，文様の一部を補刻している。型部の文様は，図38-1が枝橘，図38-2が八重山桜，図38-3が海老の丸，図39-11が二人の武者，図39-12が菊，図39-13が枝菊，図39-14が枝ぼたん，図39-15が唐草大割りぼたん，図39-16が菊と雲，図39-17が八つ菊，図39-18が雪，図38-4と図39-19が鯛である。F類にはすべて刻銘がある。図38-1と図39-19には「安政五午三月土吉」の銘がある。図38-4にも，これとほぼ同じ刻銘があるが，土吉の土の字が刻されておらず，焼成後に墨書してある。他には「土吉」の銘が，把手部を手前にした位置で刻されている。銘は，釘状の工具で，焼成前の粘土が柔らかいうちに刻されたため，文字のまわりに土がささくれ状に盛り上がっている。また，13個中10個には，「上」の墨書が残っている。墨書の多くは，型部と把手部の境付近に書かれており，図39-13のみはこれが2字書かれている。この例の2字の一方を除き，いずれも刻銘とは逆に，型部を下に把手部を上にして書かれている。型部文様の上下と墨書の位置には，対応関係がない。墨書の意味と目的は不明である。ただし，図38-4では製作者が土の字の墨書をしたと考えられ，かつこの土の字と上の字の書体が似ている事から，墨書は製作者の手になると考えられる。また，図38-4の把手部には，直径約1㎝の貫通孔が，焼成前にあけられている。

G類（図38-5•6）は，F類と同じく文様を型抜きで作るが，刻銘・墨書共になく，A～F類に比べきわめて粗い作りである。また，A～F類はいずれも把手の摩滅と粘土の付着が顕著であるのに対し，G類は，把手の摩滅や粘土の付着がない点でも特異である。作りが稚拙なため，あまり用いなかったのであろうか。型部の文様は，図38-5が葉付き菊，図38-6が鯛である。

以上の花餅土型の原型は，文様が手彫りのA～E類と，型作りのF・G類に大別できる。前述のように，A類には文政13年（1830）と天保6年（1835）の銘を持つ例が，F類には安政5年（1858）の銘を持つ例があり，全体として文様が手彫りの例は，型作りのものより古いと考えられる。また，A類を除く各類は，形態・色調・胎土・焼成等から見て，それぞれ，同時期に同じ工人が作り，同時に焼成したものであろう。

文様が手彫りのA～D類についてさらに検討すると，A・B類では，型部の文様を彫り

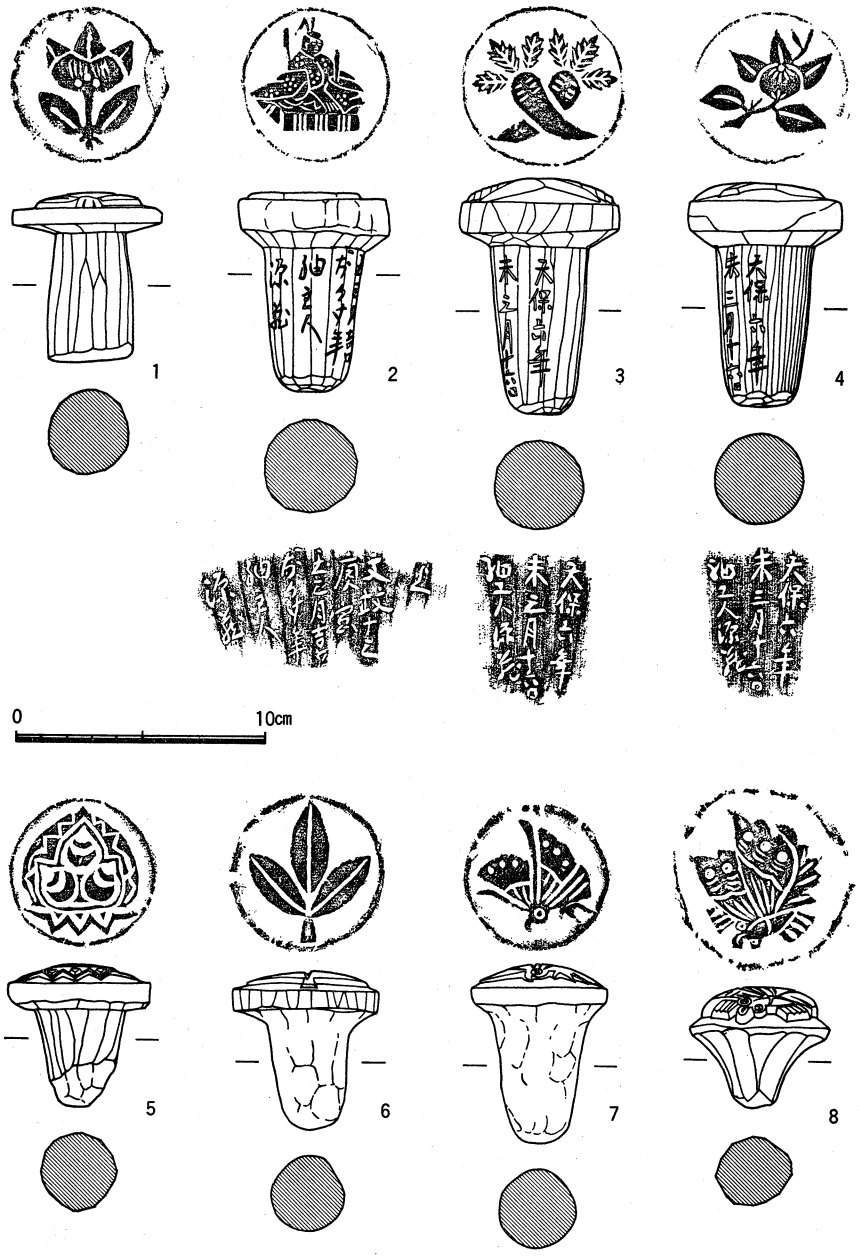


図37　花餅土型の原型 (1)　縮尺1/3

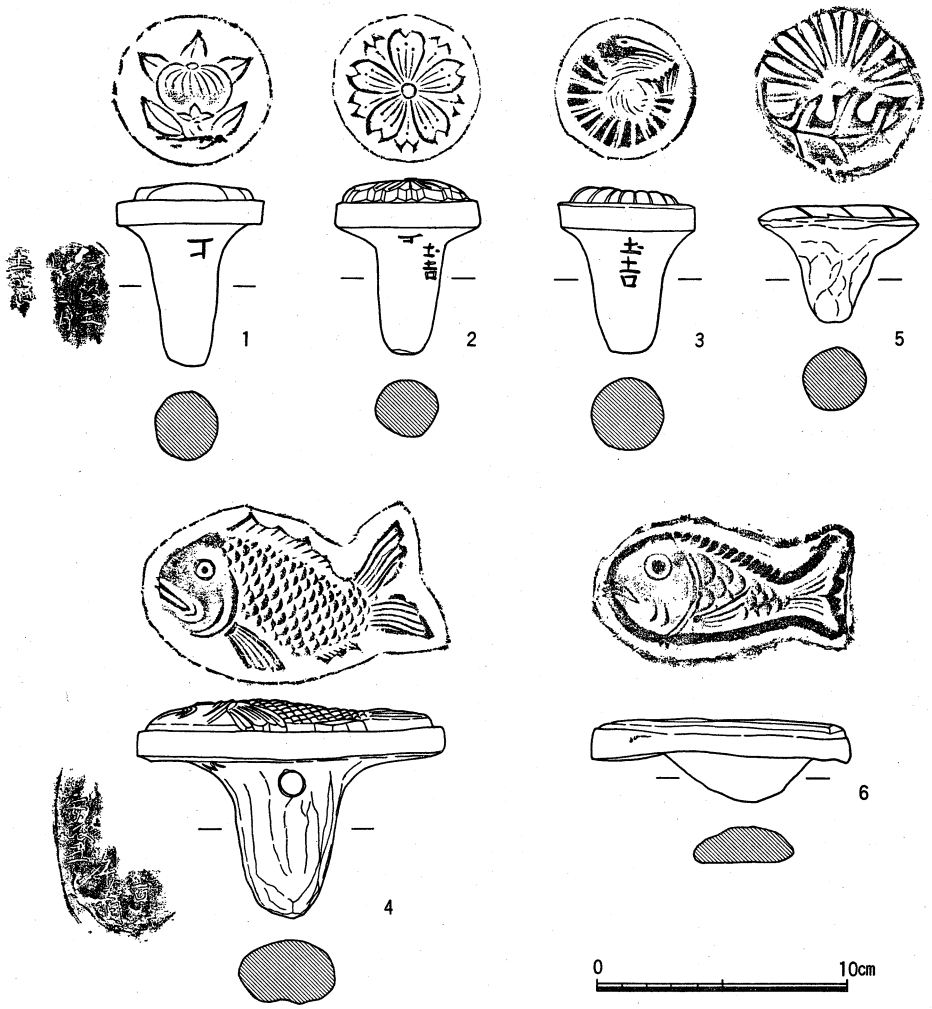


図38　花餅土型の原型 (2)　縮尺1/3

出す際に生じた砂の移動痕が丁寧に撫で消されているが，C類ではこの撫で消しがやや雑であり，D類では撫でが施されていない例が多い。また，把手部の削りの面取りは，A～C類にみられ，特にA・B類で顕著である。これに対し，D類は把手部を指押えで仕上げる特徴が，新出のF類と共通しており，A～C類に比べ，製作年代が下る可能性がある。以上から，これらが同系の製作者の手になるものとすれば，A・B類→C類→D類の型式変化が仮定できよう。E類は，把手がきわめて短い点，型部側が面をなさず稜を作る点，文様が肉高である点など，特異な特徴を持っており，位置付けが難しい。

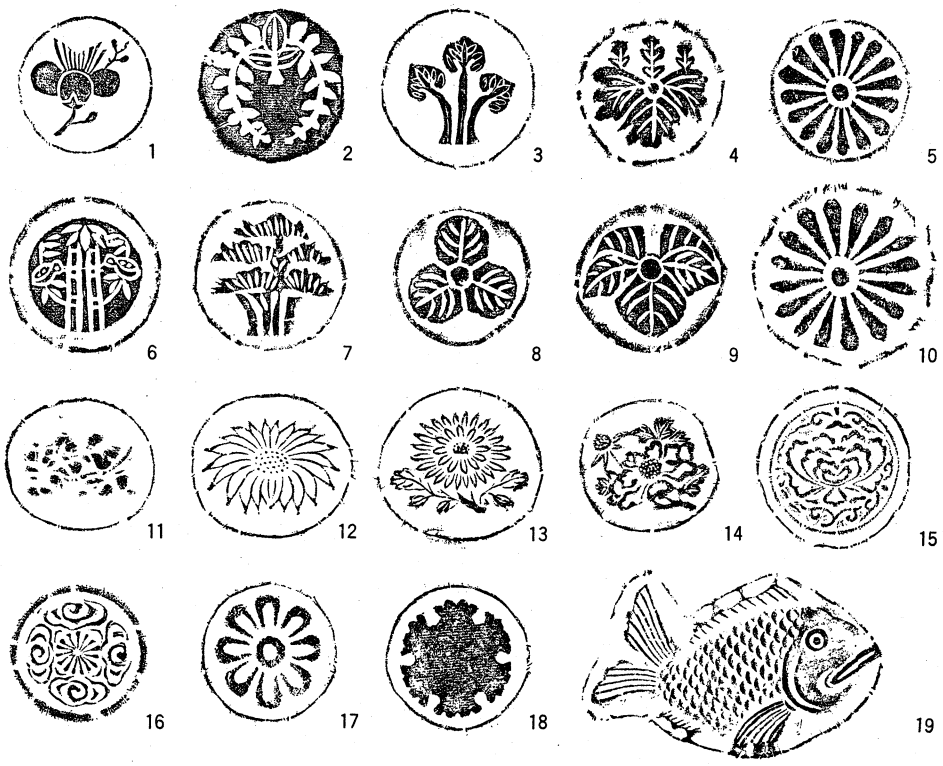


図39　花餅土型の原型 (3)　縮尺1/3

ところで前述の記録では，2・3・4代目と浅田又彰氏の曽祖父の岩吉を又兵衛と記してあるほか，元治2年（1865）の記載にも又兵衛の名が見え，代々の当主が又兵衛を襲名していたと推定できる。よって，「細工人源蔵」銘のあるA類と「土吉」銘のあるF類は，他の細工人に注文して作らせた可能性が高い。これに対し，G類は，作りが稚拙で，後述する小塔土型や皿形土製品の把手と形状や調整法が共通しており，市坂の土器作りの手になるものと推定できる。

B．小塔土型

平安時代後半の泥塔に似た小塔の，縦に2分割した土型が1組ある。片面の塔身には梵字が彫られているが（図40-1），他面にはこれがない。土型の製作法は，次のように復元できる。まず原型を用意し，これに粘土を8㎜前後の均一な厚さにかぶせ，よくおさえ，向い合う部位に把手を付けた後，縦に2分割し，原型をはずす。さらに，片面の塔身部分

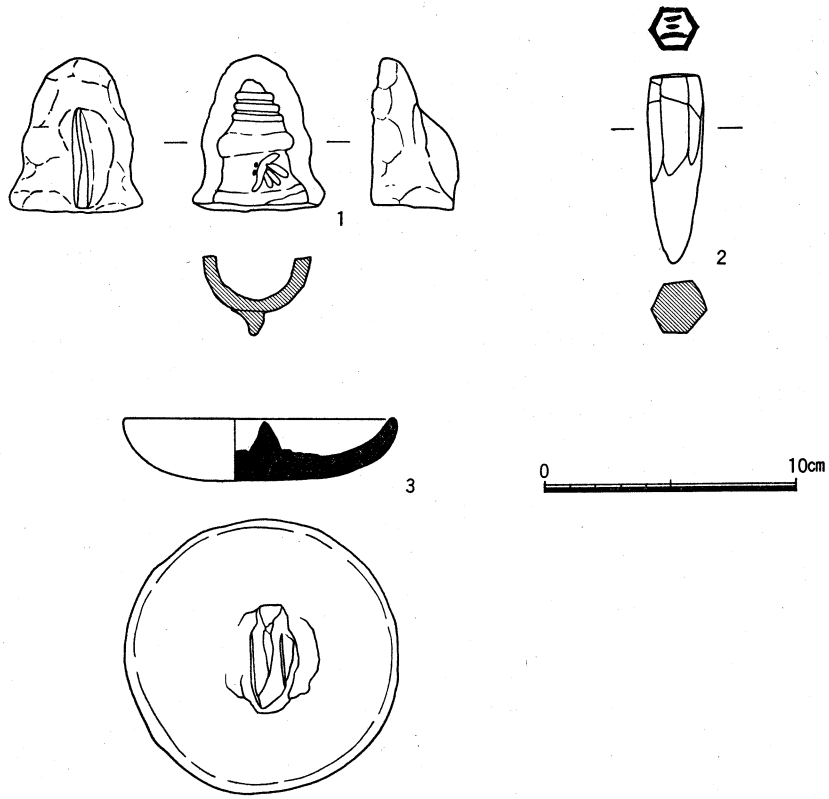


図40　小塔土型，土印ほか　縮尺1/3

に梵字を彫り，両面の相輪部などを撫でて整形する。色調は淡褐色，焼成は良好で，胎土には赤褐色の土粒と1㎜弱の砂粒を含む。これらの特徴及び把手の形状は，花餅土型の原型のG類と一致している。色調等からも，当地で作ったものと考えられる。

（土印）

1点残っている（図40-2)。粘土の棒の上半を面取り状に削って，六角形の印面を作り出している。印面は平面を作った後，縁と「三」の字を彫り残して陽出させている。前述のように，炮烙の底部にその大きさを示すためにこれを押捺したという。しかし，窯跡付近採集品には，今のところ，このような印を押した例はない。

（皿形土製品）

図40-3は，皿の内面中央につまみを張り付けた形状の土製品である。内面には布の圧痕が，外面には指押え痕が，全面に残っている。つまみの形状は，前述の花餅土型の原型の

G類や，小塔土型と類似するが，粘土を張り付けた後，篦状の工具で両側を押えている点で異なる。凸面には，使用痕と考えられる摩滅が見られるが，用途や用法については不明である。

4　窯跡付近採集品

窯跡付近で採集した製品や土型は，焼成は良好で，色調は淡黄白色か淡黄褐色のものが多いが，表面のみ黒色になった例もある。いずれも，胎土にはわずかに砂粒を含んでいる。シルト質の粘土を使った例もある。水簸土は使っていない。器種によって，土を使い分けることはない。ただ，後述するように，皿の一部に限って，暗赤色に発色する土を使っている。

（炮烙・土釜）

図41-1～7•9•11～17は，浅い皿形の底部と，直立あるいは外反する口縁部を持つ。窯跡付近採集品の復元口径は，約25cmから50cmであるが，浅田家に残存する製品（図41-9)は，口径15cmと小型である。口縁部は厚いが，底部中央付近は2～3mmと薄い。

底部は外型作りで，底部外面は型からはずしたままの粗面である。底部外面に，細砂の付着が目立つ例がある。この砂は，粘土を叩き延す時に，粘土の付着を防ぐ離れ砂として作業台に撒いた砂か，粘土板を外型の内面に貼る時に，離形材として型に撒いた砂であるが，両者を識別することは難しい。砂以外に，雲母の粉末，籾殻，籾殻の灰や竈に溜まった灰を篩ったもの等を同じ目的に使用する製作地もある。砂粒の目立たない例は，焼成後に痕が残りにくい灰などを使ったのかもしれない。

口縁部内外面と底部内面は，撫でて仕上げている。まず，口縁部内外面を回転撫でで調整した後，底部内面から口縁部内面を，回転台を回してもう一度撫でて仕上げたようである。口縁部は，底部を型からはずさず回転台に据えたままの状態で付ける。この際，型の外縁よりやや内側に口縁部を作りつけるので，口縁部と底部の境の外面には，余った粘土が甲張り状に残る。この部分の仕上げ法によって，2種に大別できる。1種は，この部分に粘土を足して鍔を作ったもの（図41-1・3～7）で，もう1種は，余った粘土を切り取ったもの（図41-9•11～17）である。前者は，祖型の土釜の鍔をルジメントとして残していると考えられ，後者よりも型式的に先行する。鍔を残す型式には，口縁部高が高く，口縁部が垂直に立上がり，先端が外反する型式（図41-1～4）と，口縁部高が低く，口縁部が外傾する型式（図41-5•6）がある。鍔の部分を削る型式には，口縁下部が外傾し，口縁

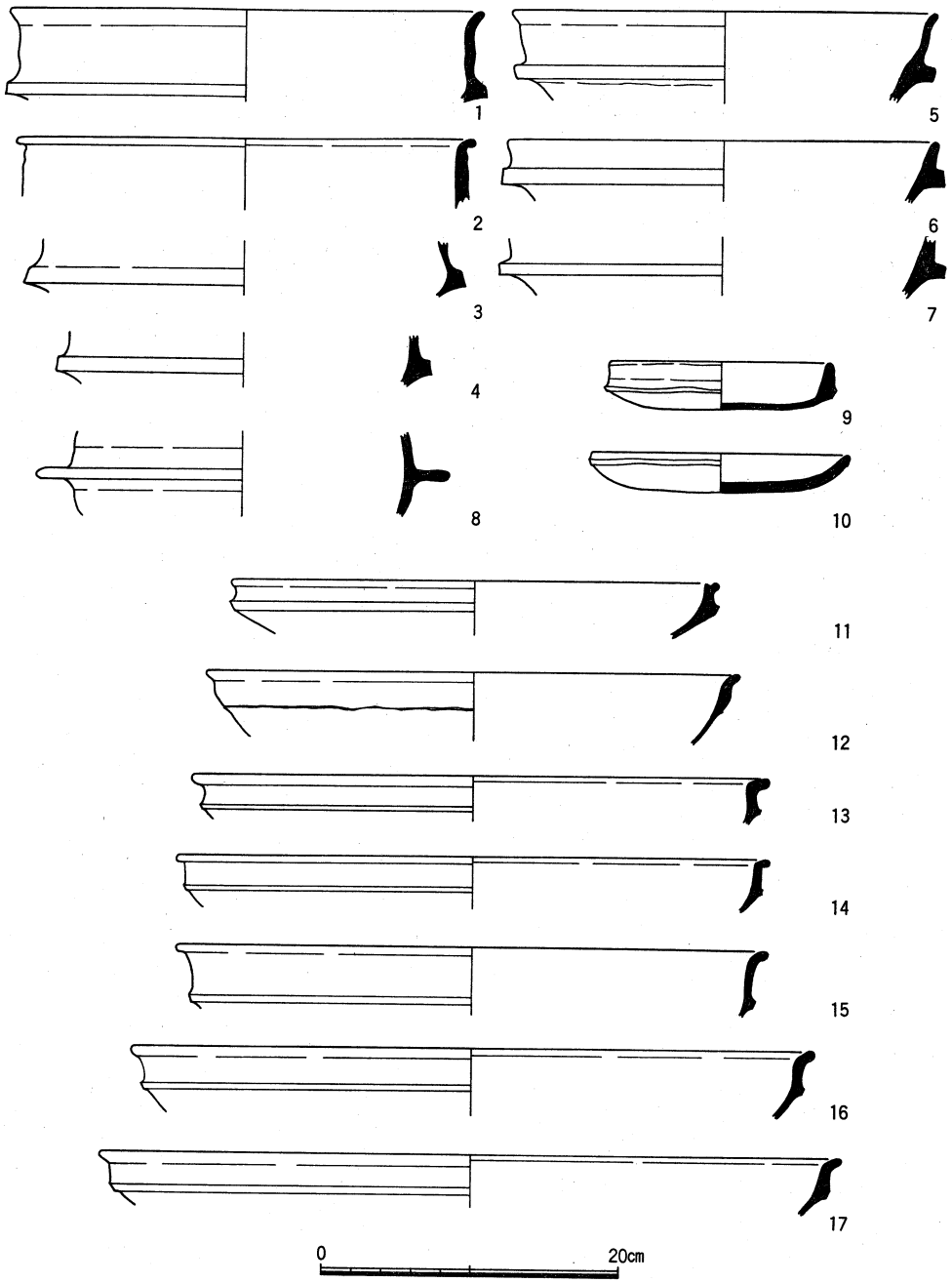


図41　土釜・炮烙，炮烙土型　縮尺1/5

端部がさらに外傾外反する例（図41-15•16）から，口縁下部が垂直に立上がり，口縁端部が外へ強く屈曲する例（図41-11•13•14）まである。ただし，中間的な特徴を持つ例も多く，明確に両者に分けることは難しい。また，鍔を有する型式の多くは，色調が淡黄白色かわずかに赤味を帯びた淡黄白色で，胎土のきめが細かい。これに対して，鍔の部分を削る型式には，黄色あるいは褐色のやや強い例が目立ち，胎土はわずかに粗い。

ところで，口縁部と底部の境の整形を型からはずす前に行なっていることは，鍔を有する例については次の事実から明らかである。すなわち，鍔の上面と側面には撫で痕あるいは指押え痕があるが，鍔の底面には型痕が残っており，鍔の底面と側面のなす稜が鋭い。また，鍔の部分を切り取って仕上げる例についても，この部位の整形を型からはずさずに行なっていることが，浅田家に伝わる土型に残る痕跡から推定できる。すなわち，図41-10の土型の内面に，幅約1㎜の粘土が直径約15.5㎝の円圏を成して付着していることが確認できたが，これは，図41-9とほぼ同大の炮烙の口縁部と底部の境の粘土を切り取る際に，へらの先端が土型に粘土を強く圧着させた結果，生じたものと考える。また，砂粒の動きから判断して，粘土の切り取りは，いずれも回転台を逆時計回りに回転させながら行なったと推定できる。

図41-8は，鍔とその上下の身の部分の破片である。内外面共にヨコナデで仕上げられており，底面に型痕は見られない。胎土・焼成は炮烙と同じである。鍔は水平につけられており，先端近くがやや肥大し，端部は丸い。鍔を身に付けるに際し，身の接合部に櫛状の工具で左上りの刻みを入れていたようで，その一部が，破面にわずかに見えている。16～17世紀前半に奈良周辺で作られた土釜に似るが，やや厚手で鍔が大きい点，鍔の接合部に刻みを入れる点や内面の調整が異なる。

（炮烙土型）

多くは，丸底の皿形である（図41-10，図42-2）。底部は，5～8㎜と比較的薄い。圏足を持つ例（図42-8•9）は，別の器種の製作に使う土型かもしれない。小型の例（図41-10）を除き，内面と口縁部外面は回転撫でで仕上げられている。特に内面は丁寧に仕上げられており，平滑である。口縁部付近の内外面に，粘土が付着して残っている例が多い。表採品の口径は，約30～50㎝であるが，浅田家には口径17.5～18.0㎝（図41-10），34.5㎝（図42-2），67.5㎝の3個体が伝えられていた。これらの炮烙の土型は，製作したい土型よりもひとまわり大きい土型を使い，炮烙を作る時と同じ要領で作ったようである。

炮烙の土型を，次のように大別する。A類（図42-5）は，口縁部外面下端を，型から外

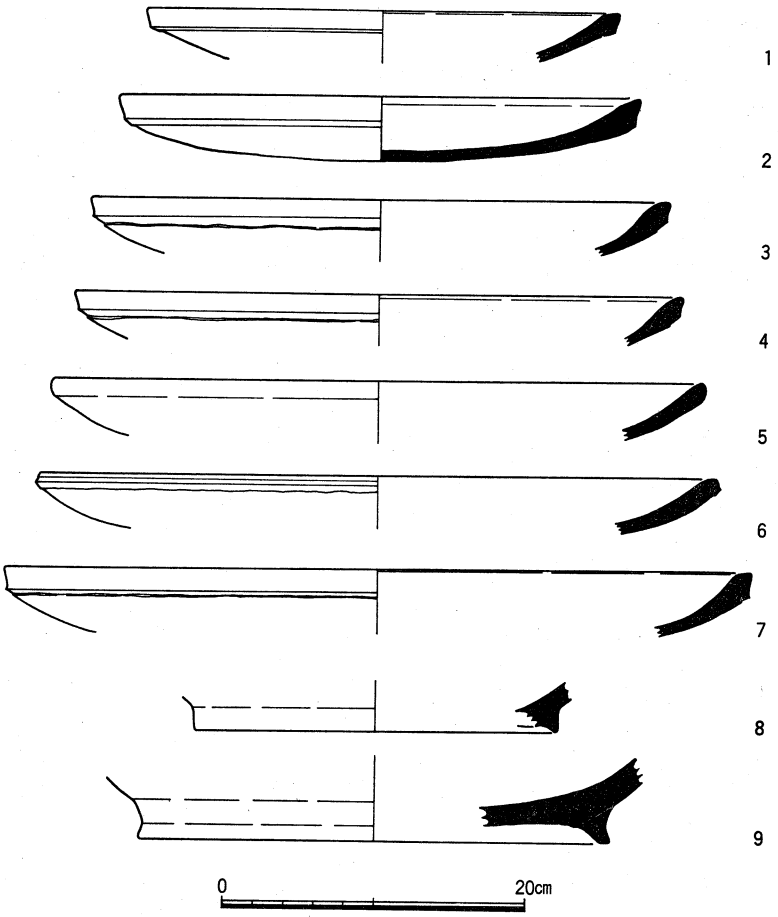


図42　炮烙土型　縮尺1/5

したまま切り取らない型式で，この突出部と底部外面の作る凹部に，粘土を足して補強した例が多い。口縁部外面が凸面を成し，その上下幅は狭い。口縁部内面は明瞭な面をなさない。B類（図41-10，図42-1～4•6•7）は，口縁部外面から底部外面へと移行する部位を切り取って仕上げる型式である。口縁部外面が凹面を成し，その上下幅が広い例が多い。口縁部内面は，比較的明瞭な面を成す。ただし，B類の中でも，切り取りの幅の狭い例（図41-10，図42-6）には，口縁部内面が明瞭な面をなさない例が多く，その中には，口縁部外面の上下幅の狭い例もある。

（皿）

復元口径約6㎝から12㎝であるが，6・9・12㎝前後の例が多い（図43）。丸底の例と，

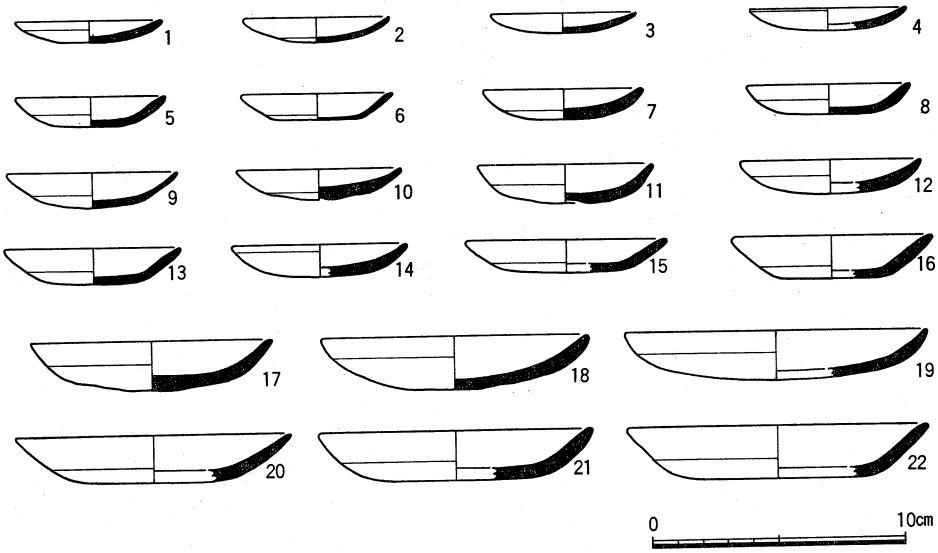


図43　皿　縮尺1/3

平底に近い例がある。口縁端部は，面をなさない。底部外面には指圧痕が残り，凹凸が著しい。底部外面中央が凹んだ例もある（図43-10•11)。内面及び口縁部外面は，撫でて仕上げている。内面の撫では，時計回りに施し，最後に外へ逃げる。少しずつ止めながら撫でを施すため，口縁部内面に，撫での停止部が，中心を向いた線となって，何箇所かに残っている例がかなりある。色調は，他の器種と同様の淡黄褐色を呈する例が多く，表面のみ黒褐色になったものも少数ある。黒褐色の皿は，消費地では見られないので，欠陥品として廃棄されたのであろう。このほか，口径7㎝前後の皿には，他の器種には見られない暗赤色を呈する例が少数あり（図43-8•14)，これらは，意図的に赤色に仕上がるように配慮されていたようである。すでに述べたように，当地で作られた土器皿のうち，かなりの数が春日大社に納められていた。ところで，木村蒹葭堂著『蒹葭堂雑録』安政3年（1856)序には，春日大社の祭式に使う土器として，「赤キ土ニテ製ス」クワイ（高坏）と「白土」製のヲツボコ・御箸盤（おはしのせ）が図示されており，江戸時代末の春日大社の祭式に赤色の土器と白色の土器を区別して使用することがあったことがわかる。器種は異なるが，皿についても，赤色系と白色系のものが，共に祭式で必要とされていたのであろう。このような要求に応じて，赤色の皿が作られたと思われる。この区別は，『大乗院寺社雑事記』等に見られる，室町時代の赤カワラケと白カワラケの使い分けまで遡るのであろう。

（壺類）

図45-1•2は，消し壺の口縁部と考えられる。図45-1は，口縁部端が尖っており，肩に丸みがあるが，図45-2は，口縁部端が丸く，肩が直線的である。共に，最大径部位が上位にある身に，短い口縁部が付く型式であろう。図45-3•4は，口径18cm前後の口縁部である。わずかに外側へ直線的に開き，明瞭な端面を持つ。壺あるいは小型の鉢の口縁部と思われる。図45-5は，壺あるいは甕の口縁部であろう。表面のみ黒色を呈し，断面は黄褐色である。小片のため，口径の復元は難しいが，かなり大型のものと思われる。図45-6•7は，壺類の底部と思われる。内面には粘土帯を積み上げた際の指圧痕が目立つが，外面は比較的丁寧な撫でで仕上げられている。図45-7は，底部下端を切り取って仕上げているが，切り取りは回転台を逆時計回りに回しながら行なっている。図45-6は，この部分を回転撫でで仕上げている。

（製墨用油煙受皿）

製墨用油煙受皿の破片が，4点ある(図45-8•9)。煤の付着等の使用痕はなく，当地で作られたのであろう。図45-8は，平底の皿の底部外面に，把手を付けた形態である。内面はきわめて平滑で，雲母がわずかに付着して残っている。図45-9は，これと同器種の口縁部の破片であろう。口径はほぼ等しいが，断面形態がやや異なる。やはり，外面には，回転撫で痕が残る。内面がきわめて平滑に仕上げられており，雲母が内面全体に薄く付着して残っている。同様の製墨用油煙受皿と考えられるものは，奈良女子大学構内遺跡（平城京左京二条六坊五坪），大阪府柏原市玉手山遺跡[19]で出土している。

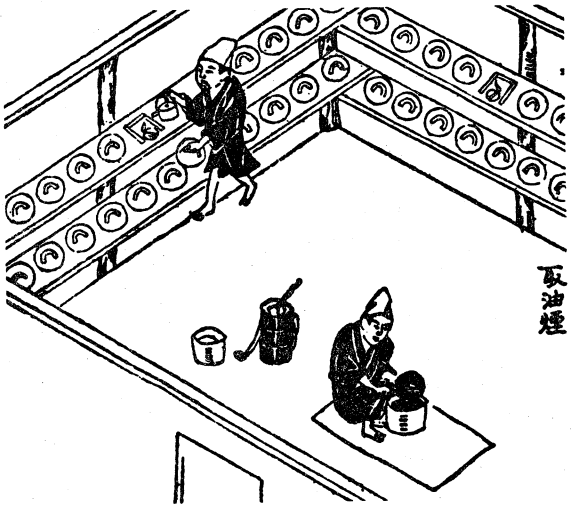


図44　製墨用油煙の採取（『古梅園墨談畧抄』）

墨煙には，油煙と松煙があるが，両者は採煙法が異なる。松井元泰著『古梅園墨談畧抄』正徳3年（1713）刊や三宅也来著『萬金産業袋』享保17年（1732）刊によると，松煙は，紙を張って室を作り，その中で松根を燃やし，紙に付着した煤を採取するが，油煙は，

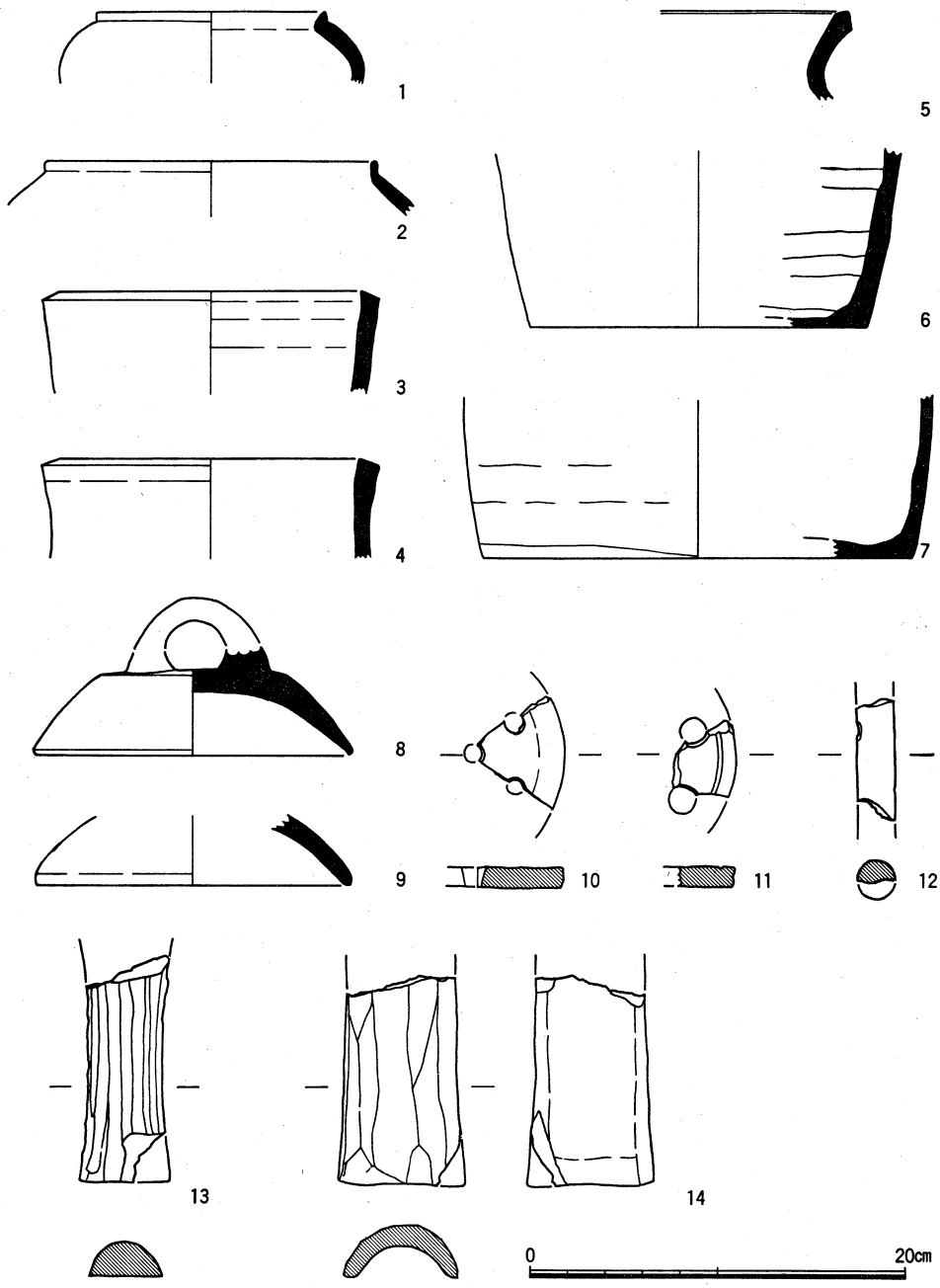


図45　壺類，製墨用油煙受皿ほか　縮尺1/4

燈明の上に受皿を置いて，これの内面に付着した煤を採取する。『古梅園墨談畧抄』所載の油煙採取の図（図44）には，図45-8と同様の把手を有する油煙受皿が描かれており，18世紀初には，すでに同様の型式の油煙受皿が使われていたことがわかり，興味深い[20]。同型式のものは，今でも，奈良市で製墨に使われている[21]。奈良を中心とする，これらの製墨業者の必要に応じて，このような製品も作っていたのであろう。

（焜炉の灰落とし）

コンロのスである（図45-10•11）。片面は粗面のままであり，この面を下面として回転台の上で成形したと考えられる。側面と上面の周縁には回転撫で痕が残り，側面と下面が作る稜の部分は削ってある。孔は，回転台の円盤からはずした後に，上面から下面へと穿っている。

（その他）

ほかに，器種・用途が不明な破片を採集しており，そのうちのいくつかについて説明する。図45-14は，端部がやや広がる樋状の破片で，凸面は削り，凹面は比較的丁寧な撫でで仕上げている。凸面の右半では上へ，左半では下へ削っており，半分を削った後，上下を逆に持ち替えて残る半分を削ったと推定できる。凹面の撫では，端部付近では長軸に直角方向に，他の部分では長軸方向に施している。粘土が付着しており，土型と考えられる。図45-13は，図45-14の内側にうまく納まる。全面削りで仕上げられているが，凸面の削りは，図45-14と同じく，図の右半では上へ，左半では下へ削っている。図45-13は十能の把手部，図45-14はその型の可能性がある。図45-12は，棒状の土製品で，長軸方向に丁寧に撫でて仕上げられている。

5　市坂の土器作りを巡る２・３の問題

以上，市坂の土器作りについて説明を加えた。次に，市坂の土器作りをめぐるいくつかの問題について検討してみたい。

（近世奈良の土釜・炮烙）

まず，奈良女子大学構内出土資料を中心に，奈良町周辺出土の，近世の土釜・炮烙の編年について考える。

17世紀後半以降に作られた炮烙・土釜のほとんどは，外型を用いて底部を作り，回転撫でで仕上げている。これを，鍔を有し，鍔から上が身と口縁部に分れ，身は内曲，口縁部は外反するため，内面の両部分の境に明瞭な稜があるＡ類（図46-3～8，図49-1•2），鍔を

有し，鍔から上が全体に緩やかに内曲するB類（図46-9～14，図49-3），鍔を有し，鍔から上が身と口縁部に明確に分かれず，この部分全体が外反し，内面に明瞭な稜がないC類（図47-1～10，図49-4～9），口縁部が外反直立か外反外傾し，C類の鍔の部位を切り取って仕上げたD類（図47-11～14），鍔がなく，直立あるいはやや外反する短い口縁部を持ち，口径が16cm前後と小型のE類（図48-1～6），底部上端よりやや上に，断面三角形の貼り付け突帯を巡らせるF類（図48-7～9），鍔がなく，口縁部が内曲内傾あるいは直立するG類（図48-10～13）に大別する。

また，これらの土釜・炮烙の胎土・色調を，以下の2種に大別する。色調が淡黄白色あるいは淡黄褐色を呈し，砂粒をあまり含まずきめが細かいといった，市坂採集品と共通する特徴の胎土を胎土aとする。そして，市坂採集品には見られない胎土を，胎土bとする。市坂の北約2kmの京都府相楽郡木津町木津遺跡から出土した底部外型作りの炮烙・土釜類の約半数が胎土aであるのに対し，市坂の南約3.5kmの奈良女子大学構内奈良奉行所北濠跡から出土した例の多くは，胎土bである。胎土bの例の大多数は，器表が灰褐色で断面に白色と赤茶色の縞が顕著に見えるものか，器表・断面共に赤橙色を呈するものである。縞状のものに比べて赤橙色を呈するものには，金雲母を特に多く含む例が多く，砂粒や小礫が目立つ等の差異はあるが，両者の中間的な特徴を持つ胎土の例もかなりあり，型式との対応からも，前者から後者へ，漸移的に移行したと思われる。後述するように，これらの胎土を有する製品とほぼ同じ型式の製品が市坂でも作られていること，そして前述のように，市坂の土器作りが奈良の西ノ京九條村からの移住者によって始められたこと，この時期の文献資料に西ノ京周辺の土器作りが見えること，さらに磯城郡田原本町里中遺跡出土例との後述する差異を考え合せると，胎土bの土器の多くは奈良盆地北部，中でも西ノ京周辺で作られた可能性が高い。

以下，型式ごとに説明を加える。

A類（図46-3～8，図49-1•2）には，内面にこげ状の炭化物が厚く付着する例が多い。主に煮炊きに用いたのであろう。口径は，約18～29cmであるが，24cm前後の例が多い。鍔下面から口縁部上端までの高さは，7cm前後の例が多いが，5cm未満の例もある。

A類の祖型は，稲垣晋也氏がF型式とした土釜[22]である。慶長8年から9年（1603～1604）頃に掘削された[23]奈良女子大学構内奈良奉行所北濠跡からは，この「F型式土釜」（図46-1•2）とA類が多数出土している。両者は，形態は似ているが，製作法が大きく異なる。第1に，A類は，外型を用いて底部を成形しており，底部外面に型痕の粗面が残る。また，

外型の口縁上面を利用して鍔を作ったため，鍔の下面にも型痕の粗面が残っており，鍔の側面と上面の作る稜が丸いのに対し，側面と下面の作る稜は突出している。これに対し，「F型式土釜」は，成形に外型を使っておらず，鍔は，粘土紐を張り付けた後，上下を指で挟んで撫でて仕上げている。第2に，A類は，型痕の残る底部外面と鍔の下面を除き，回転撫でで仕上げているが，「F型式土釜」は，調整に回転台や轆轤を使っておらず，外面と口縁部内面には撫で痕が，身の内面には刷毛目が残っている。このほか，「F型式土釜」では口縁端部が面を成し，その上端が内側上方へ突出するが，A類では明瞭な面をなさない，A類では口縁部と鍔の間の内曲内傾が弱い等の差異が指摘できる。

B類（図46-9～14，図49-3）は，内面全体に炭化物が薄く付着した例が多い。主に炒熬に使ったのであろう。口径は，約22～29cmであるが，26～28cmの例が多く，全体としてA類より口径が大きい。胎土aと胎土bの例がある。

鍔の側面と下面の作る稜が外へ突出する例が多い点と，胎土bの例についてみると，器表の色調が灰褐色で，赤橙色を呈する例はほぼない点で，B類はA類と共通しており，両型式は，同じ製作地で同じ頃に作られたと考えられる。B類には，鍔下面から口縁部上端までの高さがほぼ4～5cmの例（図46-9～13，図49-3）と3cm前後の例（図46-14）がある。ただし，後者は少ない。前者にはA類と同じく鍔の下面を削る例がないが，後者にはC類と同じくこの部分を削る例（図46-14）があり，前者よりも後出の可能性がある。

B類は，大和には祖型がない。和泉・河内・摂津・山城に存在した口縁部がほぼ直立する土釜のいずれかを祖型とすると考えられる。このB類が，A類の出現と同時期に大和で作られるようになったとできるなら，大和へ，底部外型作り回転調整による土器作りが伝播するに際しての，工人の動向を考える上で，重要な手懸りとなる。

他の遺物と共に土壙等から出土した例から考えて，C類（図47-1～10，図49-4～9）はA・B類よりも後出と考えられる。胎土aと胎土bの例がある。胎土bのC類は，口径27～31cmの大型（図47-1～4）と口径20cm前後の小型（図47-5～7）に明瞭に分かれる。胎土aの例についてはまだ資料数が少なく，この点は不明である。大型品には，内面全体に炭化物がごく薄く付着した例が多く，主に炒熬に使ったようであるが，小型品には，内面中心の狭い範囲にこげが厚く付着した例が多く，主に煮炊きに用いたようである。C類の，鍔底面から口縁部上端までの高さは3～5cmで，明瞭な群に分かれないが，全体として，口径が大きいほど口縁部高が大きい傾向がある。

次に，C類の成立過程について考えてみよう。C類の成立については，A類の鍔より上

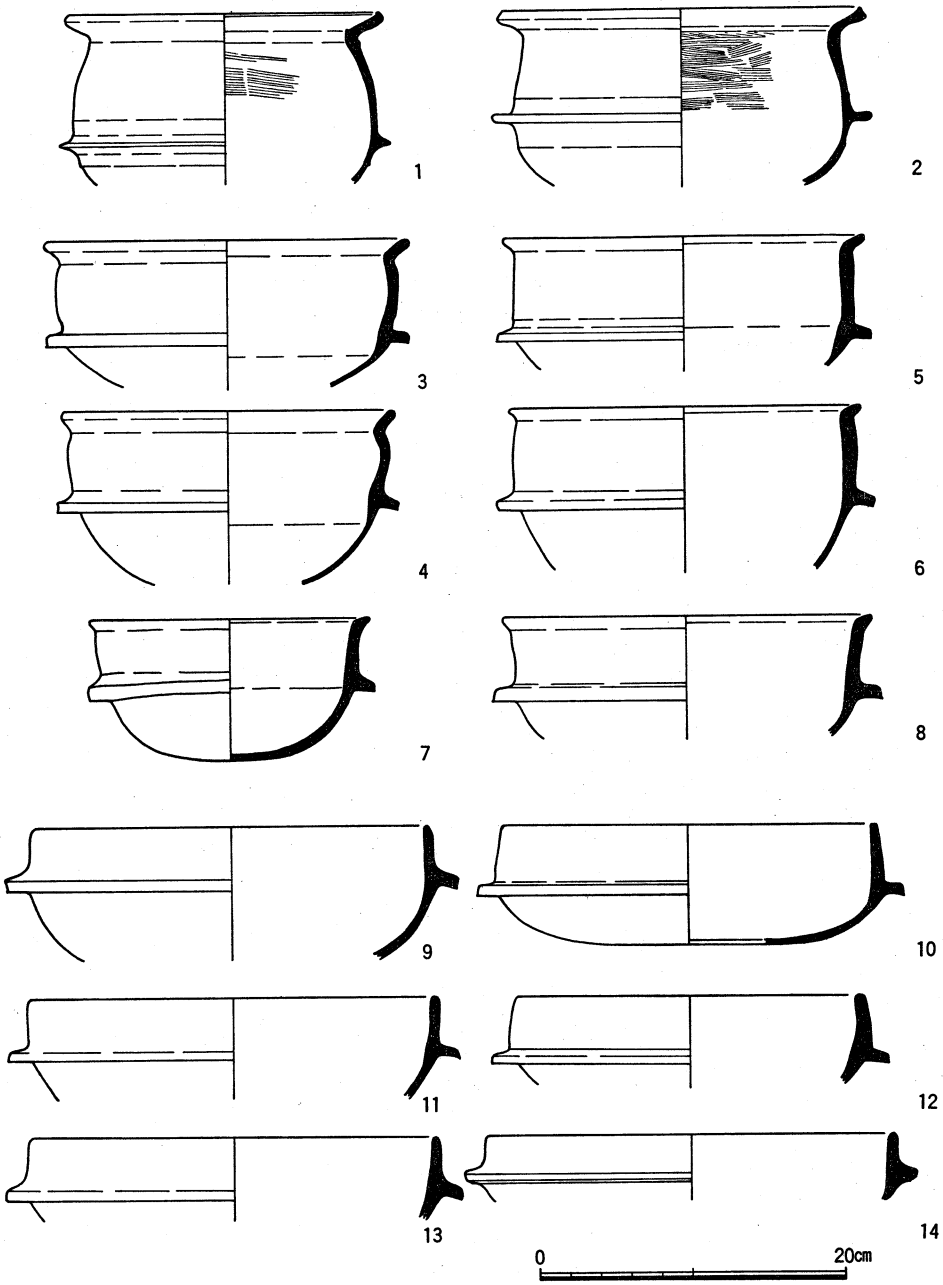


図46　奈良女子大学構内出土の近世・近代の土釜・炮烙 (1)　縮尺1/5

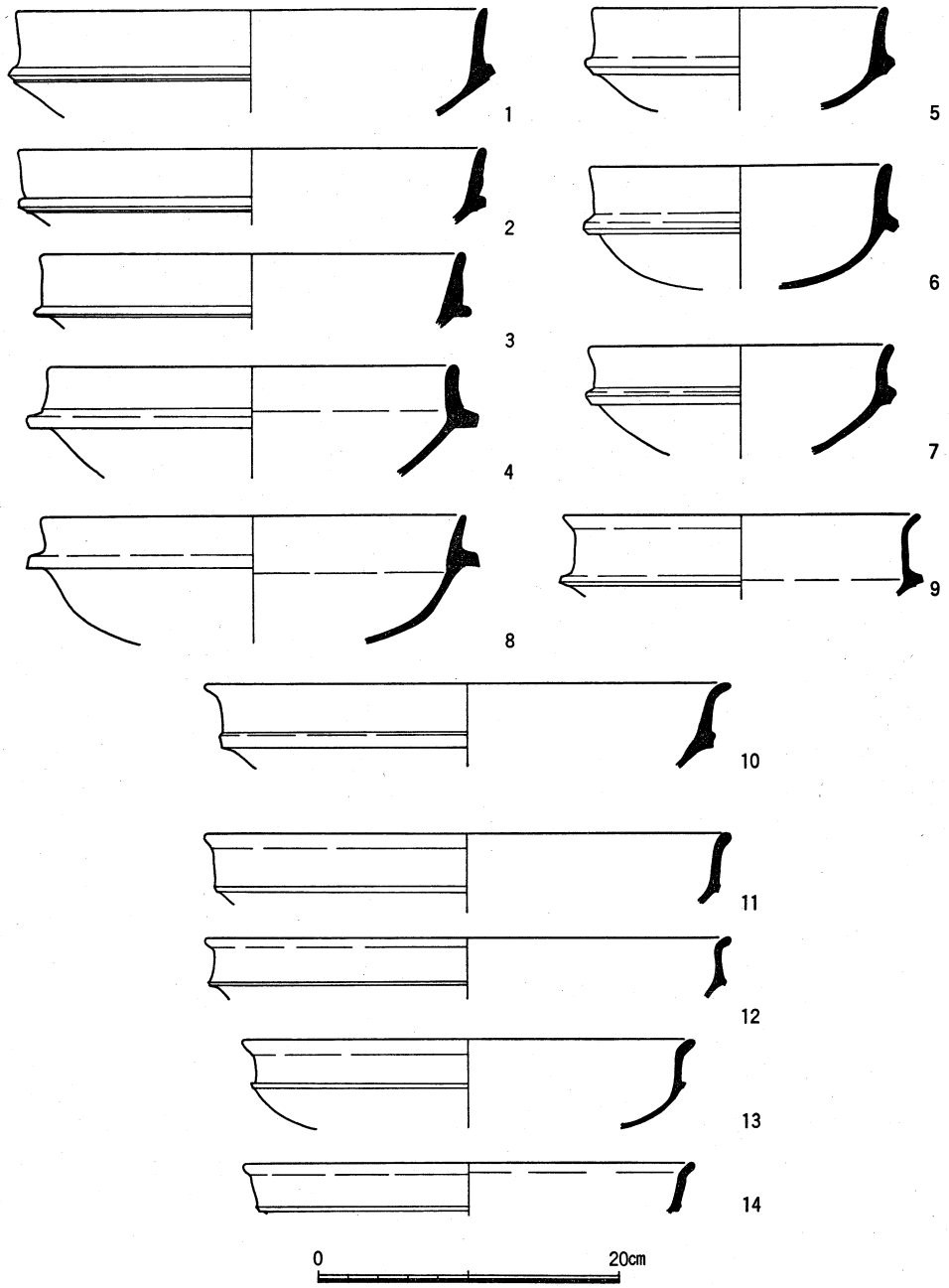


図47　奈良女子大学構内出土の近世・近代の土釜・炮烙 (2)　縮尺1/5

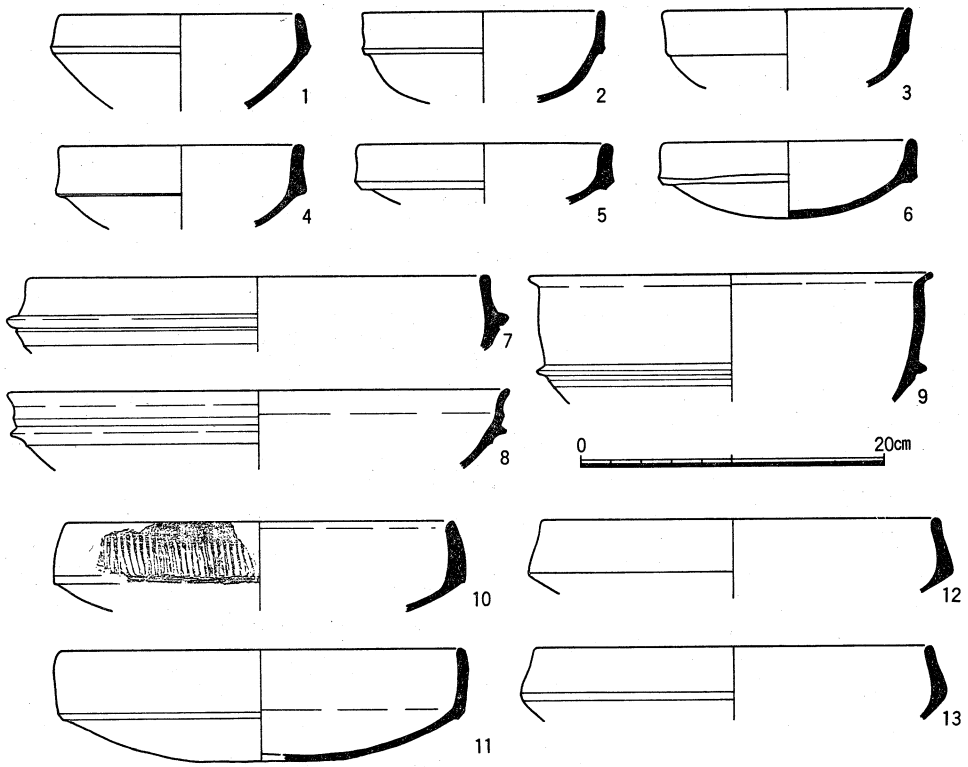


図48 奈良女子大学構内出土の近世・近代の土釜・炮烙 (3) 縮尺1/5

の部分が短くなり，この部分の内曲が次第に弱くなり，かつ口縁部の外反が不明確になり，底部が浅くなったという変化が，まず考えられる。たとえば，胎土aの例では図49-2→同4→同5，胎土bの例では図46-6→同8→図47-1という変化である。[24] これに対し，B類の口縁部の内曲が弱くなり，ほぼ口縁部が垂直に立上がるようになり，さらに外反するようになったという変化を想定することも可能である。たとえば，胎土aの例では図49-3→同7→同9，胎土bの例では図46-9→同13→同47-1という変化である。いずれにせよ，かつてはA類が煮炊き用，B類が炒熬用と，用途ごとに異なる形態のものが使われていたが，A類とB類の区別が次第に不明瞭になり，C類になると形態の類似したものを大小で異なった用途に使い分けるようである。すなわち，製作者が，製作器種を統合し，製作を簡化したと考えられる。

ここで，A・B類からC類への変化について，まとめてみよう。底部外型作りの出現以前には，鍔を有する土釜・土鍋類は，身と口縁部を作った後，鍔を付けていたが，底部外

型作りが導入されると，かつての身の下半である底部を型でまず作った後，鍔と身の上半と口縁部を一緒に作るようになる。しかし，A・B類の多くでは，まだ鍔を境とした上と下を一続きの部分とみなす意識が残っているが，製作法の変化に対応し，次第に，鍔より上の部分と下の部分が独立して変化するようになり，C類になると，それまでは身の上半と口縁部の2つの部分に分れていた鍔より上が，一体となる。そして，かつてはほぼ均一な厚さであった鍔より上の部分が，先端ほど薄くなった例（図47-3•8，図49-9）も出現する。また，C類になると，概して鍔の突出が小さくなる。胎土bのC類には，鍔の側面と下面の作る稜を斜に切り取るため，この部分が外へ突出しない例（図47-1～3•5～7）が多く，胎土aのC類には，鍔の下面を削る例（図47-8•9，図49-5•7）があるが，いずれも，A・B類にほぼ見られなかった特徴である。さらに，前述のように，胎土bの，A・B類の多くは器表が淡褐色であるが，C類になると多くは器表が赤橙色になる。

また，底部と鍔の底面に残る痕によって，A・B類とC類の底部を作るのに用いた外型の形状を比較すると，次のような相違がある。A・B類の底部を作るのに用いた型は，内面が概して深く，口縁部近くでの立上がりが顕著で，口縁部上端は内側が高く外側の低い明確な面を成していたようである。A・B類には，鍔の側面と下面の作る稜の位置が型の外縁と一致するため，外に突出する鍔のこの部分が，わずかに下へも突出する例（図46-8•11）がある。このような例から見て，型の口縁部上面の幅は，ほぼ1.2～1.5cmであったと考えられる。一方，C類の底部を作るのに用いた型の多くは，内面が浅く，口縁部近くでの立上がりが顕著でない。このため，製品の鍔の内面に屈曲の生じた例（図47-1•2•4•9，図49-4•5）もある。型の口縁部上端は，明瞭な面をなさないため，製品の底部と鍔下面の作る稜が明確でない例が多い。

D類（図47-11～14）は，C類の鍔の部分を切り取った型式である。C類の段階で口縁部の外反が大きくなる一方，鍔の突出は次第に小さくなり，煤避けや持ち手としての機能を果さなくなりつつあったのであろう。この部分を切り取って仕上げる特徴は，C類にすでに見られた鍔の側面と下面の作る稜を斜に切り取る特徴や，E類のこの部分の処理法の影響と考えられる。この種の調整は，利き手と手の運動の方向性に基づき，一般に，時計回りに行なわれたと推定できるが，切り取りによって砂粒が断面図側で手前方向へ動いていることから，C・D・E類共に，この作業を外型から外す前に行なったと推定できる。口径30cm以上とA・B・C類よりも大きい例が多い。浅化が顕著で，内面全体に炭化物が薄く付着する例が多いことから，炒熬に使ったと考えられる。口縁部高は3～4cmと低く，

A・B・C類の多くに比べて薄手で砂粒が目立たない。胎土から見て，すべて市坂で作られたようである。

E類（図48-1～6）は，前述のように，16cm前後と口径が小さいものである。底部内面にこげが厚く残った例が多く，主に煮炊きに用いたようである。口縁部の形態にはかなりバラエティがある。図48-1•2は，口縁部が内曲気味で薄く，口縁部端と口縁部の付け根がほぼ同じ厚さで，A・B類と同じく底部が深くその上部の立上がりが急で，古式と考えられる。これに対し，口縁部が全体に厚く，口縁端部に比べて口縁部付け根が厚い例は，概して底部が浅く，製作年代が下がると考えられる。口縁部下端を切り取った例があるが，D類のこの部分の切り取りに比べると砂粒の移動が顕著でなく，磨き状になった例が多い。また，胎土bの例が多い。

F類（図48-7～9)を，断面三角形の貼り付け突帯を除く形態が，A類に似たFa類（図48-9)，B類に似たFb類（図48-7)，C類に似たFc類（図48-8）に細分する。A～E類の多くとは異なり，暗茶褐色を呈し，胎土のきめが細かく，金雲母の微片を多く含む例が目立つ。A・B類よりC類が後出であることなどから，Fa・Fb類より，Fc類は後出と考えられる。奈良県磯城郡田原本町里中遺跡SD-01[25]から，17世紀後半から18世紀前半の陶磁器を伴って出土した鍔を有する炮烙・土釜の破片約50片のうち，ほぼ9割がF類であることから，この型式は奈良盆地でも中・南部で主に作られたと考えられる[26]。前述のように，この時期には，里中遺跡から1km弱しか離れていない八尾で土器が作られており，里中遺跡SD-01出土の土釜・炮烙に八尾の製品が含まれている可能性がある。

G類（図48-10～13）は，口径26cm前後の例が多い。口縁部高は，4cm前後である。底部は浅い。こげが厚く付着した例はなく，炒熬に使ったと考えられる。G類は，東播で作られたと考えられる土鍋を祖型として，和泉で成立し，大阪や京都で18世紀に盛んに用いられた型式である。中でも，図48-10と同じく口縁部外面に櫛状工具による掻き上げ状の調整痕の残る例は，堺環濠都市のSKT14地点SF001[27]（図50-3）やSKT85地点SK004[28]で出土しており，その製作年代は17世紀中頃から後半と考えられる。これは搬入品の可能性が高いが，他の例についても，奈良町周辺で作られたものではない可能性がある。

以上，胎土から見て，市坂ではA・B・C・D・E類が，西ノ京周辺ではA・B・C・E類が各々作られたと推定できる。すなわち，市坂と西ノ京では，ほぼ同じ型式が併行して作られている。しかし，C類は，両製作地で，形態や調整が若干異なる。また，D類は，西ノ京では作られていなかった可能性が高い。このほか，F・G類のように遠方の製作地

からの搬入品を含むと考えられる型式も少数ある。

次に，土壙出土例など，比較的一括性の高い資料を中心に，各型式の製作年代等について検討したい。

外型成形と回転調整を併用する土器製作法が，大和に現れる時期の良好な資料として，奈良市元興寺第9次調査近世土壙出土資料がある。この土壙からは，鎬手「福」字染付小碗を始めとする，製作年代が1640～1650年代に比定されている伊万里焼[29]や，これらとほぼ同時期に作られたと考えられる，明末の芙蓉手染付皿，唐津焼碗，美濃焼天目碗，信楽焼摺鉢などが，土器類と共に出土している。出土品の中で製作年代が下る可能性があるのは，薄手の白磁碗で，操業年代が1650～1680年代と考えられる長吉谷窯の物原から類品が出土している[30]。よって，この土壙出土の土器類の製作年代は，今のところ17世紀中頃から後半と考えておきたい。出土土器には，完形に近い「F型式土釜」3個体と，底部外型作り回転調整のA類が1個体含まれている。また，堺市周辺や京都市周辺の出土資料では，伊万里焼の出現する直前まで「F型式土釜」が存在し，A類は見られないようなので，A類が出現するのは，17世紀中頃から後半とできる。

17世紀に遡る可能性のある資料としては，ほかに，京都府相楽郡木津町木津遺跡第4次調査南地区SK07出土資料[31]がある。この土壙から，市坂産と考えられるA類が2個体（図49-1•2），17世紀後半に作られた見込みに山水文を描いたいわゆる京焼風陶器碗や伊万里焼染付碗と出土している。2個体のA類は，口縁部の形態がかなり異なっている。図49-1は，口縁端部が尖っており，面をなさないのに対し，図49-2は，口縁端部が，やや面をなす。しかし，両例とも，口縁上部が外へ屈曲しており，内面に稜がある点で共通し，鍔の側面下部や下面を切り取っていない。前述のように，浅田氏の祖先九兵衛が奈良から市坂へ移住してきたのは1680年頃と考えられるので，これが正しいとするなら，これらの製品の製作年代の上限は1680年頃とできる。

奈良女子大学構内6AEBKH25 No. 2 土壙では，口径がやや小さいFb類とG類が17世紀後半の伊万里焼染付碗や美濃焼天目碗などと共に出土している。

18世紀の資料は，比較的多い。

奈良女子大学構内では，6AEBKH10 No. 155 土壙下層で，胎土bのC類とE類が17世紀中頃から18世紀前半の伊万里焼染付や唐津焼系刷毛目文碗と共に出土している。6AEANL79大土壙では，胎土bの小型のC類（図47-6）が，18世紀前半の伊万里焼コンニャク版染付碗などと共に出土している。6AEANN80井戸上層では，胎土bのC類が

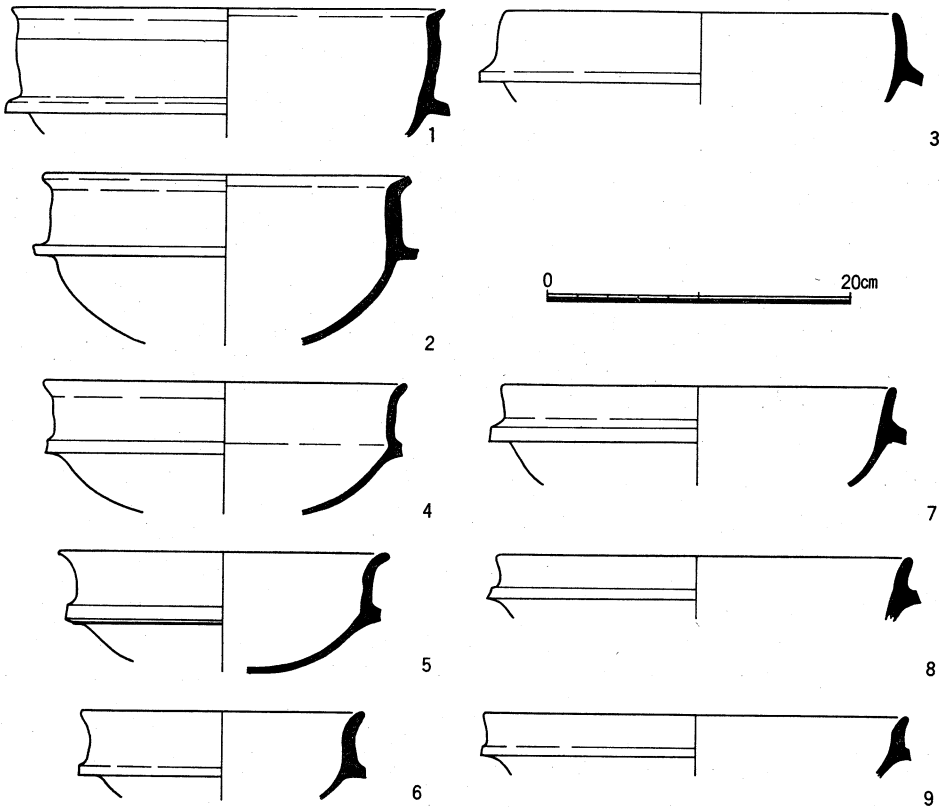


図49　木津遺跡第４次調査出土の近世の土釜・炮烙　縮尺1/5

18世紀中頃の伊万里焼青磁染付碗などと共に出土している。６ＡＥＡＮＲ79下層土壙では，胎土ｂのＣ類（図47-3）が，伊万里焼のコンニャク版染付碗，青磁染付碗，内外面に菊花氷割文を飾った染付碗など，18世紀前半から中頃の資料と共に出土している。

同時期の資料は，奈良市内や，前述の木津遺跡でも出土している。奈良市東大寺旧境内包含層上層[32]では，胎土ａのＣ類と，赤橙色を呈する胎土ｂのＣ類とＥ類が，コンニャク判や二重線網目文の伊万里焼染付碗や伊万里焼青磁染付碗など18世紀の遺物と共に出土している。木津遺跡第４次調査[33]北地区ＳＫ06からは，胎土ａのＣ類（図49-4）が17世紀末ないし18世紀前半の唐津焼系刷毛目文碗と共に，北地区ＳＸ14からは，胎土ａのＣ類（図49-5）と赤橙色を呈する胎土ｂのＣ類が18世紀の伊万里焼と共に，北地区ＳＸ05からは，胎土ａのＣ類（図49-6）が17世紀後半～18世紀前半の唐津焼系銅緑釉蛇の目釉剝ぎ皿と共に，北地区ＳＫ28からは，胎土ｂのＦｂ類が17世紀末から18世紀中頃の唐津焼碗や伊万里焼

と共に，出土している。

19世紀の良好な資料の報告例は，ほとんどない。

奈良女子大学構内６ＡＥＡＮＧ73近世土壙からは，行平や明治時代と考えられる染付などと共に，Ｄ類（図47-13）が出土している。また，奈良奉行所北濠跡内上層から奈良奉行所廃絶に関係すると考えられる上面にかけて，Ｄ類が出土している。よって，幕末から明治に，この型式の制作年代の１点があったと考えられる。Ｄ類の製作年代の下限は，浅田家で炮烙の生産が終わる1935年頃である。上限については，18世紀初から末までの良好な資料が比較的豊富であるにもかかわらず，Ｄ類がこの時期の資料と共伴した例はないことから，ほぼ18世紀末以降としてよいであろう。

以上から，Ａ・Ｂ類は17世紀中頃から後半に，Ｃ類は18世紀に，Ｄ類は19～20世紀前半に，各々，製作年代の中心があったと推定できる。ところで，前述のように，Ｄ類は市坂製と考えられる。市坂でＤ類が盛んに作られていた時期に，西ノ京では，すでに炮烙は作られていなかった，あるいはＣ類を作り続けていたなどの可能性が考えられる。

ここで，市坂で採集した炮烙をもう一度検討してみると，そのほとんどは，Ｄ類(図41-11～17）であり，少量，Ｃ類（図41-1～7）があることがわかる。また，浅田家に伝えられていた完形の小型の炮烙（図41-9）は，底部がきわめて浅いこととと口縁部の形状から見て，Ｅ類の中でも最終段階に位置付けることができよう。これらは18世紀以降に作られた型式で，浅田家の先祖が移住してきた17世紀後半に遡る型式はない。しかし，聞き取りから考えて，移住後，窯はほぼ同じ場所に作り続けられた可能性が高い。

（外型成形と回転台調整を併用した土器作り）

浅田家に残っている前述の記録には，「かわらけや」「土器師」という名称が見え，18世紀末以降のある時期まで，これが市坂の土器作りの職名であったことがわかる。ところが，廃業の頃にはホウラクヤと呼ばれていた。[34] この変化は，近世になり，次第に，煮炊き具が鉄器や陶器で，食器が陶磁器で，燈明具が陶器で作られるようになり，土器の需要・生産の中心が，炒り鍋である炮烙へと移行していったことを，端的に示している。また，江戸時代後半には，他の器種はほとんど作らず，農間副業に専ら炮烙を作る大阪府枚方市津田・招提のような製作地まで，京都周辺には出現する。

ところで，17世紀中頃以後，京都・奈良・堺・江戸近郊など各地で，炮烙・土釜を，基本的には市坂例と同じ方法で作るようになる。すなわち，粘土塊を叩き延すか粘土塊から針金などで切り取ることによって薄い粘土板を用意し，これを土製外型の内面に張り，型

のまま回転台の上に据え置き，底部を成形し，口縁部を付け，底部内面と口縁部内外面を回転を利用して撫でて仕上げ，外型のまま回転台から移動して乾燥する，という方法である。この製作法は，単に底部を外型を用いて成形するだけではなく，これと回転台による調整を組合せることにより，作業をきわめて簡略化することを可能にした。良好な資料の報告例がまだ少なく，不明な点も多いが，この製作法の成立と展開について，現段階における予察を，次に述べたい。

まず，京都である。京都市平安京左京一条二坊ＳＥ300[35]からは織部焼や砂目積の唐津焼は出土しているが，伊万里焼は出土していない。共伴した，浅い丸底で，外反する口縁部を持つ土鍋は，いずれもまだ外型作りではない（図50-4)。これとほぼ同時期の資料と考えられる京都市押小路殿３次調査土壙101[36]出土の，報告書に図示されている同型式の土鍋も，外型作りでないようである。これに対し，平安宮内裏土壙34[37]で，初期伊万里焼と共に出土した同型式の土鍋約10点は，いずれも外型を用いて成形したため底部外面と口縁部の下面が粗面で，底部内面と口縁部の端面及び上面には回転撫での痕が残っている（図50-5)。この変化に伴い，口縁部の内曲が弱くなり，口縁端部の上への突出がなくなる。ほぼ同時期の京都市長刀鉾町遺跡ＳＫ339[38]出土の同型式の土鍋も，外型成形回転調整のようである。よって，この製作法が17世紀中頃にはすでに京都周辺に導入されたことがわかる。奈良では，前述のように，この製作法がやはり17世紀中頃から後半にはすでに導入されている。また，江戸近郊でも，17世紀後半には，同じ製作法で中世以来の在地土器である内耳鍋を祖型として丸底の炮烙が作られている[39]。ただし，丸底の炮烙は関東ではあまり普及せず，江戸でも周辺地域では，平底が長く残る[40]。

京都や奈良の周辺では，外型や回転台を土器製作に使う伝統が前段階には明確ではなく，底部外型成形と回転調整が組み合って突然出現する。よって，他地域でこの製作法が完成した後，京都や奈良の周辺の生産地に伝わった可能性が高い。ここで注目されるのは，堺周辺には外型作りの伝統が16世紀にすでに存在することである。堺周辺へは，15世紀後半から16世紀前半以後，東播産と考えられている底部外型成形の土鍋が搬入されるようになり[41]（図50-1)，16世紀後半には，同型式のものが堺周辺でも作られるようになる[42]。これらの土鍋は，外型による底部の成形→口縁部の成形→口縁部から口縁部と底部の作る稜にかけての叩きによる整形→口縁部の撫で→内面の乱方向の撫で，という手順で作られたと考えられる。口縁部外面の叩きが，底部にまで廻った例があることから，口縁部の成形後は乾燥が進み外型が外れるのを待って作業を行なったのであろう。ところが，1615年以後に

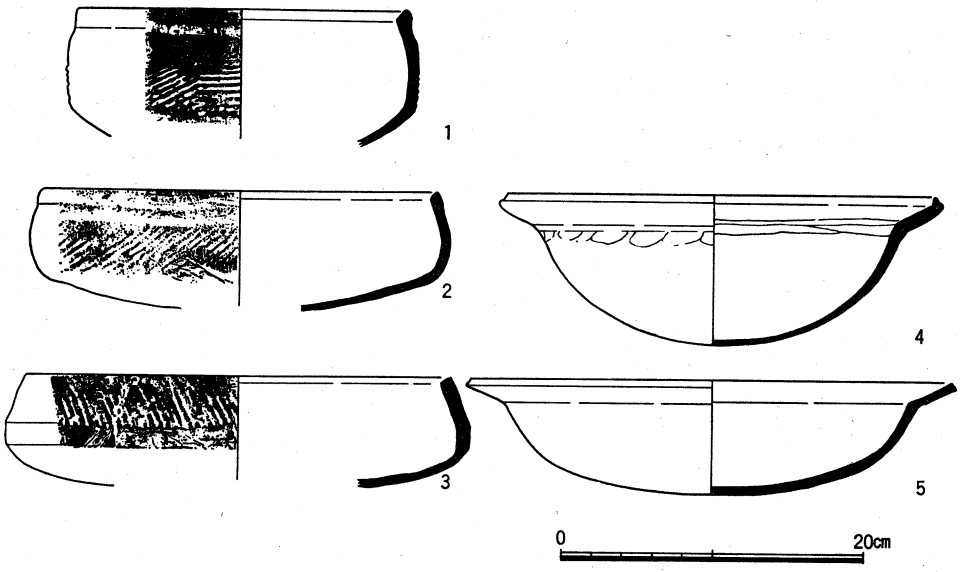


図50　外型と回転台を使った土器作りへ（1『堺市文化財調査報告』第15集
2 注27文献　3 同　4 注35文献　5 注37文献より作図）　縮尺1/5

掘られ，慶安年間（1648～1651）には埋まっていた堺環濠都市ＳＫＴ14地点堀ＳＦ001[43]出土の底部外型作りの土鍋・炮烙には，前段階と共通する，口縁部外面に右上がりの平行叩き痕を持つ例（図50-2）は少ない。代って，左上がりの櫛状工具を使った掻き上げ状の調整痕を持つ例（図50-3）などが新たに現れ，口縁部の内外面から底部内面のかなり広い範囲にわたり，回転撫で状の調整が見られるようになる。また，東播系の土鍋では口縁部の整形と同時に行なっていた口縁部と底部が作る稜の整形を，独立した工程として行なうようになる。この時期に，製作法が大きく変化したようである。

この変化について，さらに考えてみよう。まず，口縁部と底部が作る稜の整形を，口縁部の整形とは別の工程として独立させた点である。これは，乾燥が進んで底部が外型から外れるのを待ってから口縁部の整形を行なっていた時には，口縁部とこの稜の部分の整形を同時にできたが，口縁部の整形を底部が外型に納まったままの状態でするようになったため，型に接する稜の部分の整形は，口縁部の整形とは別に行なわざるを得なくなったと考えたい。口縁部の整形法として，叩きが用いられなくなるのも，底部が外型に納まったままの状態では，口縁部を叩きで調整することが困難となったためであろう。このように，底部が外型に納まった状態で口縁部の整形をするようになったのは，外型に納まり回転台

に据えられたそのままの状態で，次の工程の口縁部と底部内面の撫でを，回転台を回して行なうためと考えられる。以上から，この時期に回転台を調整に積極的に用いることが始り，東播系の土鍋では，乾燥が進み外型から底部が外れるのを待ってからしていた作業のほとんどが，その前にできるようになったと推定したい。

このように，17世紀の第2四半期頃に，外型と回転台を併用して炮烙・土釜を作る方法が堺周辺で成立したと考えられるが，その製作法は，市坂を含め，最近まで各地で行なわれていた炮烙の製作法とほぼ同じであった。そして，この製作法は，京都・奈良・江戸周辺などに，短期間のうちに伝播したようである。それは，この製作法に次のような長所があったためであろう。

まず，成形・整形・調整のほとんどの工程が，回転台を使って行なえるため，製作が簡便である。また，外型のまま乾燥するため，大型で薄手丸底のものの製作も容易である。たとえば，市坂の炮烙の場合，口径に関係なく底厚は2.5㎜前後で，大阪府枚方市津田で作られた炮烙は，直径40㎝ぐらいのものでも底厚は1㎜強にすぎない。また，製品の大きさを型の大きさによって決めることができるので，規格品の製作が容易であり，多種の法量規格のものも作れる。たとえば，枚方市津田で作られていた炮烙には，口径約13㎝から49㎝の間に，8種，法量規格があったことが，残存する土製外型の口径からわかる。さらに，型のまま乾燥するので，仕上げの調整が終わってすぐに製品を回転台から移動させることができ，作業の回転がはやい。

一方，このような技法による炮烙作りの普及・伝播は，他の器種の土器の製作法にも，大きな影響を与えたようである。

第1に，炮烙や土釜以外の器種の製作にまで，外型作りが広く採用される。堺市や姫路市では，18世紀以降，外型を用いて成形した鑵子や十能が出土している。香川県高松市御厩，岡山県浅口郡大原，広島県東広島市八本松，山口県防府市佐野，鳥取県倉吉市不入岡，島根県出雲市大津などでは，火鉢や土釜・消し壺・土瓶・焜炉などを土製外型を用いて作っていた。京都市深草では，18世紀以降，焼塩壺の蓋を外型成形回転撫でによって作っている。しかし，陶磁器の型作りは，明治時代以前にはほぼ形態が非回転体を成すものに留っている。これは，陶磁器では，土型や木型で抜いたままでは表面の仕上がりなどに問題があり，型抜きした後にさらに調整して仕上げる必要があり，その手間などを考えれば，回転体は水挽きで作る方が有利であったからであろう。回転体の陶磁器の製作に型作りが多用されるようになるには，明治になってヨーロッパから石膏型流し込みの技術が導入さ

れるのを待たねばならなかった。

第2に，従来，土器の製作に回転台を用いた痕跡が明確でない地域の土器製作に，回転台を導入することになった。たとえば，畿内では，従来，風爐・火鉢・消し壺などの調整のほとんどは，回転台を利用しない刷毛目やヨコナデなどによっていたが，次第に回転撫でを用いるようになる。また，深草では，17世紀後半頃から，デンボ・皿類・焼塩壺なども回転台を使って作るようになるが，これも炮烙・土釜などを外型と回転台を使って作る方法が普及するにつれて，他の器種の製作にも回転台を使用するようになった例であろう。さらに，香川県御厩や山口県佐野では，撫でだけではなく磨きまでも回転によって行なっている。ただし，土器の部分的な成形や調整に回転台を使うことは急速に普及するが，遠心力を充分に利用して挽き出す製作法を採用した痕跡はほぼない。

このような製作法による土器作りは，従来の土器製作や「土揉み3年，轆轤6年，窯焼10年」と言われる陶磁器製作に比べて，技術の習得も比較的容易であったようである。鳥取県倉吉市不入岡の「ほうろくや」では，土製外型とロクロを併用して炮烙をはじめクド・七輪・消し壺などの各種の土器を作っていたが，これらの製作は難しいものではなく，2～3年もすれば一応の技術は身に付いたという。[44] 江戸時代中期以降，農村への貨幣経済の浸透に伴い農間副業が盛んとなるが，炮烙を中心とする土器作りも，このような農間副業の対象となり，新たな生産地が各地に出現する。これには，外型と回転台を併用した簡便な土器製作法の普及も関係するのではないだろうか。

このように，外型と回転台を併用した炮烙作りの成立は，以後の土器製作に大きな影響を与えており，近世の土器製作における1つの画期となったと評価できよう。

次に，これらの土器製作にどのような回転台が使われたかについて，検討する。まず，近代・現代の土器製作に使われた回転台について，実見した資料を中心に見よう。

図51-1は，大阪府津田で，1960年頃まで炮烙の製作に使われていたロクロの，円盤裏面である。1辺が中心を向くように配された4本の角柱の痕がある。胡座あるいは正座した状態で，左手で円盤を持って回して使ったという。構造・用法共に，市坂例と同じである。図51-2は，山口県佐野で，今も炮烙・火鉢等の製作に使われているロクロである。軸棒は，板に固定してある。ロクロは，左手で円盤を持って回す。図51-3は，広島県八本松で，昭和30年（1955）頃まで，炮烙・消し壺等を作るのに使っていたロクロである。上盤と下盤を4本の角柱で連結している。下盤は輪状で小さい。左手で上盤を持って回す。八本松では，蹴轆轤も土器製作に使っていた。図51-5は，香川県御厩で，炮烙・消し壺・土釜等の

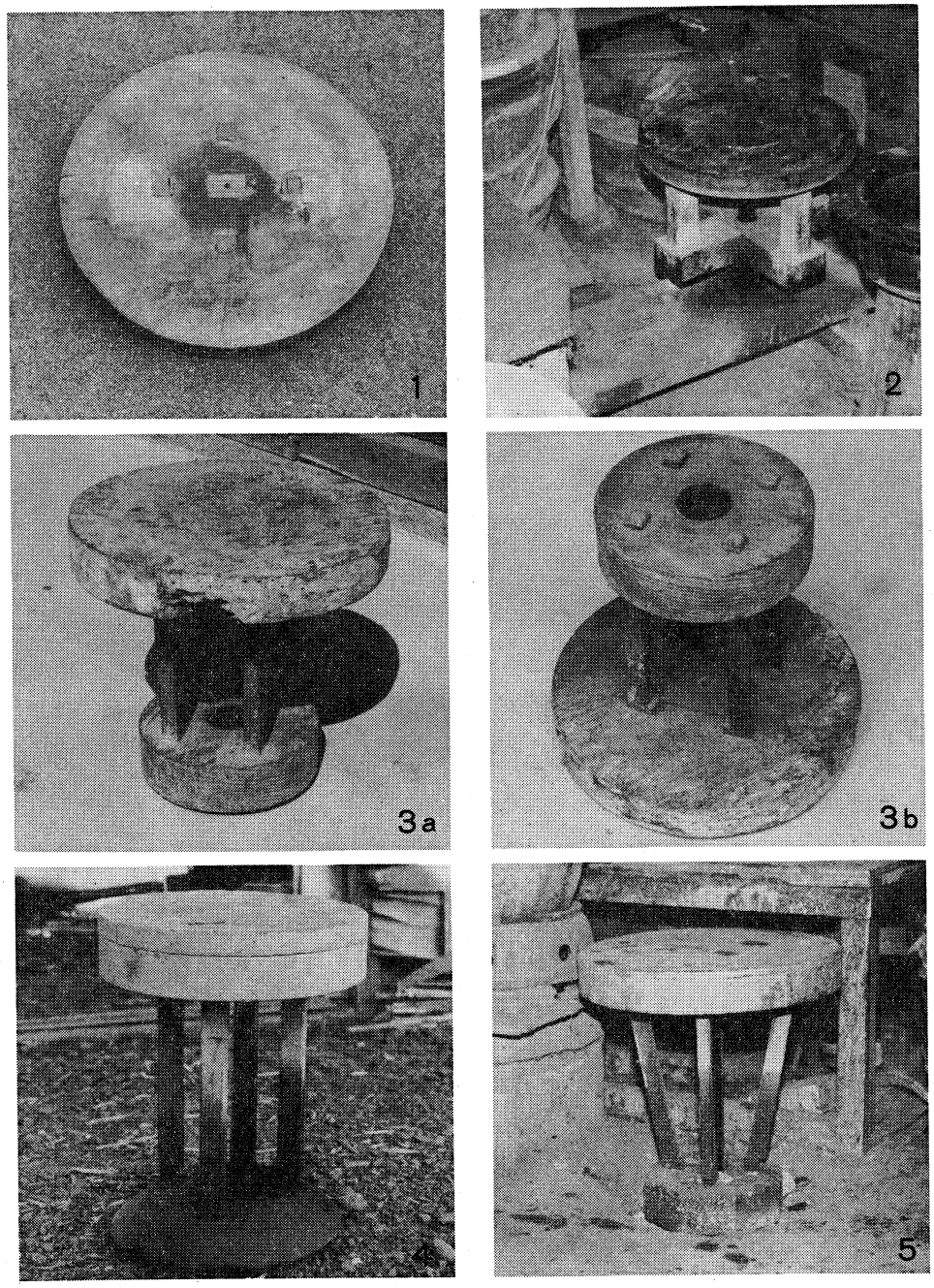


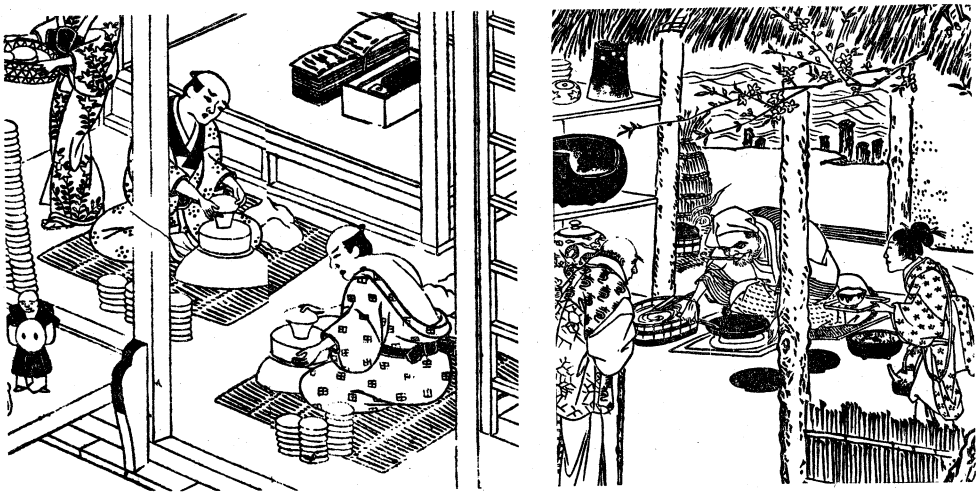
図51　土器作りの回転台
1 大阪府枚方市津田　2 山口県防府市佐野　3 広島県東広島市八本松
4 島根県出雲市大津　5 香川県高松市御厩

製作に今も使われているロクロである。実見した３例いずれも下盤が小さな８角形で，これと上盤を４本の角柱で連結している。左手で上盤を持って回す。図51-4は，島根県大津で，炮烙・消し壺・植木鉢等の製作に昭和57年（1982）まで使っていたロクロである。下盤は上面周縁が斜面になっており，蹴轆轤の形態を残しているが，実際は，左手で上盤を持って回していた。上盤と下盤は４本の角柱で連結している。以上は実見した例である。このほか，千葉県東金市田間では，炮烙・火鉢・植木鉢等の製作に，ほぼ同大の上盤と下盤を４本の角柱で連結したロクロが昭和50年（1975）まで使われていた[45]。これは，左手で上盤を持って逆時計回りに回す場合と，左足で下盤を内側へ蹴って逆時計回りに回す場合があったという。

以上の例では，土器の製作に際して，回転台は主に左手で直接円盤を持って回している。回転台は，逆時計回りと時計回りのいずれにも回して使っているが，逆時計回りに回して使うことが多いようである。これは，円盤を手で押す動作よりも引く動作のほうが容易であるという，手の運動方向に関する制約と関係しているのであろう。これらの回転台は，いずれも，円盤の下面に４本の角柱が付いている点で共通する。その中には，島根県大津例のように蹴轆轤の影響の考えられる例もあるが，市坂や大阪府津田さらに山口県佐野などの回転台については，蹴轆轤との関係だけでは説明が難しい。近畿地方など，従来は土器作りに回転台を使っていなかった地域への回転台の導入については，中世ですでに土器作りに回転台あるいは轆轤を使っていた地域の影響や，瓦作りに使われていた回転台との関係などが考えられる。さらに検討を要する。

いずれにせよ，近代・現代の土器製作地の多くでは，陶磁器の生産に使われる手轆轤や蹴轆轤は，積極的には導入されなかったようである。その理由としては，前述のように，型を多用する土器製作においては，回転台は部分的な成形と調整に用いるにすぎず，簡略なもので充分であったことが，まず考えられる。

さらに，江戸時代に遡って，どのような回転台あるいは轆轤が土器の製作に使われていたか，若干の資料を見よう。『日本山海名物圖會』宝暦４年（1754）刊には，京都深草の土器作りを描いた図が掲載されている（図52左）。２人の土器製作者は男性で，土間に蓙あるいは筵を敷いて座り，回転台を使って土器を作っている。回転台は，土壙の中に据えられているため，円盤しか見えない。右側の製作者は，左手で円盤を回しているようである。『江戸名所図會』天保５年（1834）刊には，今戸の土器作りが描かれている（図52右）。やはり男性が土間に座り，円盤が地面とほぼ同じ高さになるように据えた回転台を使って



京都・深草（『日本山海名物圖會』）　　江戸・今戸（『江戸名所図會』）

図52　深草と今戸の土器作り

いる。回転台は深草例と同じく，左手で円盤を持って回しているようである。両例共に，蹴轆轤ではない。ところで，17世紀中頃以降の，製作に回転台を使った江戸と京都の土器の多くは，逆時計回りの回転による調整痕を残している。畿内以東では，陶磁器の製作には手轆轤が主に使われていたが，前述のように，日本では，手轆轤は右手に持った回し棒で時計回りに回す。このことからも，これらの土器の製作に用いた回転台は，回し棒を使う型式でもなかったことがわかる。

以上から，京都周辺や江戸周辺で炮烙の底部外型作り回転調整の普及後に使われていた回転台の多くは，前述の近代・現代の土器作りの回転台の多くと同じく，円盤を左手で直接持って回す型式のものと推定できる。前述の諸例からの憶測が許されるなら，円盤の下に４本の柱を持つ型式であったかもしれない。すなわち，京都の場合，深草を始め，周辺で土器作りに使われた回転台は，同じ地域内の粟田口・五条坂・信楽等で陶磁器の製作に使われた手轆轤（図35）とは，構造・機能・回転方向が異なっており，さらに，回転方向に制約される使用時の製作者の手の位置等までも異なっていたことになる。

なお，前述の堺環濠都市ＳＫＴ14地点ＳＦ001出土の土鍋には，逆時計回りの回転台による回転撫で痕と思われる調整痕を残す例がある。さらに多くの類例を検討する必要があるが，堺市周辺で，土鍋の製作に導入された回転台も，やはり同様のものであったようである。

（大和の炮烙売り）

19世紀前半の，喜多川守貞著『守貞漫稿』には，大和の炮烙売に関する記述と図(図53)があり，当時の炮烙の行商人の姿を生き生きと我々に伝えてくれる。

「炮烙賣　　京坂所用ノホウロク鍋ハ大和製ヲ良トス　彼国ヨリ來リ賣之詞ニ大和ホウロク大和ホウロクト呼フ　蓋冬專ラ賣來リ　江戸ニテハ瓦器賣兼賣之テ別ニ此賣ナシ」

図53　大和の炮烙売り（『守貞漫稿』）

これによると，19世紀前半頃，京都・大阪に，冬，大和から行商人がやってきて炮烙を盛んに売り歩いていたようである。ところが，京都では19世紀以降，1960年頃までは大阪府枚方市の津田や招提で作られた製品が主に使われており，京都で大和系の底部外型作りの炮烙が出土した例は，寡聞にして知らない。筆者の喜多川守貞は，30才代まで大阪で暮した後，江戸へ移っており，京阪と記しているが，実際は京都の炮烙売りを実見する機会はそれほどなかったと思われる。よって，これは，大阪の炮烙売りについての記述と見るべきかもしれない。大阪周辺では，羽曳野市野中寺[46]，柏原市玉手山遺跡[47]，東大阪市山賀遺跡[48]，徳川氏大阪城跡[49]，堺市小坂遺跡[50]，堺環濠都市ＳＫＴ85地点[51]などで大和系の底部外型作りの土釜・炮烙が出土している。また，これらの土釜・炮烙には，先に八尾や雲悌など奈良盆地の中・南部の製作地で作られた可能性を指摘したＦ類，すなわち断面三角形の貼り付け突帯を巡らせる型式が多い点は，興味深い。これらの全てが大和産かどうかは不明であるが，その中に，『守貞漫稿』に見えるような振売によって大和から運ばれたものが含まれている可能性がある。しかし，出土品で見る限り，大阪でも，この時期の炮烙の中で大和系の占める割合は低い。大和の炮烙売りは遠方からやってくる冬の風物誌として，人々の興味を引きやすく，そのため記録に留められたのであろう。あるいは，他の製作地の製品を，当時良質とされていた大和産と称して売ることもあったのであろうか。

ところで，炮烙の需要の中心は，『守貞漫稿』にあるように冬であった。枚方市津田での聞き取りでも，炮烙は年末から年越し，すなわち12～２月頃によく売れたという。また，明治25年（1892）頃，三重県では年暮に炮烙と土器皿を売り歩いていたらしい[52]。性格は異

なるが，京都では，明治27年（1894）頃，壬生寺に奉納する炮烙を，年越の前後に売り歩いていた。[53]

土器皿は，江戸時代でも終りになると，祭器としての使用が主になっていったと考えられ，新年に新しいものを用いるため，年末に需要が大きかった。文久2年（1862）刊の木村明啓著『雲錦随筆』には，年の暮に洛中に出て初春の祝い土器皿を売り歩く木野の土器師が記してある。また，明治22年（1889）頃には，12月25日から晦日までの間，正月の神事に使う土器を深草からやってきて売り歩いていたらしい。[54] 明治30年（1897）頃にも，京都では，年末に，伏見や大和から土器売がやってきて，一月の神事用の土器を売り歩いていたという記事がある。[55] この頃には，土器皿の行商も，年末に盛んであったようである。市坂の土器作りの場合も，すでに述べたように，土器皿は盆と年末によく売れたという。

6　おわりに

1950年代以降の経済成長は土器製作の後継者を奪い，急速な生活様式の変化は土器の需要を低下させた。このようにして，縄文時代以来営々と続いていた土器製作も衰退し，さらに細々と製作を続けていた製作者の高齢化による離職に伴い，旧来の形で土器製作を続けている産地は，今では数箇所しかない。本稿で紹介した市坂の例は，1930年代にすでに生産を中止しており，そのため，前述のように聞き取りによる情報の収集に大きな制約があった。しかし，調査を通じて教えられたことは，私には少なくなかったように思う。

最後に，度重なる聞き取りに，我慢強く付きあい，昔の記憶をなんとか呼起こして下さった浅田又彰氏，福島よ志氏，高原庄道氏，未発表の資料を自由に調査し本稿に使用することを許可して下さった奈良女子大学の坪之内徹氏，京都府埋蔵文化財調査センターの小山雅人氏の御厚意に感謝致します。また，資料の実見等に当っては，秋枝芳，植山茂，宇治田和生，大東延和，川口宏海，小森俊寛，嶋谷和彦，白神典之，立石堅志，永田信一，長谷川眞，堀内明博，前川要，藤田三郎，松田隆典，森下恵介の各氏に御世話になり，御教示を受けた。さらに，文献資料の解読に当っては，京都国立博物館の下坂守氏に御教示を受けた。記して，感謝致します。

注

〔注〕

1　近世以降，土師質あるいは瓦質の炒り鍋は，地域によってさまざまな名称で呼ばれているが，広く使われていた呼称は，ホウロクとホウラクである。詳述は略すが，ホウラクという呼称は，京都・大阪およびその近郊の限られた地域で使われていたようであり，これに対し，ホウロクという呼称は，近畿地方の周辺部や九州・中国・四国・東海地方さらに江戸など，より広い地域で使われていた。本稿では，繁雑になるのを避けるため，原地での呼称は片仮名で記し，他は基本的に「炮烙」に統一して表記した。ロクロと回転台についても同様である。ところで，ホウラクあるいはホウロクという名称は，『大乗院寺社雑事記』や『多聞院日記』にすでに見えるが，具体的にこの時期の遺物として残る土釜や土鍋のどの型式がそれに対応するのかについては不明である。『多聞院日記』の永禄12年（1569）10月19日の項に，油煙墨製作の用具として，一文ホウラク，三文ホウラク，四文ホウラクが記してある。これが，ニカワを湯で溶かすときに使う土鍋を指しているとすれば，大和では，この時期には，煮炊きにも用いる土釜・土鍋をホウラクあるいはホウロクと呼んでいたことになり，興味深い。

2　近・現代の土器焼成窯には，市坂や京都市木野で用いられていた円筒形で上部の開いた型式のものと，大阪府枚方市津田などで用いられていた天井があり密閉可能な窯の2種がある。前者は酸化炎焼成しかできないが，後者は酸化炎焼成と還元炎焼成が可能である。後者は，本来は瓦質土器の焼成に用いられていたと考えられるが，京都周辺などでは，近世になると，中世の瓦質土器の伝統を引く土釜・土鍋・火鉢・風爐なども，土師質に仕上げられるようになる。このように還元炎焼成から酸化炎焼成へ，焼成法は変ったが，引続き同じ型式の窯を土師器の焼成に使い続けたのであろう。

3　京焼の素焼窯にも同様の構造を有する例がある（『京都陶磁器説并図』(藤岡幸二編『京焼百年の歩み』1962 附録))。また，前述の河井寛次郎の記録には，窯の中は，中央に柱を立ててこれに放射状に胡麻炒を渡して床面をつくっていたとあり，挿図（図33）にもそのように描かれている。

4　京都市木野では，同型式の円筒形の窯の上面に生灰を厚くかけ置く（島田貞彦「山城幡枝の土器」『考古学雑誌』第21巻第3号　1931)。伊勢神宮の御料土器製作所でも，焚き上がった段階で松葉の灰を掻き出して円筒形の窯の上面にかける（神宮司庁発行『神宮の御料土器』神宮弘報シリーズ　第二集　1972)。京都市の伏見人形の素焼窯では，焼き上がった段階で円筒形の窯の上面を濡れ莚で覆う（石沢誠司「伏見人形」『京都府の民具』第Ⅳ集　1982)。これらの操作は同様の意味があると考えられるが，伏見人形の焼成窯の場合，これによって，熱が満遍なく行き渡り，製品に吸着していた炭素が除かれるという。

5　これは，埼玉県の瓦作りについての調査でも確認されている（埼玉県立民俗文化センター『埼玉のかわら』埼玉県民俗工芸調査報告書　第4集　1986)。

6　『多聞院日記』文明10年（1478）8月13日条

7　『大乗院寺社雑事記』文明5年（1473）4月1日条

8　『大乗院寺社雑事記』文明7年（1475）3月23日条

9　『大乗院寺社雑事記』文明11年（1479）9月9日，文明12年（1480）7月17日，文明14年（1482）5月7日，長禄3年（1459）12月25日条

10　『大乗院寺社雑事記』長禄3年（1459）5月28日条

11　西ノ京の土を使うが，奈良町に住んでいたとする考え（豊田武「大和の諸座続編（中)」『歴史地理』第66巻第2号　1935）や，白土器座や伝教院土器座の土器作りについては，西ノ京に住んでいたことを認める考え（『奈良県の地名』日本歴史地名大系第30巻　1981）がある。

12　小野賢一郎編『陶器大事典』巻1　1934

13　木村博一「産業の町」『奈良市史』通史三　1988　所収。同種の土器は，木村蒹葭堂著『蒹葭堂雑録』安政3年（1856）序に，同じく春日大社の祭式で神供に用いる土器として図示されており，クワイと記されている。類品は奈良女子大学構内で出土している。浅田家で作り，春日大社に納

めていた，前述の高坏形の土器も，この種のものであろう。

14 春日大社参事の大東延和氏より，春日大社の近世の社頭日記に，土器作りの作手号所の記載があるとの教示を受けた。

15 注13木村1988文献に所収。

16 加藤唐九郎編『原色陶器大辞典』1972

17 『京都陶磁器説并図』（藤岡幸二編『京焼百年の歩み』1962　附録）

18 佐原眞訳ジョージ＝M＝フォスター著「ロクロ」土器の話９『考古学研究』73号 1972

19 桑野一幸・仲井光代『玉手山遺跡』1983・1984年度　柏原市文化財概報1986-Ⅸ　1987

20 『多聞院日記』には，寺院内で行なわれていた油煙墨作りに関する記事がある。そのうち，元龜２年（1571）３月14日の条に，「灰取フタ今辻子与二郎ヨリ借リテ来」とある。灰とは製墨用の煤のことなので，この灰取フタは油煙受皿を指すと考えられる。ただし，その形態などについての具体的な記述はない。

21 鹿谷勲「奈良の墨作り」『技術と民俗（下巻）都市・町・村の生活技術誌』日本民俗文化大系 第14巻　1986。

22 稲垣晋也「法隆寺出土資料による土釜の編年」『大和文化研究』第７巻第７号　1962

23 菅原正明「奈良奉行所の景観」『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅱ』 1984

24 小山雅人は，木津遺跡第４次調査出土例について，本稿の「Ｆ型式土釜」→Ａ類→Ｃ類の変化を指摘している（小山雅人「木津遺跡第４次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第20冊 1986）。

25 藤田三郎・有本雅己・豆谷和之『小坂里中古墳・里中遺跡発掘調査概報』田原本町発掘調査概要５　1987

26 里中遺跡ＳＤ―01からは，Ｇ類も多数出土しているが，同時期に，奈良町周辺で多く出土するＡ・Ｂ・Ｃ・Ｅ類は，見られない。奈良町付近出土のＧ類の一部は，奈良盆地中・南部でつくられたものの可能性がある。

27 嶋谷和彦ほか「堺環濠都市遺跡発掘調査報告―宿院町東４丁　ＳＫＴ14地点・調御寺跡―」『堺市文化財調査報告』第20集　1984

28 土山健史「堺環濠都市遺跡発掘調査報告―堺市甲斐町東４丁　ＳＫＴ85地点―」『堺市文化財調査報告』第31集　1986

29 肥前陶磁器の編年は，大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布―発掘資料を中心として―」『国内出土の肥前陶磁』 1984　に従った。

30 佐賀県立九州陶磁文化館『窯ノ辻・ダンバギリ・長吉谷』 1984

31 注24文献に同じ。

32 篠原豊一「東大寺旧境内発掘調査報告　Ⅳ81-３次調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和56年度　1982

33 注24文献に同じ。

34 1603・1604年に刊行された日本イエズス会編『長崎版日葡辞典』には，「ホウロクツクリ」の項があり，これには「土器を作る人」という解説がある。17世紀には，一部の地域で，ホウロクツクリという呼称が土器作りの呼称としてすでに使われていたようである。

35 平尾政幸・本弥八郎「平安京左京一条二坊」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』 1987

36 横田洋三・（寺島孝一）「平安京押小路殿跡第３次発掘調査」『押小路殿跡・平安京左京三条三坊十一町』平安京跡研究調査報告　第12輯　1984

37 梅川光隆「平安宮内裏」『平安京跡発掘調査概報』昭和60年度　1986

38 横田洋三「平安京関係の遺構・遺物」『平安京左京四条三坊十三町―長刀鉾町遺跡―』平安京跡研究調査報告　第11輯　1984

39 小林謙一ほか「瓦質・土師質土器」『郵政省飯倉分館構内遺跡』 1986　扇浦正義「三栄町遺跡出土遺物の変遷」『三栄町遺跡』 1988

40 たとえば，東京都葛飾区葛西城跡出土の，報告書掲載の18世紀の炮烙は，いずれも平底である（谷口榮・森伸一ほか『葛西城址　葛飾区青戸７丁目14番地点発掘調査報告書』1987，谷口榮・加納梓・白井孝幸『葛西城址　葛飾区青戸７丁目36番地点発掘調査報告書』1988）。

41 上野俊雄「堺環濠都市遺跡発掘調査報告―ＳＫＴ75地点―」『堺市文化財調査報告』第21集 1985

42 野田芳正ほか「堺環濠都市遺跡発掘調査報告―市之町東４丁　ＳＫＴ19地点―」『堺市文化財調査報告』第20集　1984

43 注27文献に同じ。なお，その後，報告者は，この堀から寛永通宝が出土していることを重視し，堀の埋没が寛永通宝初鋳の1626年以降であったとしている（嶋谷和彦「堺環濠都市遺跡（ＳＫＴ14）出土の寛永３年～正保４年の陶磁器」『貿易陶磁研究』第６号　1986）。

44 鳥取県教育委員会『島根県の諸職』 1986

45 大橋康二「中世以降の土器生産に関する一考察」『考古学の世界』２　1980

46 笠井利光・内藤俊哉・大塚隆「野中寺」『古市遺跡群』Ⅸ　羽曳野市埋蔵文化財調査報告書　16　1988

47 注19文献に同じ。

48 杉本二郎ほか『山賀（その１）』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1983

49 中川信作・宮本佐知子「徳川氏大阪城跡」『難波宮址の研究』第八　1984

50 野田芳正「小坂遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第12集　1983

51 注28文献に同じ。

52 荒木田晃重「五十鈴の落葉（十二）」『風俗畫報』第243号　1902

53 乙羽生「京土産　其二」『風俗畫報』第70号　1894

54 「維新前京都正月の樣」『風俗畫報』第３号　1889

55 宮島春齋「京都賣物屋風俗（續）」『風俗畫報』第154号　1897

京都大学構内遺跡調査研究年報　1986年度

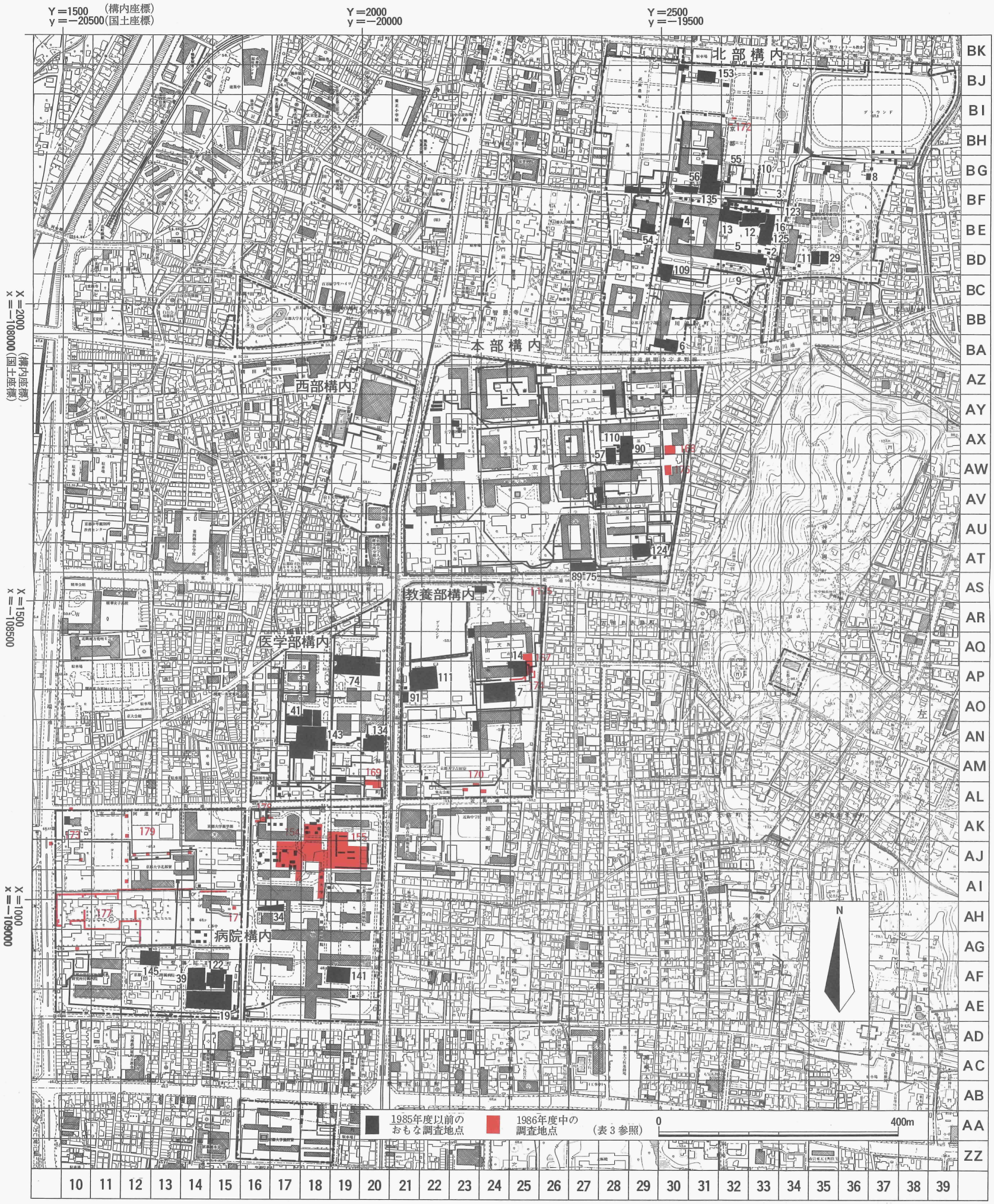
図　　版

1　京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点

2～11　京都大学病院構内AJ18・AJ19区

12・13　京都大学教養部構内AP25区

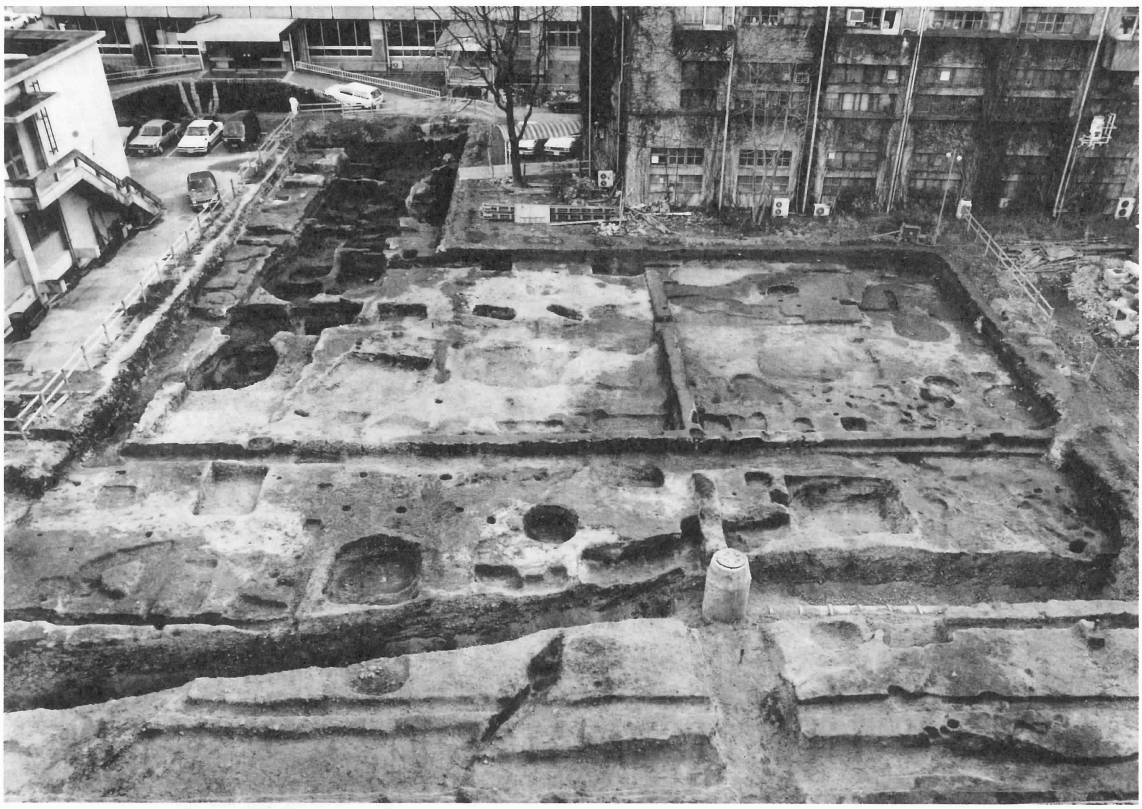
14・15　京都大学本部構内AX30区



図版1　京都大学吉田キャンパスの発掘調査地点

図版二　京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区

1　ＡＪ19区全景（西から）

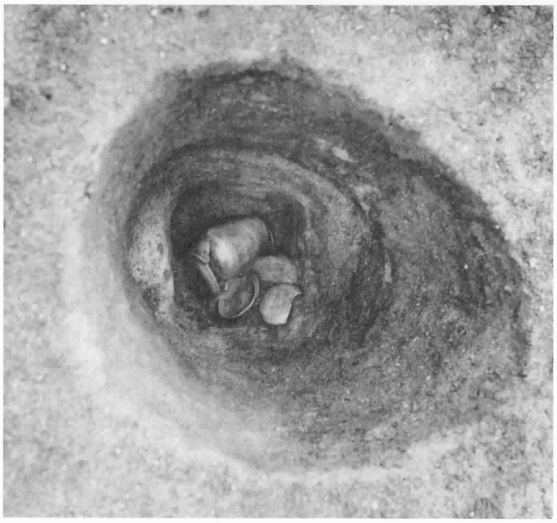


2　ＡＪ18区西半全景（北から）

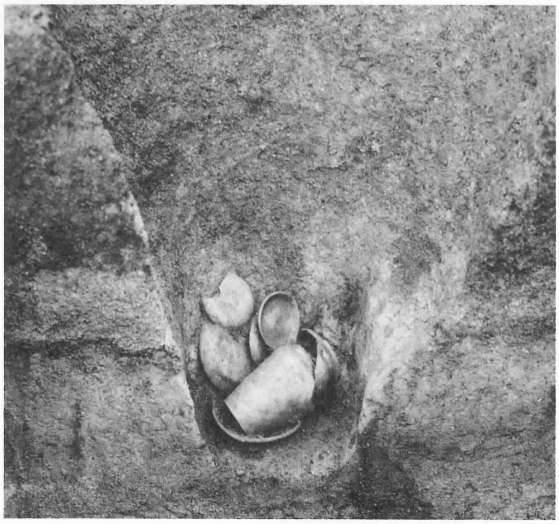
図版三　京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区

1　土坑ＳＫ１（南から）

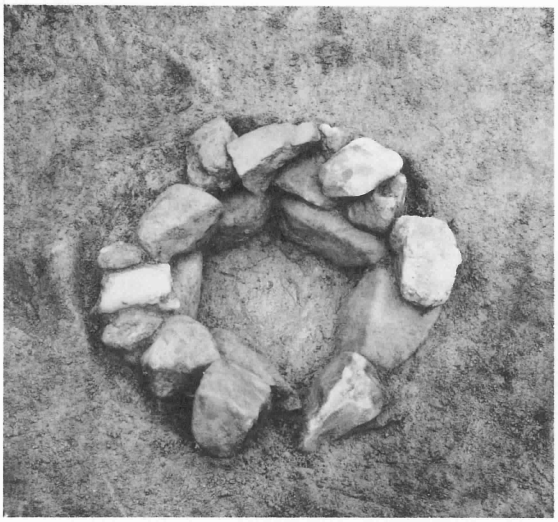
2　井戸ＳＥ17（南から）



3　土坑ＳＫ６（東から）



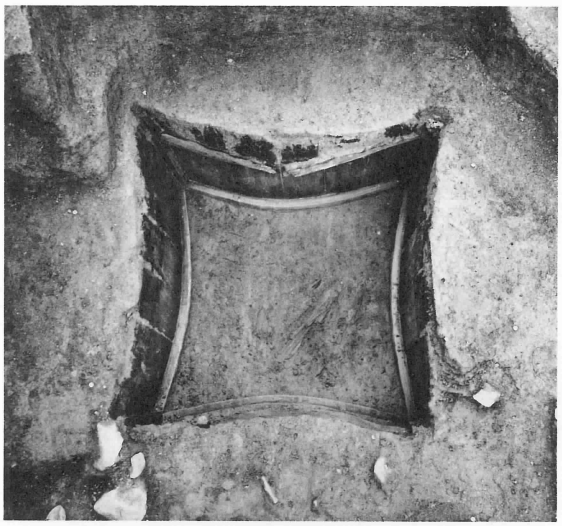
4　土坑ＳＫ６（西から）



5　井戸ＳＥ15（東から）

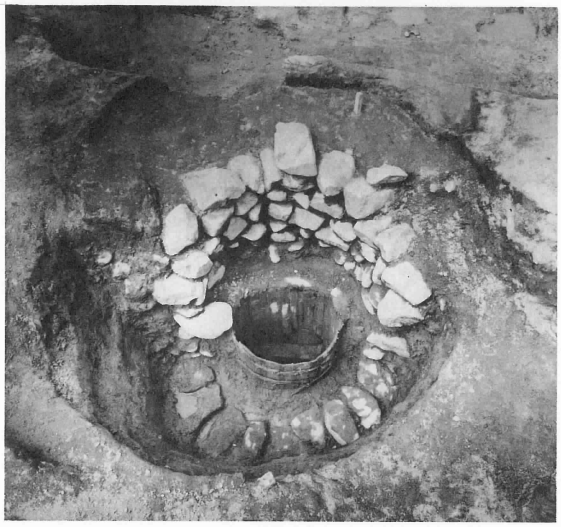
6　井戸ＳＥ18（南東から）

図版四　京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区

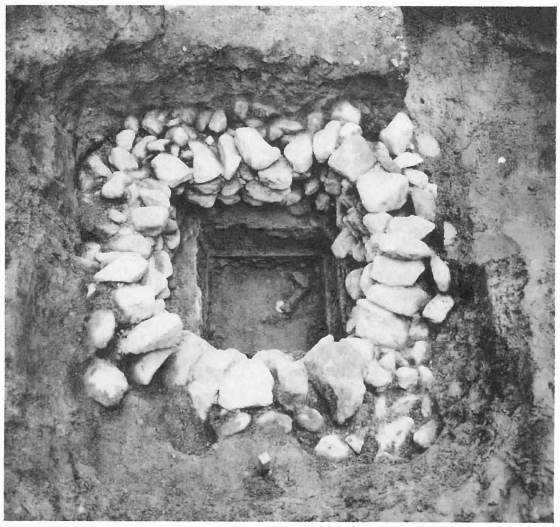


1　井戸ＳＥ５（北から）

2　井戸ＳＥ13（北から）



3　井戸ＳＥ22（南から）



4　井戸ＳＥ16（南から）

5　井戸ＳＥ10（東から）

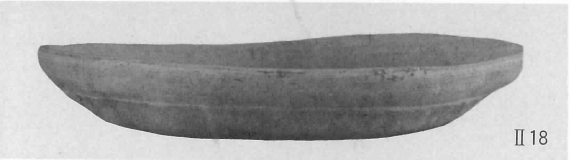
6　井戸ＳＥ７（南東から）

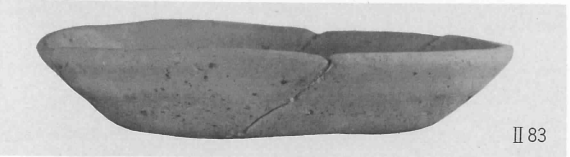
図版五　京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区

1　土取り穴ＳＸ11（北から）

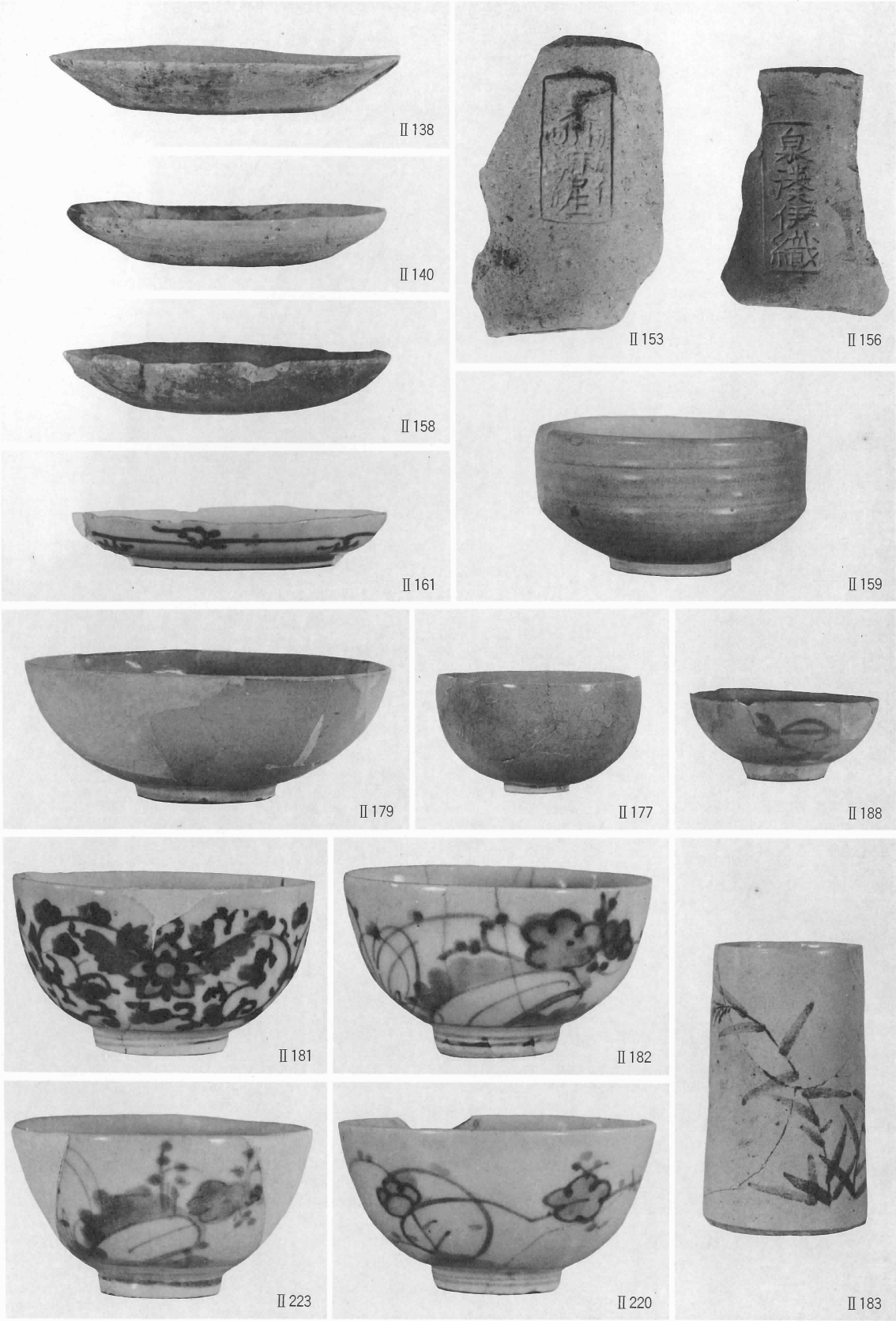
2　土取り穴ＳＸ１・ＳＸ２（南から）

3　土取り穴ＳＸ９・ＳＸ10（北から）

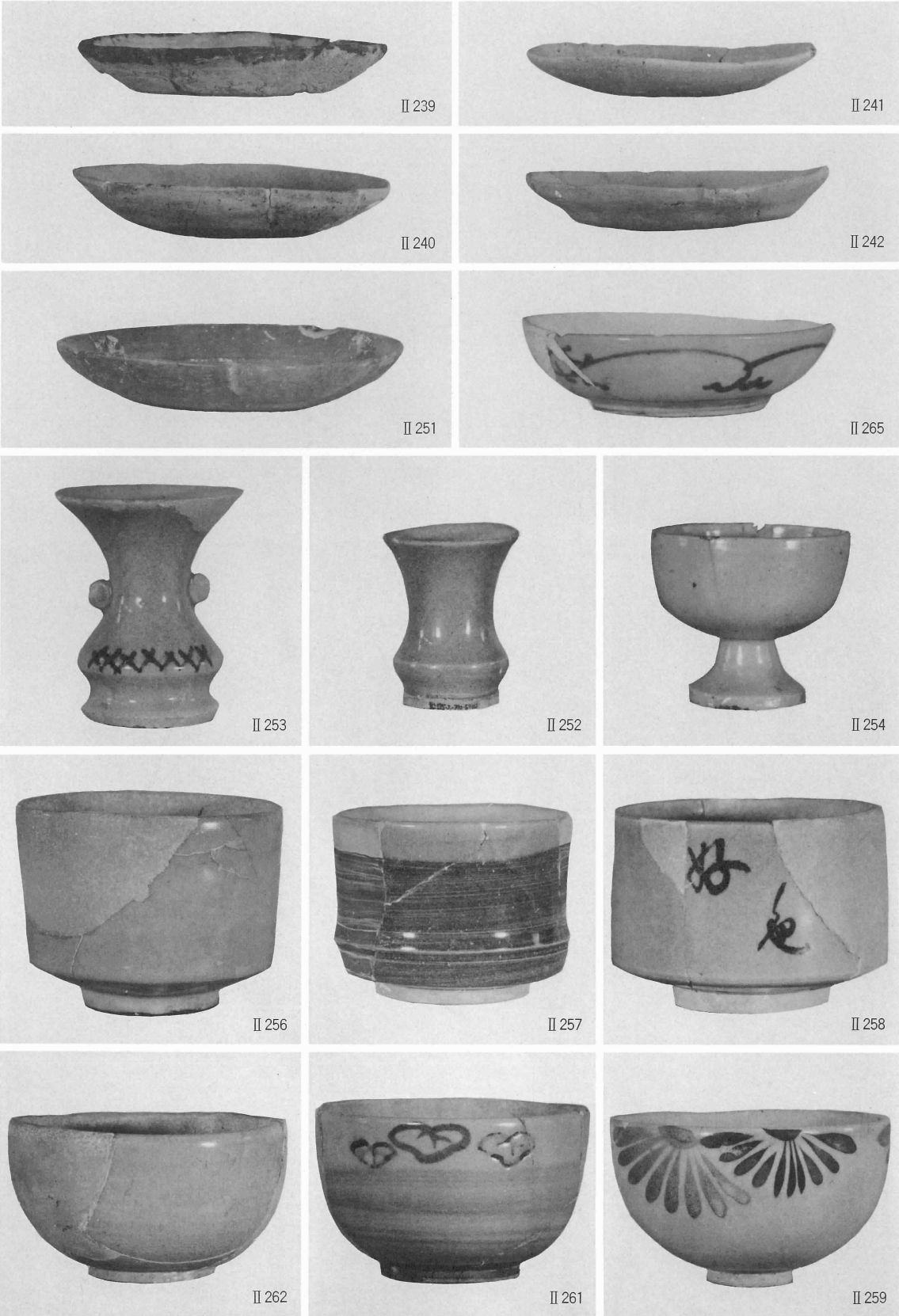




ＳＫ１出土遺物（Ⅱ１～Ⅱ３土師器），ＳＥ13出土遺物（Ⅱ54灰釉系陶器），ＳＥ24出土遺物（Ⅱ18・Ⅱ25土師器，Ⅱ33瓦器），ＳＫ６出土遺物（Ⅱ81・Ⅱ83・Ⅱ84・Ⅱ88土師器）

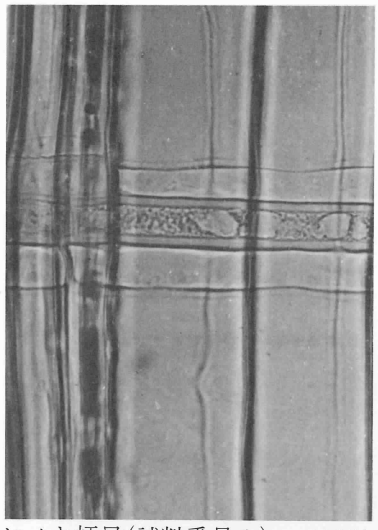


ＳＸ２出土遺物（Ⅱ138・Ⅱ140・Ⅱ153・Ⅱ156土師器，Ⅱ158・Ⅱ159陶器，Ⅱ161磁器），
ＳＸ９出土遺物（Ⅱ177・Ⅱ179・Ⅱ183陶器，Ⅱ181・Ⅱ182磁器），ＳＸ７出土遺物（Ⅱ188磁器），
ＳＸ10出土遺物（Ⅱ220・Ⅱ223磁器）

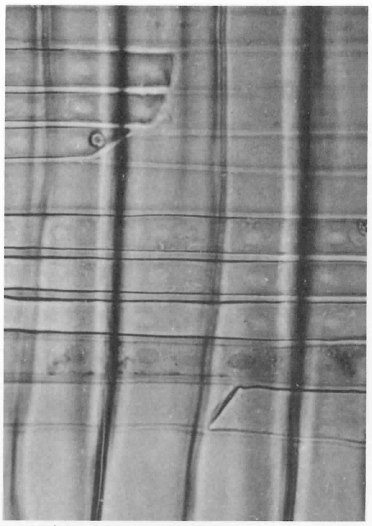


ＳＫ２出土遺物（Ⅱ239～Ⅱ242土師器，Ⅱ251～Ⅱ253・Ⅱ257～Ⅱ259陶器，Ⅱ254・Ⅱ256・Ⅱ261・Ⅱ262・Ⅱ265磁器）

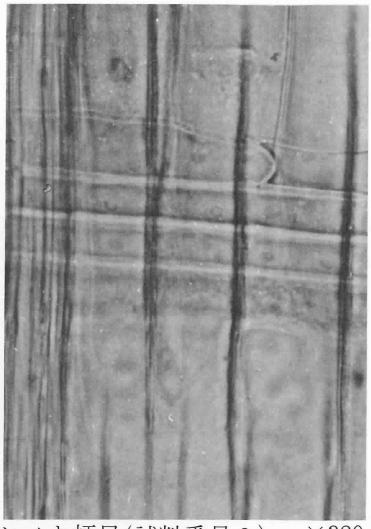
図版九　京都大学病院構内AJ18・AJ19区



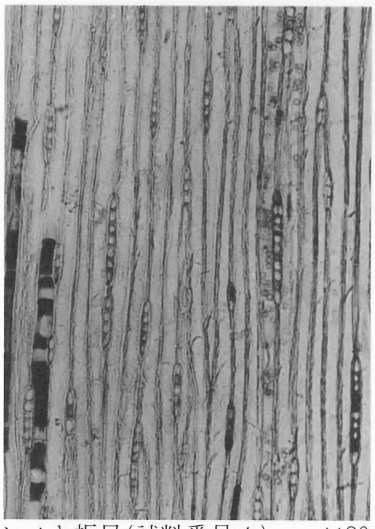
ヒノキ柾目(試料番号1)　×320



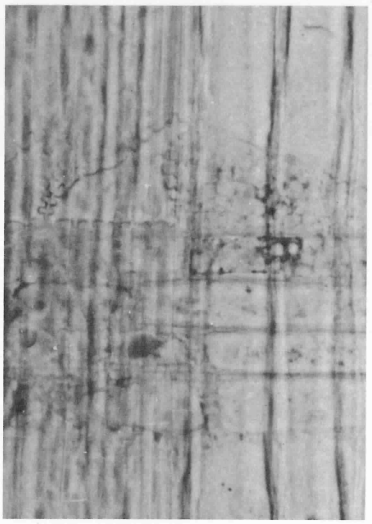
スギ柾目(試料番号2)　×320



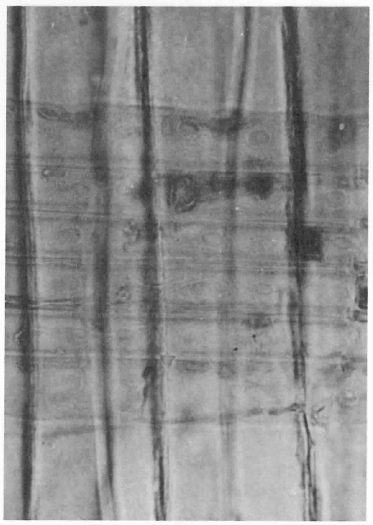
ヒノキ柾目(試料番号3)　×320



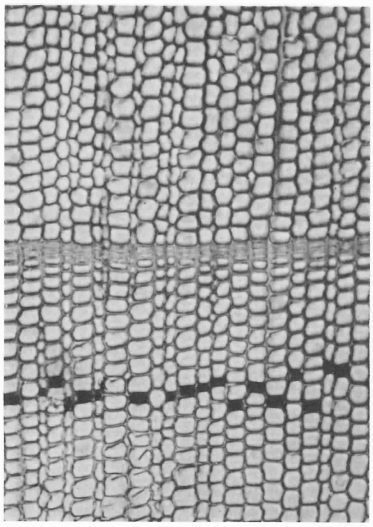
ヒノキ板目(試料番号4)　×80



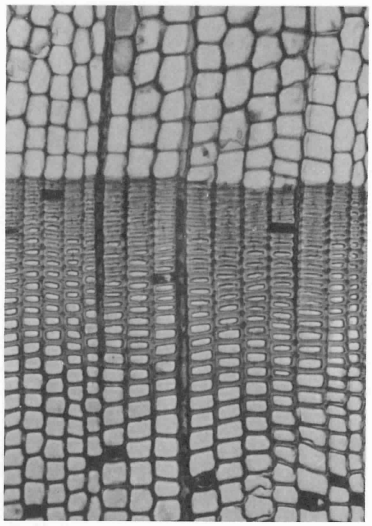
モミ柾目(試料番号5)　×320



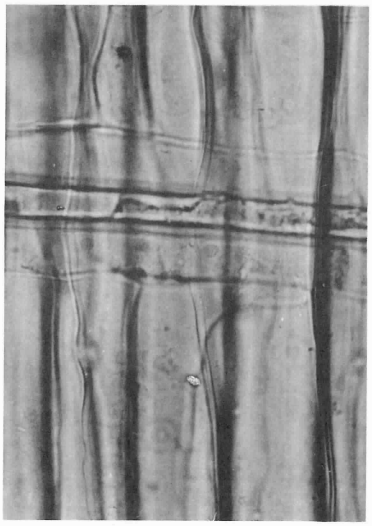
スギ柾目(試料番号6)　×80



ヒノキ木口(試料番号7)　×80

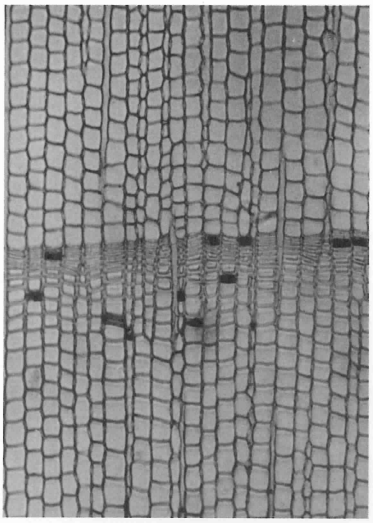


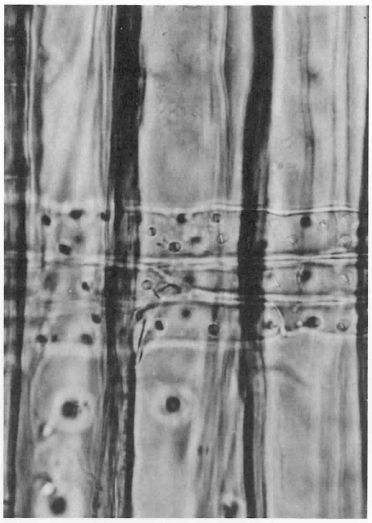
スギ木口(試料番号9)　×320

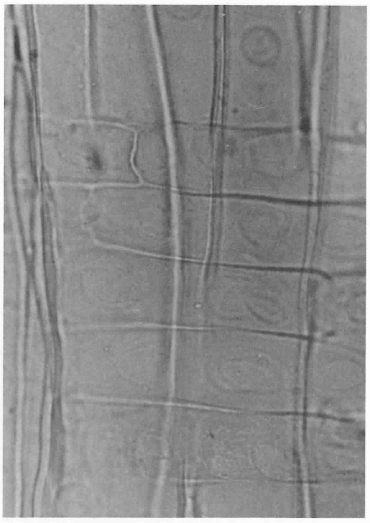


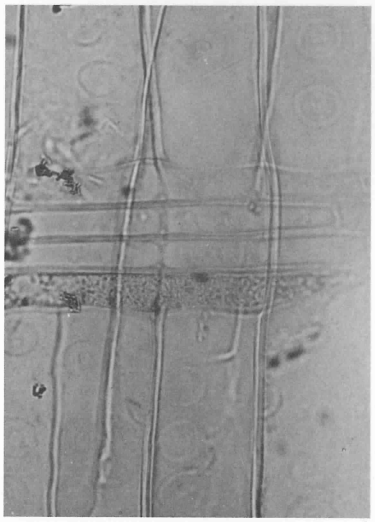
ヒノキ柾目(試料番号10)　×80

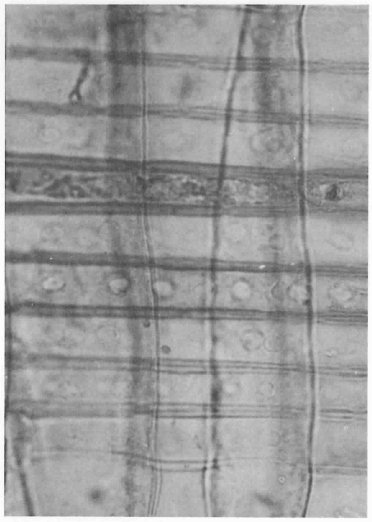
図版一〇　京都大学病院構内AJ18・AJ19区

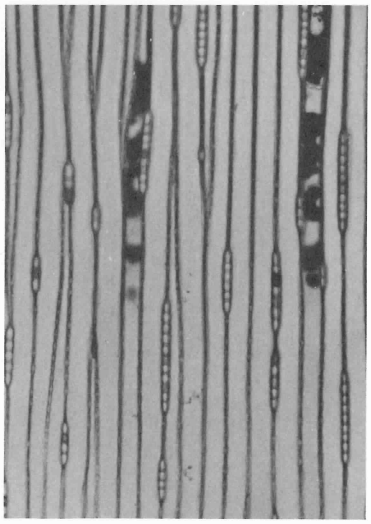

ヒノキ木口(試料番号11)　×80

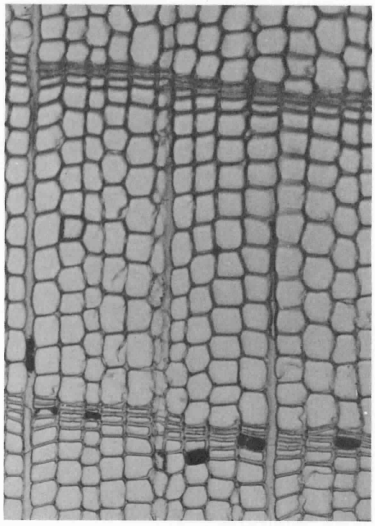

ヒノキ柾目(試料番号13)　×320

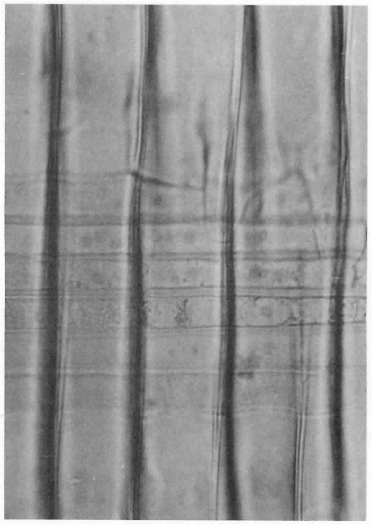

コウヤマキ柾目(試料番号14)　×320

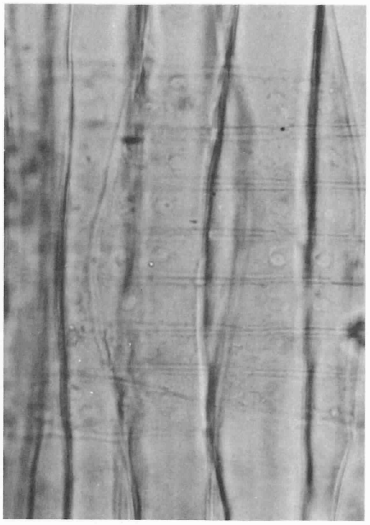

ヒノキ柾目(試料番号15)　×320


スギ柾目(試料番号16)　×320

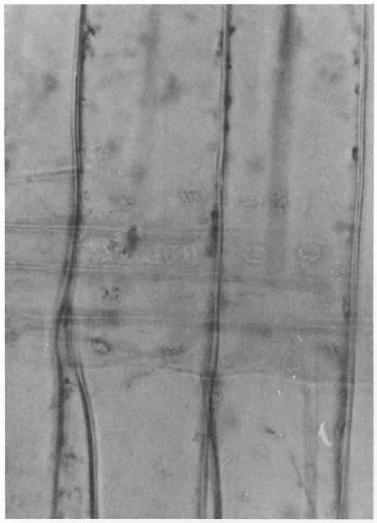

ヒノキ板目(試料番号17)　×80


ヒノキ木口(試料番号18)　×80

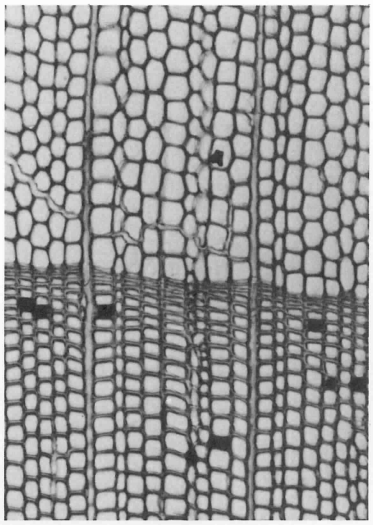

ヒノキ柾目(試料番号19)　×320


スギ柾目(試料番号20)　×320

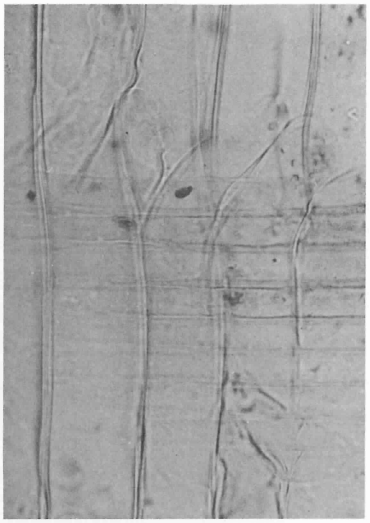
図版一一　京都大学病院構内AJ18・AJ19区



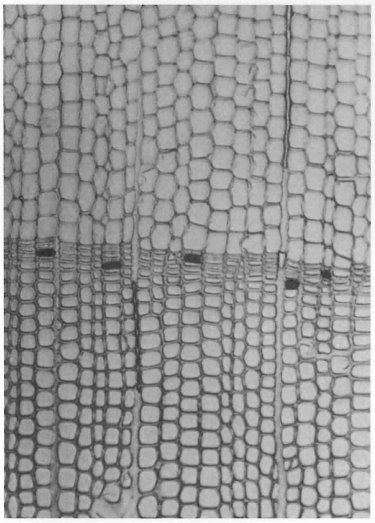
スギ柾目(試料番号21)　×320



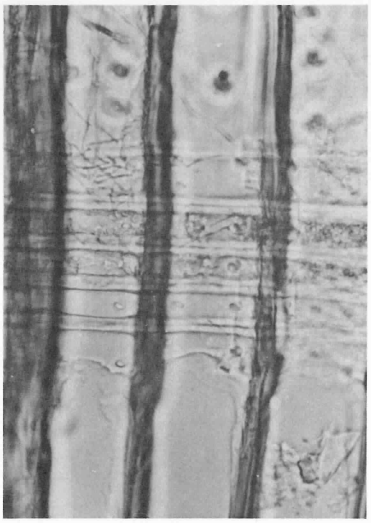
ヒノキ木口(試料番号22)　×80



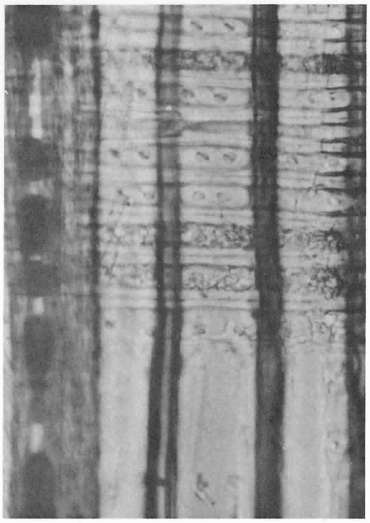
ヒノキ柾目(試料番号23)　×320



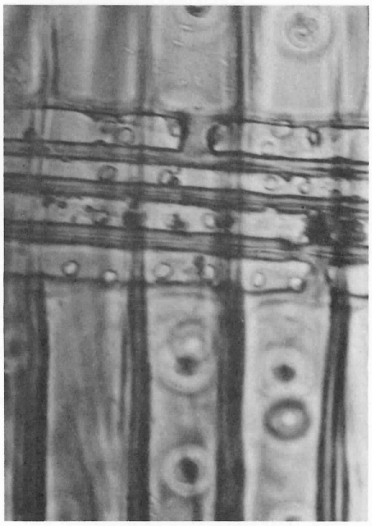
ヒノキ木口(試料番号24)　× 80



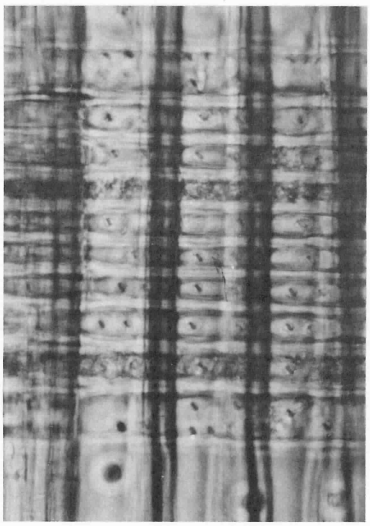
ヒノキ柾目(試料番号25)　×320



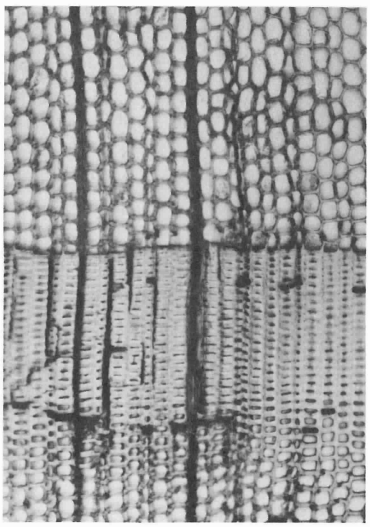
ヒノキ柾目(試料番号26)　×320



スギ柾目(試料番号27)　×320



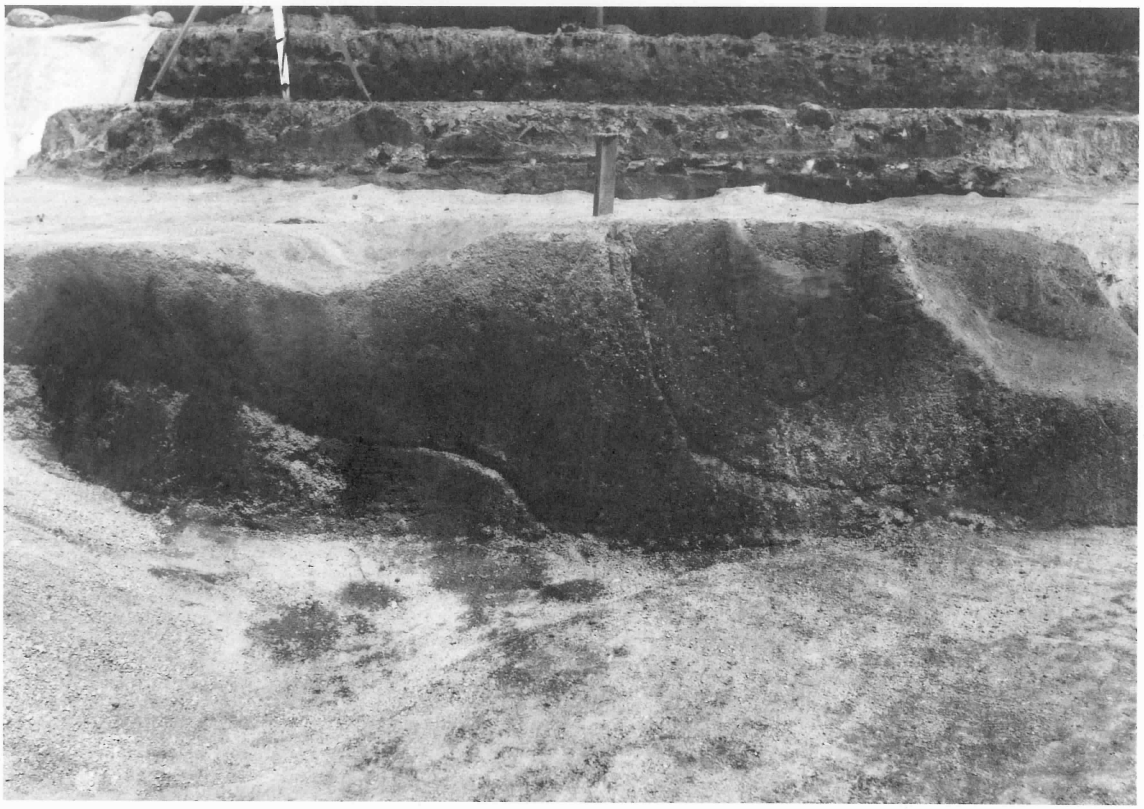
ヒノキ柾目(試料番号28)　×320



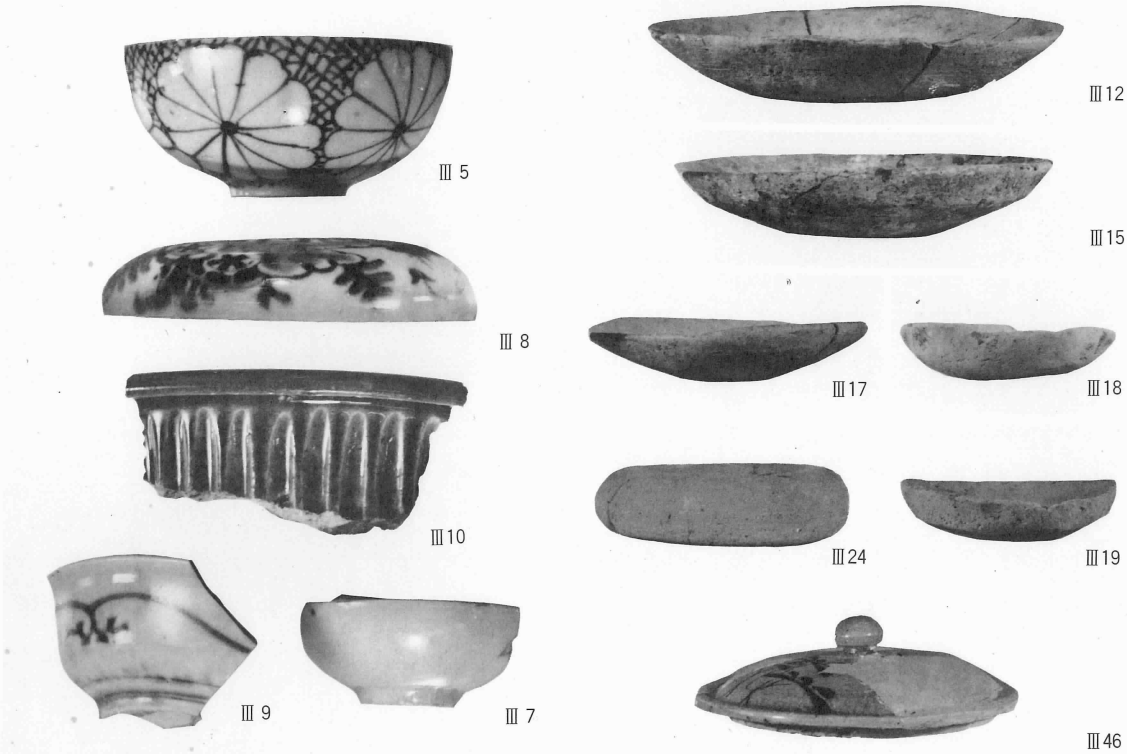
スギ木口(試料番号29)　×80

図版一二　京都大学教養部構内ＡＰ25区

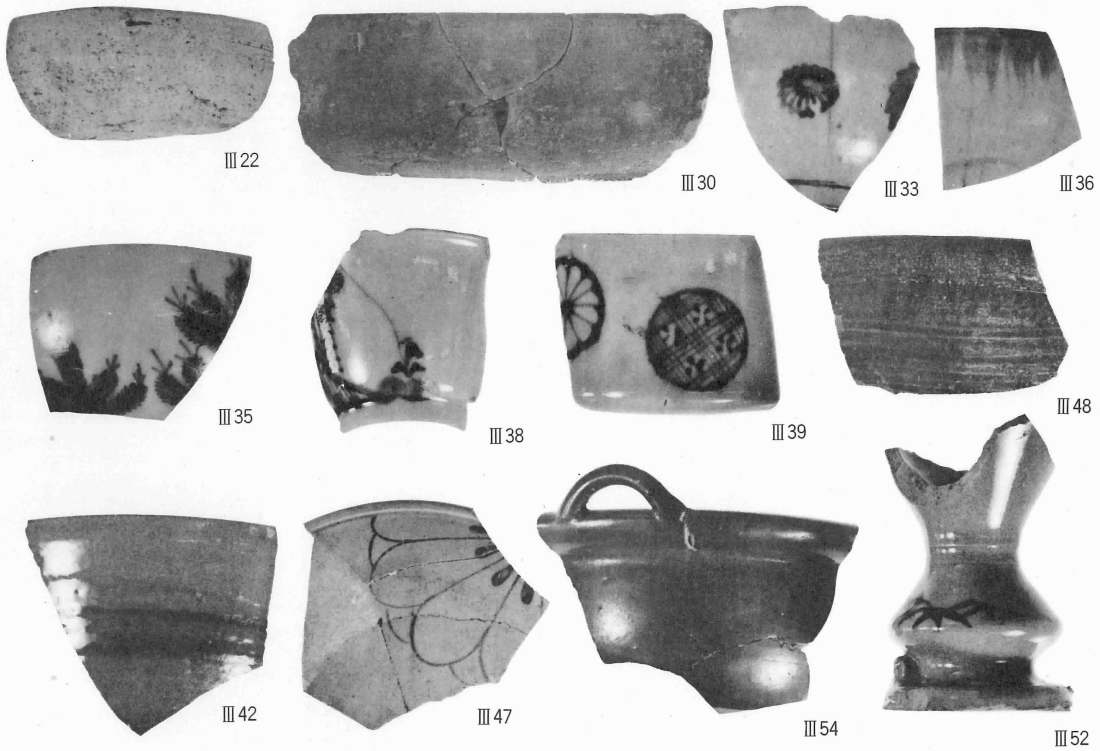
1　溝ＳＤ３・ＳＤ４（西から）



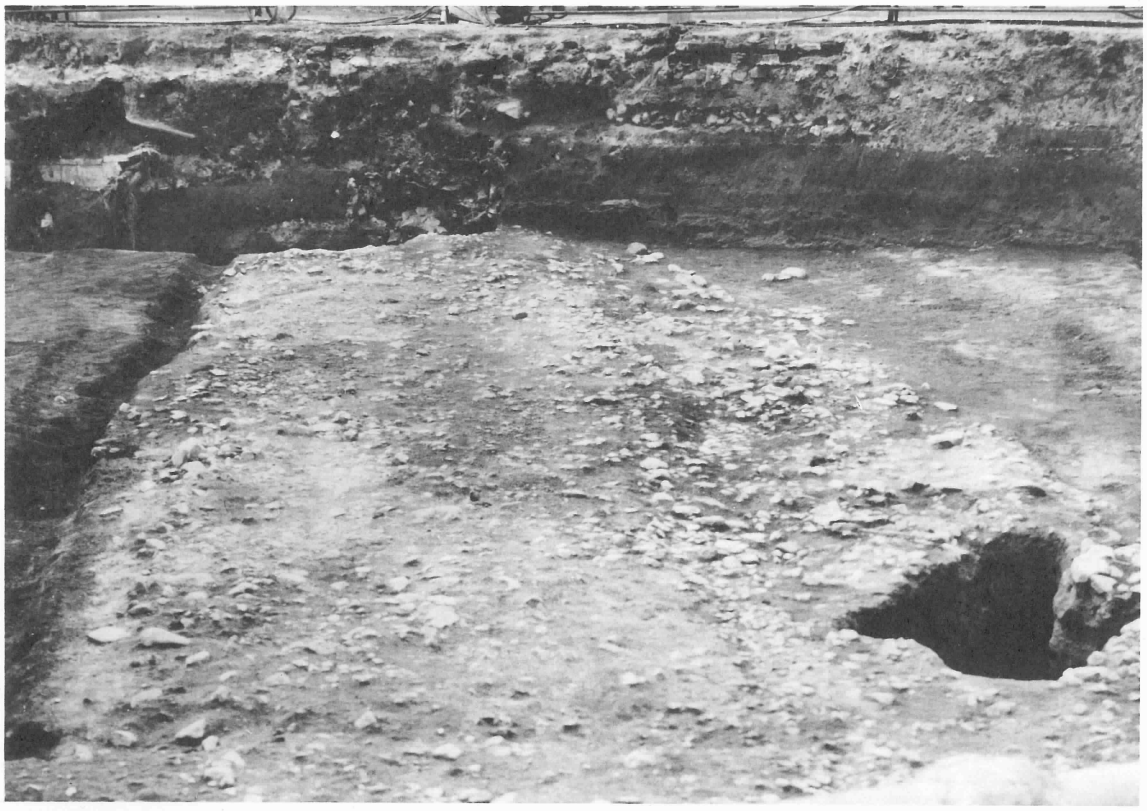
2　調査区南北畔の層位（西から）



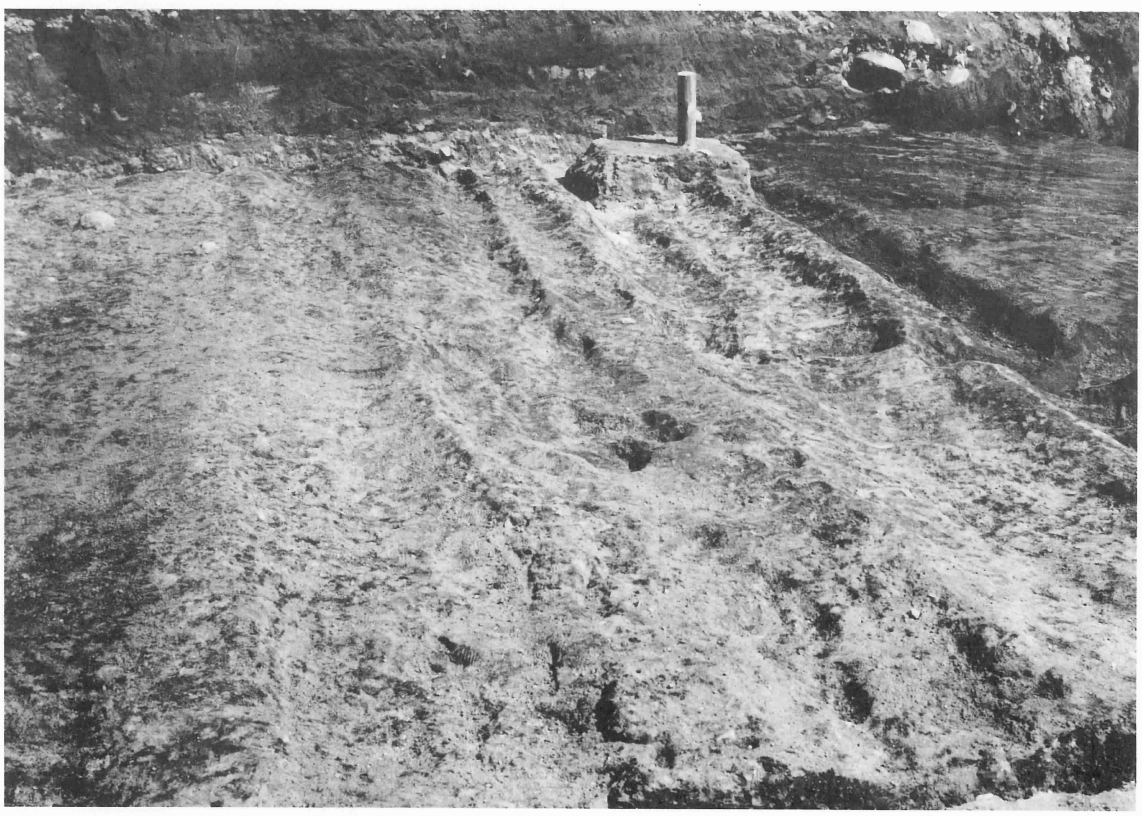
1　ＳＤ１出土遺物（Ⅲ５・Ⅲ７～Ⅲ９磁器，Ⅲ10陶器），
ＳＤ２出土遺物（Ⅲ12・Ⅲ15・Ⅲ17～Ⅲ19・Ⅲ24土師器，Ⅲ46陶器）



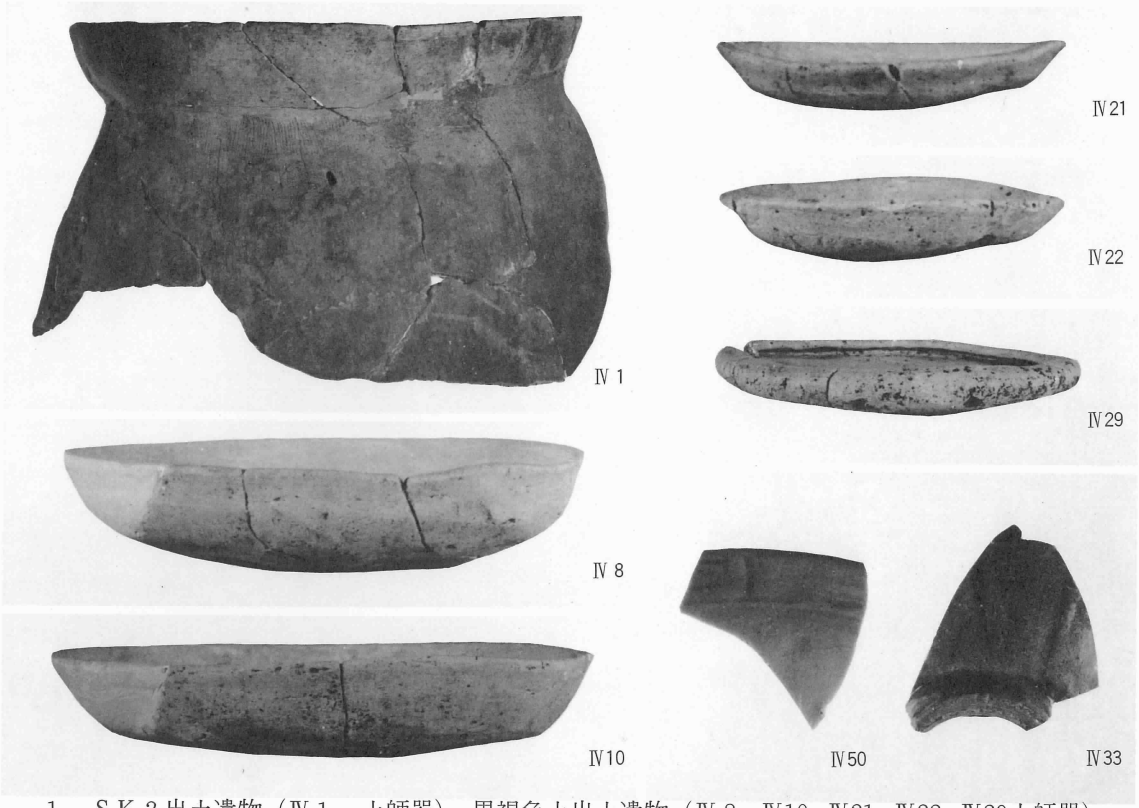
2　ＳＤ２出土遺物（Ⅲ22・Ⅲ30土師器，Ⅲ33・Ⅲ35・Ⅲ36・Ⅲ38・
Ⅲ39磁器，Ⅲ42・Ⅲ47・Ⅲ48・Ⅲ52・Ⅲ54陶器）



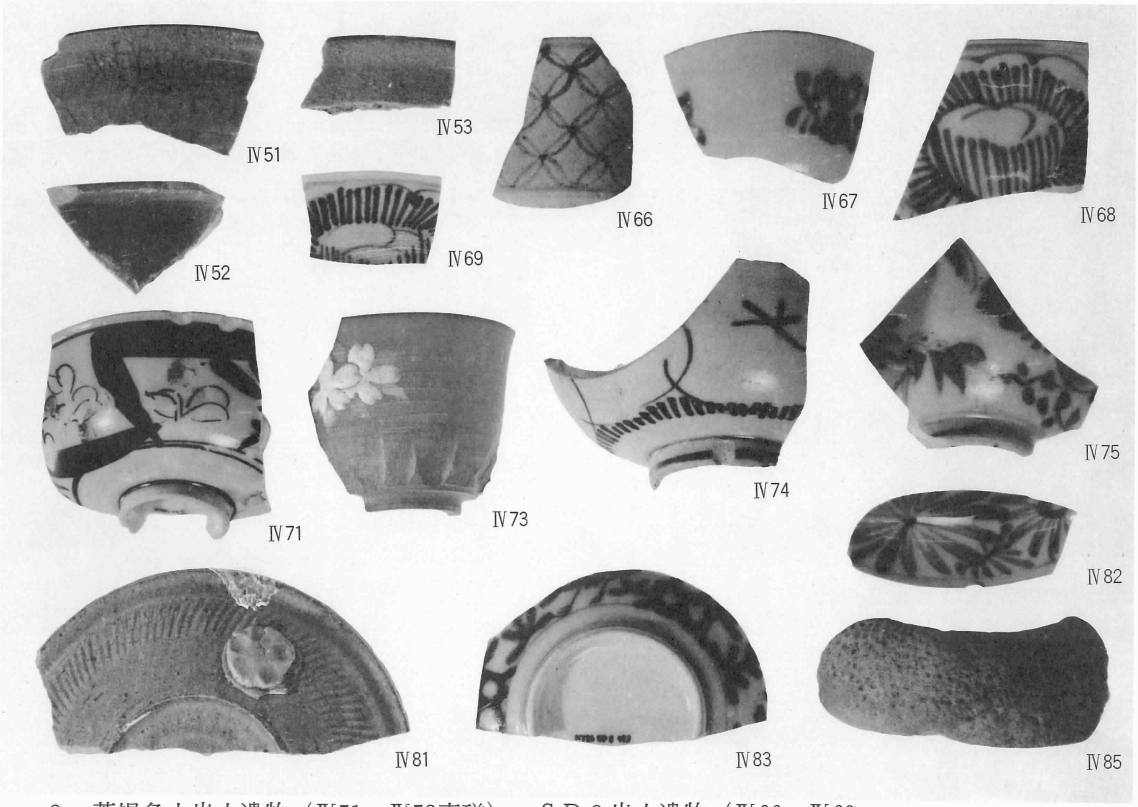
1　道路ＳＦ１路面２上面（東から）



2　道路ＳＦ１路面１の轍（西から）



1　ＳＫ２出土遺物（Ⅳ１・土師器），黒褐色土出土遺物（Ⅳ８・Ⅳ10・Ⅳ21・Ⅳ22・Ⅳ29土師器），ＳＦ１路面２出土遺物（Ⅳ33青磁），茶褐色土出土遺物（Ⅳ50青磁）



2　茶褐色土出土遺物（Ⅳ51～Ⅳ53青磁），ＳＤ８出土遺物（Ⅳ66～Ⅳ69・Ⅳ71・Ⅳ74・Ⅳ75・Ⅳ82・Ⅳ83磁器，Ⅳ73・Ⅳ81陶器，Ⅳ85土師器）

1989年3月30日発行

京都大学構内遺跡調査研究年報

1986年度

編集
発行　京都大学埋蔵文化財研究センター
京都市左京区吉田本町

印刷
製本　山代印刷株式会社
京都市上京区寺之内通小川西入

正 誤 表

京都大学構内遺跡調査研究年報　1986年度

頁	行	誤	正
10	18	平気底味	平底気味
47	1	ＳＦ１の路面２	ＳＦ１の路面１
49	1	ＳＦ２の路面１	ＳＦ１の路面２
63	5	急速で	急速に
67	1	心要に	必要に
68	22,23	幅	輻
82	16	離形材	離型材